

血曼陀羅紙帳武士

国枝史郎

青空文庫

腰の物拝見

「お武家お待ち」

という声が聞こえたので、伊東頼母たのもは足を止めた。ここは甲州街道の府中から、一里ほど離れた野原で、天保××年三月十六日の月が、朧おぼろに照らしていた。頼母は、江戸へ行くつもりで、街道筋を辿たどって来たのであったが、いつどこで道を間違えたものか、こんなところへ来てしまったのであった。声は林の中から来た。頼母はそつちへ眼をやった。林の中に、白い方形の物が釣つてあった。紙帳しちやうらしい。暗い林の中に、灰白く、紙帳が釣つてある

様子は、巨大な炭壺の中に、豆腐でも置いたようであつた。声は紙帳の中から来たようであつた。

塚原卜伝が武者修行の際、山野に野宿する時、紙帳を釣つて寝たということなどを、頼母は聞いていたので、林に紙帳の釣つてあることについては、驚かなかつたものの、突然、横柄な声で呼び止められたのには、驚きもし腹も立てた。それで黙つていた。すると、紙帳の裾が揺れ、すぐに一人の武士が、姿を現わした。武士の身長たけが高いので、紙帳を背後うしろにして立つた形すがたは「中」という字に似ていた。

「お腰の物拝見出来ませうまいかな」と、その武士は、頭巾で顔を包んだままで云つた。

「黙らっしやい」と頼母は、とうとう癩癩を破裂させて叫んだ。

「突然呼び止めるさえあるに、腰の物を見せろとは何んだ！ 成らぬ！」

「そう仰せられずに、お見せくたされ。相当の物をお差しでござろう」

「黙れ！ 無礼な奴、ははア、貴様、追剥ぎだな。腰の物拝見などと申し、近寄り、懐中物を奪うつもりであろう。ぶった斬るぞ！」

「賊ではござらぬ。ちと必要あつて腰の物拝見したいのじや。何をお差しかな。まさか天^{あまくに}国はお差しではござるまいが」

「ナニ、天国？ あツはツはツ、何を申す、馬鹿な。天国や天^{あまの}」

座^ざなど、伝説中の人物、さような刀鍛冶など、存在したことごと
ざらぬ。鍛えた刀など、何んであろうぞ」
すると武士は、頭巾の中で、錆^{さび}のある、少し嘎^{しわが}れた声で笑った
が、「貴殿も、天国不存在論者か。馬鹿者の一人か。まアよい、
腰の物お見せなされ」と、近寄つて来た。

頼母は、傍若無人といおうか、自信ある行動といおうか、相手
の武士が、無造作に、近寄つて来る態度に圧せられ、思わず二、
三步退いたが、冠っていた編笠を刎^のね退け、刀の柄へ手をかけた。
父の敵^{かたき}を討つまでは、前髪も取らぬと誓い、それを実行している
頼母は、この時二十一歳であつたが、前髪を立てていた。当時の
若衆形、沢村あやめに似ていると称された美貌は、月光の中で蒼

褪めて見えた。

武士は、頼母の前、一間ばかりの所で立ち止まったが、「まだお若いのだ。若い貴殿を蜘蛛くもの餌食えじきにするのも不愆、斬るのは止めといたすが、云い出したからには、腰の物は拝見いたさねばならず……眠らせて！」

「黙れ！」

つばおと
鏢音つばおとがした！

「はーッ」と頼母は、思わず呼吸いきを引いた。武士によつて鳴らされた鏢音が、神魂とに徹とおつたからであつた。

猛然と頭巾が逼つて来た。頭巾の主の体が、怒濤のように殺到して来た。そうして次の瞬間には、頼母は、地上へ叩き付けられ

ていた。体当たりを喰らったのである。

俯向けに地に倒れた頼母は、（俺はここで死ぬのか。死んでは困る。俺は父の敵五味左門を討たなければならないのだから）と思つた。

そういう彼の眼に見えたものは、彼の両刀を調べている武士の姿であつた。そうして、その武士の背後の地面から、瘤こぶのように盛り上がっている古塚であつた。その古塚は、数本の松と、一基いしぶみの碑とを、頂きに持つていた。そうして……しかし、頼母の意識は朦朧もうろうとなつてしまつた。

おまいり
参詣に來た娘

その頼母が、誰かに呼ばれているような気がして、正氣づいた時、まず見えたのは、自分の顔へ、近々と寄せている、細い新月のような眉、ういうい初々しい半弓形の眼の、若い女の顔であった。円味の勝った頤おとがにつづいて、剥むき胡桃くるみのような、肌理きめの細かな咽喉が、鹿かの子この半襟から抜け出している様子は、艶なまめかしくもあれば清らかでもあった。

「もし、お武家様、お気づかれましたか」と娘は云った。

頼母は弱々しく頷いて見せ、そうして、（俺はこの娘に助けられたらしい）と思った。しかしすぐに、紙帳から出て来た武士のことが氣にかかった。それで、まだ弛ゆるく、自由になりにくい首を

やつと廻して、林の方を見た。どんぐりや櫟くぬぎや柏かしわによつて形かたちづ

成くられてゐる雑木林には、今は陽があたつていて、初葉さえ附

けていない裸体はだかの幹や枝が、紫ばんだ樺色かばに立ち並んでいたが、

紙帳は釣つてなかつた。（夜の間よに立ち去つたのだな。それにしてもあの武士、何者なのであろう？ 突然紙帳の中から出て来て、

刀を見せろと云い、見せないといつたら、体当たりをくれ、俺を氣絶させおつた。紙帳を林の中に釣つて寝ていたところから察すると、武者修行の者らしいが、着流しで、頭巾を冠つていた様子から推すと、そうでもないらしい）頼母は、頭に残つてゐる疲労の中で、こんなことを考えた。（それにしても、彼と俺との、武う技の相違はどうだつたらう）これを思うと頼母は、赧はにかくならざる

を得なかつた。(大人と子供といおうか。世には恐ろしい奴があればあるものだ)

この時娘が、

「野中の道了様へお詣りに参りましたところ、あなた様が気絶をしておいでなさいましたので、ご介抱申し上げたのでございます。でも正氣づかれて、ほんとうに嬉しゅうございます」

と云つた。細々としていて、優しい、それでいて寂しみの籠もつている声であつた。

頼母は娘の顔へ眼をやり、

「忝かたじけのうございしました。おかげをもちまして、命びろいたしました」と云つたが、(何んだ俺はまだ寝ているではないか)と

気づき、起き上がろうとした。しかし、倒れた時、体をひどく打つたらしく、節々が痛んで、なかなか起き上がれなかった。

「いえいえ、そのままおいでなさいませ。お寝よったままで。どうせそのお体では、すぐにご出立は出来ませぬ。むさくるしい所ではございませぬが、妾わたしの家で、二、三日ご逗留し、ご養生なさいませ。いえいえご遠慮には及びませぬ。よく妾の家へは、旅のお武家様がお立ち寄りでございませぬ。父が大変喜びますので。でも、家は一里ほど離れておりますので、お徒歩ひろいではお困りでございませぬ。乳母ばあやがおりますゆえ、町へやり、駕籠をひろわせて参りませぬ。……乳母！」と、娘は立ち上がりながら呼んだ。

五十あまりの、品のよい婦おんなが、古塚のような小丘の裾に佇んで

いたが、すぐに寄つて来た。それへ娘は何やら囁いた。

「はい、お嬢様、かしこまりましたでございます」乳母はそう云つたかと思うと、雑木林を巡つて歩いて行つた。

娘は、しばらくそれを見送つていたが、やがて屈かがむと、地に置いてあつた線香の束を取り上げ、「どれ、それでは妾は、ちよつと道了様へ。……」と云い、古塚のような、小丘の方へ歩いて行つた。

(あれが道了様なのか)と、頼母は、それでもようやく起き上がった体を、小丘の方へ向け、つくづくと眺めた。それは、高さ二間、周囲まわり十間ぐらいの大岩で出来ている塚であつたが、その面に、苔だの枯れ草だの枯れ葉だのがまとい付いている上に、土つち壤が蔽

うているので、早速には、岩とは見えなかつた。塚の頂きに立っている碑いしぶみには、南無妙法蓮華經と、髭題目ひげが刻まれていた。碑は、歲月と風雨とに損われて、諸所ところどころ欠けている高さ六尺ぐらいの物で、色は黝くろかつたが、陽に照らされ、薄光つて見えた。その碑の面を、搓よれたり縛もつれたりしながら、蒼白い、漠とした物が立ち昇つて行つた。娘が供えた線香の煙りであつた。煙りの裾、碑の前に、つましく屈み、合掌しているのが娘で、その姿が、数本の小松こまつに遮さへぎられていたので、かえつて趣おもむき深く眺められた。

「絵だ」と、頼母は、娘の赤味の勝つた帯などへ眼をやりながら、
眩くらいた。

古屋敷の古浪人

乳母ばあやが雇つて来た駕籠に乗り、頼母が、娘の家へ行つたのは、それから間もなくのことで、娘の家は、府中から一里ほど離れたところにあつた。鋤打ちの門や土塀などに囲まれた、それは広ひろ大い屋敷であつたが、いかにも古く、住人も少ないかして、森閑としていた。頼母は、古びた衝つ立ての置いてある玄関から、奥へ通された。

さて、この日が暮れ、夜が更けた時、屋敷の一間から、話し声が聞こえて来た。

畳も古く、襖も古く、広いが取り柄の客間に、一基の燭台が置

いてあつたが、その灯の下で、四人の武士が、酒を飲み飲み、雑談しているのであつた。

「我輩は、ここへ逗留して三日になるが、主人あるじ薪左衛門殿の姿を見たことがない。気がかりともいえれば不都合ともいえるな」と云つたのは、頬に刀傷のある、三十五、六の、片岡という武士で、片手を枕にして、寝そべっていた。

「不都合とはどういう訳か」と、怪訝けげんそうに訊いたのは、それと向かい合つて、片膝を立て、盃をチビチビ嘗めていた、山口という三十年輩の武士で、「只で泊めて貰い、朝酒、昼酒、晩酌まで振る舞われて、まだ不平なのか」

「そうではない。縁も由縁ゆかりもない我らを、このように歓待してく

れながら、主人が顔を出さぬのは不都合……いや、解せぬというのじゃ」

「それは貴公、世間の噂を知らぬからじゃ」

と云つたのは、膝の前にある皿の肴を、さかななお未練らしくせせつていた、五十五、六の、頬髯を生やした、望月角右衛門という武士で、「世間の噂によれば、薪左衛門殿は、ここ数年来、誰にも逢わぬということじゃ」

すると、二十五、六の、南京豆のような顔をした、小林紋太郎という武士が、「それは何故でございましょうかな？　ご病気なので？　それとも……」

「解らぬ」と、角右衛門が云つた。「解らぬのじゃ。さよう、病

気だとの噂もあれば、いつも不在じゃという噂もある」

「いよいよ変じゃ」と云つたのは、片岡という武士で、「さういう薪左衛門殿が、見ず知らずの浪人でも、訪ねて行きさえすれば、泊めてくれ、ご馳走をしてくれるとは……」

「よいではないか」と、角右衛門が、抑えるような手つきをし、

「主人がどうあろうと、我らにとっては関かまわぬことじゃ。泊めて

くれて、ご馳走してくれて、出立の際には草鞋わらじ錢までくれる。い

やもう行き届いた待遇もてなし。それをただ我らは、受けておればよい。

我らにとっては大旦那よ。主人の秘密など、剖あばかぬこと剖かぬこ

と」

「さうともさうとも」と合い槌を打つたのは、山口という武士で、

「その日その日を食いつなぐだけでも大わらわの我ら、他人の秘ひしよしと密事など、どうでもよかよか。いや全くこの頃の世間、世智辛おとしくなつたぞ。百姓や町人めら、なかなか我らの威嚇おどしや弁口に、乗らぬようになつたからのう」

「以前むかしはよかつた」と感慨深く云つたのは、例の望月角右衛門という武士で、「百姓も町人も、今ほど浪人慣れていず、威嚇などにも乗りやすく、よく金を出してくれたものよ。それに第一、浪人の氣組が違つていた。今の田舎稼ぎの浪人など、自分の方からビクビクし、怖こわ々強請こわゆすりかけているが、以前むかしの浪人とくると、抜き身の槍や薙刀を立て、十人十五人と塊かたまつて、豪農だの、郷士だのの屋敷へ押しかけて行き、多額の金子きんすを、申し受けたもの

よ

義兄弟の噂

しばらく話が途絶えた。春とはいつても、夜は小寒かつた。各いめい自に出されてある火桶に、炭火ひは充分にいけられていたが、広い部屋は、それだけでは暖まらないのであろう。

と、横手の襖が開いて、老僕がはいつて来、新しい酒を置き無言で立ち去つた。浪人たちは、ちよつと居住居を直したが、老僕あぐらの姿が消えると、また横になつたり、胡坐を搔いたりした。一年の若い武士が、爛徳利を取ると、仲間の盃へ、次々と注いだ。

燭台の皿へ、丁字ちようじが立ったらしく、燈ひのひかり火が暗くなった。それを一人が、箸を返して除去とつた。明るくなつた燈に照らされ、床の間に置いてある矢筒の矢羽根が、雪のように白く見えた。

「その時代には、ずば抜けた豪傑もいたものよ」と、角右衛門が、やがて回顧の想いに堪えないかのような声で、しみじみと話し出した。「もつとも、これは噂で聞いただけで、わしは逢つたことはないのだが、来栖くるす勘兵衛、有賀ありが又兵衛という二人でな、義兄弟であつたそうなの。この者どもとなると、十人十五人は愚か、三十人五十人と隊を組み、槍、薙刀どころか、火縄に点火した鳥銃をさえ携え、豪農富商屋敷へ、白昼推参し、二日でも三日でも居坐り、千両箱の一つぐらいを、必ず持ち去つたものだそうじゃ。と

ころが、不思議なことには、この二人、甲州の大尽、鴨屋方に推参し、三戸前の土蔵を破り、甲州小判大判取り雑まぜ、数万両、他に、刀劍、名画等を幾いくばく何ともなく強奪したのを最後に、世の中から姿を消してしまつたそうじゃ」

「召し捕られたので？」

「それが解らぬのじゃ」

この時、庭の方から、轍わだちでも軋きしるような、キリキリという音が、深夜の静寂しじまに輝ひびでも入れるかのように聞こえて来た。武士たちは顔を見合わせた。この者どもは、永の浪人で、仕官の道はなく、生活たつきの法に困こじたあげく、田舎の百姓や博徒の間を巡り歩き、強ゆ請すりや、賭場防ぎをして、生活くらしをしている輩やからであつたが、得体の知

れない、この深夜の軋り音には気味が悪いと見え、呼吸を呑んで、ひっそりとなつた。軋り音は、左の方へ、徐々に移つて行くようであつた。不意に角右衛門が立ち上がった。つづいて三人の武士が立ち上がり、揃つて廊下へ出、雨戸を開けた。四人の眼へはいつたものは、月夜の庭で、まばらの植え込みと、その彼方の土塀とが、人々の眼を遮つた。しかし、軋り音の主の姿は見えず、ずっと左手奥に、はみ出して作られてある部屋の向こう側から、音ばかりが聞こえて来た。でも、それも、次第に奥の方へ移つて行き、やがて消え、吹いて来た風に、植え込みに雑じつて咲いていく桜が、一斉に散り、横撲りに、四人の顔へ降りかかった。四人の者は、そつと吐息をし、府中の町が、一里の彼方、打ち開けた

田畑の末に、黒く横よこたわ仆っているのを、漠然と眺めやった。町外れの丘の一所が、火事かのように赤らんでいる。

「そうそう」と角右衛門が云った。「今日から府中は火祭りだったのう。あの火がそうじゃ」

「向こう七日間は祭礼つづき、町はさぞ賑わうことであろう——これは片岡という武士であつた。」

「府中の火祭り賭場は有名、関東の親分衆が、駒箱こまばを乾児衆こんごに担がせ、いくらともなく出張つて来、掛け小屋で大きな勝負をやる筈。拙者、明日は早々ここを立つて、府中あそこへ参るつもりじゃ」これは山口という武士であつた。

「わたくしも明日は府中へ参ります所存。この頃中不漁しけで、生なまも

物のにもありつかず、やるせのうござれば、親分衆に取り持つて貰つて……」

と、紋太郎が云つた。生物というのは女のことらしい。

血蜘蛛の紙帳

それを聞くと、角右衛門は笑つたが、

「貴殿方は、どの親分のもとへ参らるる気かな。拙者は、松戸の五郎蔵殿のもとへ参るつもりじゃ。関東には鼻を突くほど、立派な親分衆がござるが、五郎蔵殿ほど、我々のような浪人者を、いたわつてくださる仁はござらぬ」

「それも、五郎蔵殿が、武士あがりだからでございましょうよ」

酔った頬を、夜風に^{なぶ}颯られる快さからか、四人の者は、雨戸の間に、^あ目白のように押し並び、しばらくは雑談に耽ったが、やがて部屋の中へはいった。とたんに、

「やッ、腰の物が見えぬ！」と、角右衛門が、狼狽したように叫んだ。

皿や小鉢や爛徳利の取り散らされてある座敷に突っ立ったまま、四人は、また顔を見合わせた。わずかな^{あいだ}時間に、四人の刀が、四本ながら紛失しているではないか。

「盗まれたのじゃ」

「家の者を呼んで……」

「いやいやそれ前に、一応あたりを調べて……」と、年嵩かさだけに、角右衛門は云い、燭台をひっさげると、次の間へ出た。次の間にも刀はなかった。そこをみると廊下で、鉤の手に曲がっていた。その角にあたる向こう側の襖をあけるや、角右衛門は、

「おお、これは！」と云つて、突つ立った。

続いた三人の武士も、角右衛門の肩ごしに部屋の中を覗いたが、

「おお、これは！」と、突つ立った。

その部屋は十畳ほどの広さであったが、その中央なかほどに、紙帳しちようが釣つてあり、燈火ともしびが、紙帳の中に引き込まれてあるかして、紙帳は、内側から橙黄色だいだいいろに明るんで見え、一個ひとつの人影が、その面おもて

に、朦朧もうろうと映っていた。総髪で、鬘を太く結んでいるらしい。鼻は高いらしい。全身は痩せているらしい。そういう武士が、刀を鑑定みているらしく、刀身が、武士の膝の辺りあたから、斜めに眼の辺りへまで差し出されていた。——そういう人影が映っているのであった。それだけでも、四人の武士たちにとっては、意外のことだったのに、紙帳おもての面に、あるいは蛭えんえん々と、あるいはベツトリと、あるいは斑々と、または飛沫しぶきのように、何物か描かれてあった。その色の気味悪さというものは！ 黒に似て黒でなく、褐色に似て褐色でなく、人間の血が、月日によつて古びた色！ それに相違なかった。描かれてある模様は？ 少なくとも毛筆ふでで描かれた物ではなかった。もし空想を許されるなら、何者か紙帳の中

で屠腹とくふくし、腸はらわたを掴み出し、投げ付けたのが紙帳へ中あたり、それが蛭うねり、それが飛び、瞬時にして描出したような模様であつた。一所にベツトリと、大きく、楕円形に、血痕が附いている。巨大な蜘蛛くの胴体どうと見れば見られる。まずあそこへ、腸を叩き付けたのであろう。瞬間に腸が千切れ、四方へ開いた。蜘蛛の胴体から、脚のように、八本の線が延びているのがそれだ。蜘蛛の周囲を巡つて、微細こまかい血痕が、霧のように飛び散っている。張り渡した蜘蛛の網と見れば見られる。ところどころに、耳ほどの形の血痕が附いている。網にかかつて命を取られた、蝶や蟬なぎがらの屍と見れば見られる。血描きの女郎蜘蛛！これが紙帳に現われている模様であつた。では、その蜘蛛を背の辺りに負い、網の中ほどに坐つてい

る紙帳の中の武士は、何んといったらよいだろう？ 蜘蛛の網にかかつて、命を取られる、不幸な犠牲というべきであろうか？ それとも、その反対に、蜘蛛を使い、生物の命を取る、貪婪、残忍の、吸血鬼というべきであろうか？ と、紙帳に映っていた武士の姿が崩れた。斜めに映っていた刀の影が消え、やがて鏗音がした。鞘に納めたらしい。横を向いていた武士の顔が、廊下に突つ立っている、四人の浪人の方へ向いた。

「鈍^{なまくら}刀^{ことごと}じゃ、四本とも悉く鈍刀じゃ。お返し申す」

四本の刀が、すぐに、紙帳の裾から四人の方へ抛^{ほう}り出された。

この時まで息を呑み、唾を溜めて、紙帳を見詰めていた四人の浪人は、不覚にも狼狽した声をあげながら、刀へ飛びかかり、ひっ

掴み、腰へ差した。その時はじめて怒りが込み上げて来たらしく、
「これ、そこな武士、無礼といおうか、不埒ふらちといおうか、無断で
我らの腰の物を持ち去るとは何事じゃ！ 出て来い！ 出て来て
謝罪いたせ！」と、角右衛門が怒鳴った。

すると、それに続いて、南京豆のような顔をした紋太郎が、

「出て来い！ 出て来て謝罪いたせ！」と鸚鵡おうむ返しのように叫び、

「それに何んぞや鈍刀とは！ 我らの刀を鈍刀とは！」

「何者じゃ！ 名をなの宣れ！ 身分を明かせ！」

とさらに角右衛門が怒鳴った。

すると、紙帳の中の武士は、少ししわが噎れた、錆さびのある声で、「拙

者の名は、五味左門と申す、浪人じゃ。当家が浪人を厚遇いたす

と聞き、昨夜遅く訪ねて参り、一泊いたしたものだ。疲^{つか}れて
いたがゆえに、この部屋へ早く寝た。しかるにさつきから、遠く
の部屋から、賑やかな、面白そうな話し声が聞こえて来た。一眠
りして、疲^{つかれ}勞の癒えた拙者、眼が冴えて眠れそうもない。会^{はなし}話の
仲間へはいり、暇を潰そうと声をしるべに尋ねて行つたところ、
広い部屋へ出た。酒肴が出ておる。悪くないと思つたぞ。が、
見れば、四本の刀が投げ出してあり、刀の主らしい四人の者が、
廊下に立つて、夜景色を見ておる。長閑^{のどか}の風景だつたぞ。そこで
わしの心が変わつた。貴殿方と話す代りに、貴殿方の腰の物を拝見
しようとな。悪気からではない。わしの趣^{このみ}味からじゃ。そこでわ
しは貴殿方の腰の物をひとまとめにして持つて参り、今までかか

つて鑑定いたした。さあ見てくれといわぬばかりに投げ出してあつた刀、四本のうち一本ぐらい、筋の通つた銘刀ものがあるかと思つたところ、なかつたぞ。フ、フ、フツ、揃いも揃つて、関の数打ち物ばかりであつたよ」

蜘蛛の犠牲にえ

「チエツ」と舌打ちをしたのは、短気らしい山口という武士で、やにわに刀を抜くと、「他人ひとの腰の物を無断で見るさえあるに、悪口するとは何事じゃ。出て来い！ 斬つてくれる！」

「斬られに行く酔狂者はない。出て行かぬよ。用があらば、そつ

ちから紙帳の中へはいつて参れ。ただし、断わっておくが、紙帳の中へはいつたが最後、男なら命を女なら……」

「黙れ！」と、山口という武士は、紙帳に映っている影を目掛け、
もろて諸手突きに突いた。

瞬間に、紙帳の中の燈火ともしびが消え、紙帳は、
きょうかたびら経帷子ののような

色となり、蜘蛛の姿も——内側から描かれていたものと見え、燈火が消えると共に消えてしまった。そうして、突かれた紙帳は、
おとな穏しく内側へ萎み、裾が、ワングリと開き、
おはぐろ鉄漿をつけた妖怪の口のような形となり、細い白い手が出た。

「！」

悲鳴と共に、山口という武士はのけぞり、片足を宙へ上げ、そ

れで紙帳を蹴った。しかし、すぐに、武士は、足から先に、紙帳の中へ引き込まれ、忽ち、断末魔の聲が起こり、ブーツと、血飛沫^{ぶき}が、紙帳へかかる音がしたが、やがて、森然^{しん}と静まつてしまった。角右衛門は、持っていた燭台を抛り出すと、真つ先に逃げ出し、つづいて、紋太郎が逃げ出した。

しかし片岡という武士は、さすがに、同宿の誼^{よし}みある浪人の悲運を、見殺しに出来ないと思つたか、夢中のように、紙帳へ斬り付けた。とたんに、紙帳の裾^{ひるがえ}が翻り、内部^{うち}から掬^{すく}うように斬り上げた刀が、廊下にころがったままで燃えている、燭台の燈に一瞬間輝いた。

「わ、わ、わーッ」と、苦痛の聲が、片足を股から斬り取られ、

四つ這いになって、廊下を這い廻っている武士の口から迸ほとばしつた。紙帳の中はひっそりとしていた。

こういう間も、キリキリという、轍わだちでも軋わだちるような音は、屋敷の周囲まわりを巡って、中庭の方へ移って行つた。

(何んの音だろう?)と、四人の浪人が不審を打つたように、その音に不審を打つたのは、中庭に近い部屋に寝ていた、伊東頼母たのもであつた。

頼母は、この屋敷へ来るや、まず朝飯のご馳走になつた。給仕をしてくれた娘の口から聞いたことは、この屋敷が、飯塚薪左衛門という郷士の屋敷であることや、娘は、その薪左衛門の一人娘

で、しおり葉という名だということや、今、この屋敷には、頼母の他に五人の浪人が泊まっているということや、父、薪左衛門は、都合があつて、どなたにもお眼にかかれませんが、皆様がお泊まりくださいましたことを、大変喜んでいられるということなどであつた。

「どうぞ、幾日でもご逗留くださりませ」と葉は附け加えた。

頼母は、忝けなく礼を云つたが、こんな不思議な厚遇を受けたことは、復讐の旅へ出て一年になるが、かつて一度もなかつたと思つた。

彼は下しもうさ総の国、佐倉の郷土、伊東忠右衛門の倅せがれであつた。伊東の家柄は、足利時代に、下総、常陸等ひたちを領していた、管領千葉家の重臣の遺流ながれだったので、現在の領主、堀田備中守ほったびつちゆうのかみも粗

末に出来ず、客分の扱いをしていた。しかるに、同一家柄おなじの郷士に、五味左衛門という者があり、忠右衛門と不和であった。理由は、二人ながら、国学者で、尊王家であったが、忠右衛門は、本居宣長の流れを汲む者であり、左衛門は、平田篤胤あつたねの門下をもつて任じている者であり、二人ながら

「大日本は神国なり。天祖始めてもと基を開き、日神長く統を伝え給う。我が国のみこの事あり。異朝にはその類なし。このゆえに神国というなり」という、日本の国体に関する根本思想については、全然同一意見であったが、その他の、学問上の、瑣末の解釈については、意見を異にし、互いにそしりあ詈言そしりあい、不和となつたのであった。もちろん、性格の相違もその因をなしていた。忠右衛門

は、穩和で寛宏であつたが、左衛門は精悍せいかんで狷介けんかいであつた。

敵討ちの原因

ところが、去年の春のことであつたが、忠右衛門と左衛門とは、備中守殿によつて、觀桜の宴に招かれた。その席で二人の者は、国学の話については、遠慮し、大事を取り、云い争わなかつたが、刀劍の話になつた時、とうとう云い争いをはじめてしまった。忠右衛門が、天あまくに国という古代の刀工などは、事實は存在しなかつたもので、したがつて鍛えた刀などはないと云つたのに対し、左衛門は、いや天国は決して伝説中の人物ではなく、実在した人物

であり、その鍛えた刀も残っておる、平家の重宝小烏丸こがらすまるなどは
それであり、我が家にもかつて一振り保存したことがあつたと主
張し、激論の果て、左衛門は「水掛け論は無用、この上は貴殿と
拙者、この場において試合をし、勝つた方の説を、正論と致そう」
と、その精悍の氣象から暴論を持ち掛けた。忠右衛門は迷惑とは
思ったが、引くに引かれず承知をし、試合をしたところ、劍技うでは
左衛門の方が上ではあつたが、長年肺を患わずらつていて、寒氣を厭いとい、
紙帳の中で生活しているという身の上で、体力において忠右衛門
の敵でなく、忠右衛門のために打ち挫ひしがれ、自分から仕掛けた試
合に負け、これを悲憤し、自宅へ帰るや、紙帳の中で屠腹とくふくし、腸
を紙帳へ叩き付けて死んだ。しかるに左衛門には、左門という倅

があつて、「父上を自害させたのは忠右衛門である」と云い、遊学先の江戸から馳せ帰り、一夜、忠右衛門を往來みちに要して討ち取り、行衛ゆくえを眩くらました。こうなつてみると、伊東家においても、安閑としてはいられなくなり、

「頼母、そち、左門を探し出し、討つて取り、父上の妄執を晴らせ」

ということになり、さてこそ頼母は、復讐の旅へ出たのであつたが、困つたことには、彼は討つて取るべき、左門という人間を知らなかつた。と云うのは、この時代の風習として、家庭いえにいないで、江戸へ出、学問に精進していたからである。そう、頼母も左門も、幼少の頃から江戸に遊学し、頼母は、宣長の門人伴信友

の門に入り、国学を修め、左門は、平田塾に入つて、同じく国学を究める傍ら、戸ヶ崎熊太郎の道場に通い、神道無念流を学び、二人は互いにその面影を知らないのであつた。

キリキリという、轍の軋るような音を聞き、頼母は、枕から顔を放し、耳を聳てた。

(何んの音だろう?)

音は、中庭まで来たようであつた。

頼母は、夜具から脱け出し、枕もとの刀を握ると、立ち上がった。彼の眼は、すっかり覚めていた。彼は、朝飯を食べるや、すぐに床を取つて貰い、ぐつすと眠り、疲労を癒し、今は元気を恢復してもいるのであつた。有り明けの燈に、刀の鞘を照らしな

がら、頼母は部屋を出、廊下を右の方へ歩き、それが、さらに右の方へ曲がつている角の雨戸を、そつと開けて見た。海の底かのように、庭は薄蒼く月光に浸っていた。庭は、まことに広く、荒あ廢あれていた。庭の一所に、頼母の眼を疑がわせるような、ものか物ものか象たちが出来ていた。古塚のような形の、巨大な岩が、いしづみ碑いしづみと小松とをその頂きに持って、こぶ瘤こぶのように立っているのであった。それはまったく、頼母が、紙帳から出て来た武士によつて、氣絶させられた地点に——そこに出来ていた、野中の道了様そつくりのものであった。酷そつくり似そつくりといえ、塚の左手、遙か離れた所に、植え込みが立っていて、それが雑木林に見えるのも、あの場所の景色とそつくりであった。

(紙帳が釣つてはあるまいか?) ゾツとするような気持ちで、頼母は、植え込みを見た。しかし紙帳は釣つてはなかつた。あの場所の景色と異^{ちが}うところは、あそこでは、塚と林との彼方^{むこう}が、広々と展^{ひら}開けた野原だったのに、ここでは、土塀が、灰^{はい}白く横に延びているだけであつた。

(碑には、髭題目が刻^ほられてあるに相違ない) こう思つて、頼母は、縁から下り、塚の方へ歩いて行き、碑を仰いで見た。碑は、鉛めいた色に灰^{ほの}見えていたが、はたして、南無妙法蓮華經という、七字の名号が、鯨^{なます}の髭のような書体で、刻られてあつた。(不思議だなあ) と呟^かきながら、頼母は、少し湿つてはいるが、枯れ草が、氈^{かも}のように軟らかく敷かれている地^たに佇^{たす}み、(道了様の塚を、

何んのために、中庭などへ作つたのであろう？)

急に彼は地へ寝た。

老幽鬼出現

(こうここへ俺が氣絶して仆たおれれば、あそこでの出来事を、再現したことになる)

彼はしばらく寝たままで動かなかつた。二十一歳とはいつても、前髪は立てており、それに、氏素姓よく、坊ちゃんとして生おいた長つて来た頼母は、顔も姿も初ういうい々しくて、女の子のようであり、それが、雲一片ない空から、溢れるように降り注いでいる月光に照

らされ、寝ている様子は、無類の美貌と相俟あいまつて、艶なまめかしくさえ見えた。

と、例の、キリキリという音が、植え込みの方から聞こえて来た。頼母は飛び起きて、音の来る方を睨にらんだ。昨夜は、雑木林の中から、剣鬼のような男が現われて来たが、今夜は、植え込みの中から、何が現われて来るのだろうか？ 頼母は、もう刀の柄を握りしめた。おお何んたる奇怪な物もののかたち象がが現われて来たことであろう！ 蹩いざり車が、耳の下まで白髪を垂らした老人を乗せ——老人が自分で漕こいで、忽然と、植え込みの前へ、出て来たではないか！ やがて、植え込みの陰影かげから脱け、蹩り車は、月光の中へ進み出た。月光ひかりの中へ出て、いよいよ白く見える老人の白髪は、

そこへ雪が積もっているかのようであり、洋犬のように長い顔も、白く紙のようであった。顔のひとつところ一所に黒い斑点しみが出来ていた。窪んだ眼窩であった。その奥で、炭火おきのように輝いているのは、熱を持った眼であった。老人の体は、これ以上痩せられないというように、痩せていた。枯れ木で人の形を作り、その上へ衣裳を着せたといったら、その姿を、形容することが出来るだろう。左右の手が、二本の棒を持ち、胸と顔との間を、上下に伸のび縮ぢみし、そのつど老人の上半身が、反そったり屈かがんだりした。二本の棒を櫂かいにして、地上を、海のように漕いで、甍いざり車を、進ませてくるのであった。長方形の箱の左右に附いている、四つの車は、鈍のろく、月光の波を分け、キリキリという音を立てて、廻っていた。と、

車は急に止まり、老人の眼が、頼母へ据えられた。

「お来たか！」

咽喉のどで押し殺したような声であつた。極度の怒りと、恐怖おそれとで、
唳しわがふるれ顫ふるえている声でもあつた。そう叫んだ老人は、棒を手から放
すと、片手を肩の上へ上げ、肩の上へ、背後うしろからはみ出して
刀の柄へかけた。刀を背負しよつていたのである。それが引き抜かれ
た時、月光が、一時に刀身へ吸い寄せられたかのように、どぎつ
く光つた。刀は青眼に構えられた。

「来たか、来栖勘兵衛！ 来るだろうと思つていた！ が、この
有賀又兵衛、蹩者いざりにこそなつたれ、やみやみとまだ汝おのれには討たれ
ぬぞ！ それに俺の周囲まわりには、いつも警護の者が附いている。今

夜もこの屋敷には、六人の腕利きが宿直とのいしている筈だ。勘兵衛、これ、汝に逢つたら、云おう云おうと思つていたのだが、野中の道了での斬り合い、俺は今に怨みに思つておるぞ！ 事実を誣しい、俺に濡れ衣ぎぬを着せたあげく、俺の股へ斬り付け、蹩者になる原因を作つたな。おのれ勘兵衛、もう一度野中の道了で立ち合い、雌雄を決しようと、長い長い間、機会の来るのを待つていたのだ！ さあここに野中の道了がある、立ち合おう、刀を抜け！」それから屋敷の方を振り返つたが、「しおり葉よ、葉よ、勘兵衛が来たぞよ、用心おし、葉よ！」

と悲痛に叫んだ。

老人はそう叫びながら、やがて、片手で棒を握り、それで漕い

で、くるま 躡者車を前へ進め、片手で刀を頭上に振りかぶり、頼母の方へ寄せて来た。頼母は、あぜん 啞然とした。しかし、啞然とした中にも、自分が人違いされているということは解った。それで、刀の柄へ手をかけたまま、うしろ 背後へジリジリと下がり、

「ご老人、人違いでござる。拙者は来栖勘兵衛などという者ではござらぬ。拙者は、伊東頼母と申し、今朝より、ご当家にご厄介になりおる者でござる」と云い云い、つい刀を抜いてしまった。

娘の悲哀

すると、その時、屋敷の雨戸の間に、女の姿が現われ、こっち

を見たが、急に、悲鳴のような声を上げると、駈け寄つて来、

「お父様、何をなさいます。そのお方は、お父様を警護のため、今日、お家へお泊まりくださいました、伊東頼母様と仰せになる、旅のお武家様ではございませんか。おお、お父様お父様、正氣づかれてくださいまし！」

と叫び、老人の刀持つ手に取り纏つた。棗であつた。しかし老人は、

「娘か、用心おし！ 来栖勘兵衛が、わしを殺しに来たぞよ！ そこに勘兵衛がいる！」

と叫び、尚、車を進めようと、片手の棒で、地上を漕ごうとするのであつた。

「いえいえお父様、あのお方は来栖勘兵衛ではございません。よくご覧なさいまし、お年が違います。勘兵衛より、ずっとお若うございます」

こう云われて老人は、はじめて気づいたように、つくづくと頼母を見たが、

「なるほどのう、年が違う、前髪立ちじや。勘兵衛はわしより一
つ年上だった筈じや。勘兵衛ではない」

落胆したように、また、安心したように、老人は、急に首を垂れ、振り上げていた刀を下げると、弱々しく、子供のように、葉へもたれかかった。赤い布のかかった艶々つやつやしい髪の下、葉の肩へ、老人の白髪頭しらがが載っている。白芙蓉のような葉の顔が、頬が、

老人の頬へ附いている。秩父絹に、花模様を染め出した衣裳の袖から、細々と白い栞の手が延びて、老人の肩へかかっているのは、車の上の老人を、抱だきかか介えているからであつた。いつか老人の手から、刀も棒も放され、刀は、車の前の、枯れ草の上に落ちた。何んと老人は眠つてゐるではないか。刀を構え、この様子を眺めていた頼母は、危険はないと思つたか、刀を鞘に納め、二人の方へ寄つて行つたが、

「栞殿、そのご老人は？」と、探るように訊いた。

「父でございます」——栞の声は泣いている。

「ご尊父？　では、薪左衛門殿で？」

栞は黙つて頷いた。

「それに致しても、ご尊父には、ご自身を、有賀又兵衛じやと仰せられたが？」

「父は乱心いたしおるのでございます」

「ははあ」頼母はやつと胸に落ちたような気がした。狂人きちがいでもなければ、深夜に、蹙り車いざなどに乗り、刀を背負い、現われ出で、自分を来栖勘兵衛などと見誤り、ガムシヤラに斬つてなどかかる筈はない。（俺は、狂人を相手にしていたのか）頼母は、鼻白むような思いがしたが、

「ご乱心とはお気の毒な。していつ頃から？」

「五年前の、ちようど今日、府中の火祭りの日でございましたが、松戸の五郎蔵と申す、博徒の頭かしらが参り、父と、密談いたしております

したが、突然父が、『汝^{おのれ} 来栖勘兵衛、執念深くもまだ、この有賀又兵衛を、裏切り者と誣^しいおるか!』と叫びましたが、その時以来……」

栞は、片袖を眼にあてて泣いた。

屋根ばかりに月光を受けて、水のような色を見せ、窓も雨戸も、一様に黒く、廃屋のように見えている屋敷は、不幸な人々を見守るかのように、庭をへだてて立っていた。

（有賀又兵衛、来栖勘兵衛?）と、頼母は、考え込んだ。頼母は、有賀又兵衛、来栖勘兵衛という、伝説的にさえなっている、二人の人物の噂を、亡き父から聞かされていた。

「浪人組の頭での、傑物であった。わしの家などへも、徒党^{ひき}を率

いてやって来て、金などを無心したものだ。五味左衛門の屋敷などへも再三出かけて行って、無心したらしい。又兵衛の方は、わけても人物で、仁義なども心得ており、大義名分などにも明らかで、王道を尊び、霸道を憎む議論などを、堂々と述べて、男らしいところを見せたので、ついなしなど、進んで金を出してやったものじゃ」と、父は語った。

しかし、その勘兵衛や又兵衛は、亡父ちちの話によれば、とうの昔に——二十年も以前まえに、世間から姿を消してしまつた筈であつた。しかるに、薪左衛門殿が、その有賀又兵衛だという。（何故だらう？）しかし、頼母は、すぐ苦笑した。（相手は狂人きちがいなのだ、狂人の云うことなどに、何故も不思議もあるものか）

「葉殿」と、頼母は、塚の方をチラリと見たが、「お訊きいたしたいは、ここに作られてあります古塚、どうやらこれは野中の道了の……」

云われて葉も、眼にあてていた袖の隙から、塚の方を眺めたが、「は、はい」

「野中の道了の塚を、お屋敷の庭へ作られるとは、何か仔細が……」

道了塚の秘密は

葉の泣き声は高くなり、しばらくは物を云わなかった。肥ふとりぎ

かりの、十七の娘にしては、瘦せぎすに過ぎる葉の肩は、泣き声につれて、小刻みに顫えるのであった。

「それもこれも……」と、葉は、やがて、途切れ途切れに云った。

「父の心を……正体ない父の心を……少しなりとも慰めてやりたさに……才覚しまして……妾が……」
わたくし

顔から袖をとり、塚の頂きの碑を眺めた。南無妙法蓮華經という、七字だけが黒く、その周囲の碑の面は、依然、月の光で、鉛色にほの灰めいて見えていた。

「父は」と、葉は、またも途切れ途切れに云った。「妾、物心つきました頃から、一里の道を、毎日のように、野中の道了様まで参りまして、塚の周囲を廻つては、物思いに耽りましたが……乱

心しましてからは、それが一層烈しくなり、日に幾度となく……
それですのに、父は躓者いざりになりました。ごさいます」

おえつ
嗚咽の声はまた高くなつた。娘は、父親を抱き締めたらしい。
白髪おえつの頭が、肩から外れて、葉の胸にもたれている。

「父には以前から、股に刀傷がございましたが、弱り目に祟り目
とでも申しましようか、乱心しますと一緒に、悪化わるくなり、どう
とう躓者いざりに……」

草に落ちている抜き身は、氷のように光っている。庭のそちこ
ちに咲いている桜は、微風に散っている。

「躓者いざりになりましたも、道了様へは行かねばならぬと……そこは
正気でない父、子供のように申して諾ききませぬ。躓車くるまなどに乗せ

てやりましては、世間への見場悪く、……いつそ、道了様を屋敷内へお遷座うつつしたらと……庭師に云い付け、同じ形を作らせましたところ、虚うつろ妄ごころの父、それを同じ道了様と思い、このように甕車まわりに乗り、朝晩にその周囲まわりを廻り……」

悲しそうに、また栞は、眠りこけている父親を見やるのであった。

身につまさされて聞いていた頼母は、いつか、栞の前へ腰を下ろし、腕を組んだ。

急に栞は、怒りの声で云った。

「父を脅かす者は、松戸の五郎蔵なのでございます。父は妾わたくしに申しました。『五郎蔵が殺しに来る。彼奴きやつには大勢の乾児こぶんがあるが、

俺わしには乾児など一人もない。味方が欲しい、旅のお侍様などが訪ねて参つたら、泊め置け』と。……」

（そうだったのか）と頼母は思った。（不思議に厚遇されると思つたが、さては、いつの間にか俺は、この屋敷の主人の、警護方にされていたのか）しかし事情が事情だったので、怒りも、笑いも出来なかつた。

更けて行く夜は、次第に寒くなつて来た。老人をいつまでも捨てておくことは出来なかつた。二人は、くるま轆車を押して、屋敷の方へ行くことにし、頼母は、まず、草に捨ててある刀を拾い取り、老人の背の鞆へ差してやった。それから轆車を押しにかかつた。

「勿もったい体のうございます」

葉が周章あわてて止めた。手が触れ合つた。

「あつ」

葉の声が情熱をもつて響いた。

「ああ」

思春期の処女おとめというものは、男性おとこのわずかな行動によつて、衝動を受けるものであり、そうしてその処女が、愛と良識とに恵まれてゐる者であつたら、衝動を受けた瞬間、相手の男性の善悪を、直観的に識別みわけ、その瞬間に、将来を托すべき良人おととを——恋人を、認識みとめするものである。狂人の、孤独の父親に仕え、化物ばけもの屋敷のよすたうな廃れた屋敷に住み、荒らくれた浪人者ばかりに接してゐた、無垢むく純情の葉が、今宵はじめて、名玉のように美しく清い、若い

武士と、不幸な一家のことについて語り合つたあげく、偶然手を触れ合つたのであつた。その一触が、彼女の魂を、根底から揺り動かし、「叫び」となつて、彼女の口から出たのは、無理だとは云えまい。頼母は、栞の叫び声に驚いて、栞を見詰めた。栞の眼に涙が溢れていた。しかしその涙は、さつき、父親や、自分の家の不幸のために泣いた涙とは違い、歡喜と希望と愛情とに充ちた涙であつた。栞の頬は夜眼にも著^{しる}く赤味注^さしていた。頼母は、何が栞をそうまで感動させたのか解らなかつた。手と手と触れ合つたことなど、彼は、気がつかかなかつたほどである。それほど彼は無邪気なのであつた。しかし、栞の感動が、自分を愛してのそれであるということは直覺された。このことが今度は彼を感動させ

た。

(この娘がわしを！)

その娘は、自分にとつては命の恩人と云えた。この娘の介抱がなかったら、自分は今朝死んでいたかもしれない！

(この娘がわしを！)

頼母の心へ感謝の念が、新たに強く湧き、それと一緒に、愛情がヒタヒタと寄せて来るのを覚えた。

立ち尽くし、見詰め合っている二人の頭上には、練り絹に包まれたような朧おぼろの月がかかつてい、その下辺したべを、帰かえる雁かりの一ひとつ連らが通っていた。花吹雪が、二人の身を巡った。

「勘兵衛！」と、不意に老人が叫んだ。「天あまくに国の剣を奪ったの

も汝おのれの筈じゃ！ それをこの身に！」

（天国？）と、頼母は、ヒヤリとし、恍惚の境いから醒めた。

（この老人も、天国のことを云う！）

父、忠右衛門が、横死をとげ、自分が復讐の旅へ出るようになったのも、元はといえば、天国の剣の有無の議論からであった。

頼母は、天国の名を聞くごとに、ヒヤリとするのであった。

（紙帳から出て来て、俺に体あたりをくれた武士も、天国のことを云ったが、薪左衛門殿も、天国のことを……）

頼母は、薪左衛門を見た。薪左衛門は眠っていた。眠ったままの言葉だったのである。

五郎藏の賭場

こういうことがあつてから、三日経つた。

ここ、府中の宿は、火祭りで賑わつていた。家々では篝火かがりびを焚き、夜になると、その火で松明たいまつを燃やし、諏訪神社の境内を巡まわつた。それで火祭りというのであるが、諏訪神社は、宿から十数町離れた丘つづきの森の中にあり、その森の背後の野原には、板囲いの賭場とぼが、いくらともなく、出来ていて、大きな勝負が争われていた。

伊東頼母が、この一劃へ現われたのは、夕七ツ——午後四時頃であつた。歩いて行く両側は賭場ばかりで、場内なかからは景氣のよ

い人声などが聞こえて来た。夕陽を赤く顔へ受けて、賭場へはいって行く者、賭場から出て来る者、いずれも昂奮しているのは、勝負を争う人達だからであろう。総州松戸の五郎蔵持ちと書かれた板囲いを眼に入れると、頼母は、足をとめ、

「これが五郎蔵の賭場か、どれはいつてみようかな」と呟いた。

というのは、不幸な飯塚薪左衛門親子を苦しめる、五郎蔵という、博徒の親分の正体を見究めきわようために、やって来た彼だからである。そうして、彼としては、機会を見て、五郎蔵と話し、何故薪左衛門を脅すおどのか？ 事実、薪左衛門は有賀又兵衛であり、五郎蔵は来栖勘兵衛なのか？ 野中の道了塚で、二人は斬り合っ

たというが、その動機は何か？ 野中の道了塚の秘密は何か？ 等をも確かめようと思つていたのであつた。

それにしても飯塚薪左衛門の屋敷から、この府中までは、わずか一里の道程みちのりなのに、なぜ三日も費やして来たのであろう？

彼は三日前のあの夜、薪左衛門の屋敷で、ああいう事件に逢つたが、それからいざ轎り車を押して、栞共々、庭から屋内へ、薪左衛門を運び入れた。屋敷の中は大変であつた。五人泊まっていたという浪人のうち、一人は斬り殺されていた、一人は片足を斬られて、後の三人の姿は消えてなくなっていた。片足を斬られた浪人の語るところによれば、紙帳を釣つて、その中にいた五味左門なのと宣る武士によつて、この騒動がひ惹き起こされたということであつ

た。

この事を聞くと、頼母は仰天し、娘の葉へ、そのような武士を泊めたかと訊いてみた。すると葉は、「五味左門と宣り、一人のお武家様が、宿を乞いましたので、早速お泊めいたしましたがお寝^{やす}みになる時、紙帳を釣りましたかどうか、その辺のところは存じませぬ」と答えた。それで頼母は、どつちみち、紙帳の中から出て来て、自分を体あたりで気絶させた、武道の達人が、自分の父の仇の、五味左門であるということを知ったが、そんな事件が起こつたため、その処置を、葉と一緒に付けることになり、三日を費やし、三日目の今日、ようやく府中へ来たのであった。

「なかなか立派な小屋だな」

と眩つぶやきながら、頼母は、改めて五郎蔵の賭場を眺めた。

板囲たすきいは、ひとときわ大ぶりのもので、入り口には、二人の武士が、襷たすきをかけ、刀を引き付け、四斗樽に腰かけていたが、いうまでもなく賭場防ぎで、一人は、望月角右衛門であり、もう一人は、小林紋太郎であつた。この二人は、あの夜、薪左衛門の屋敷で、ああいう目に逢い、恐怖のあまり、暇いとまも告げず、屋敷を逃げ出し、ここの五郎蔵の寄かかり人ゆうどになつたものらしい。同じ屋敷に泊まつたものの、顔を合わせたことがなかつたので、頼母は、二人を知らず、そこで目礼もしないで、入り口をくぐつた。

賭場は、今が勝負の最中らしく、明神へ参詣帰りの客や、土地の者が、数十人集まつてい、盆とりまを圍繞とりまいて、立ったり坐ったりし

ていた。世話をする中盆が、声を涸^からして整理に努めているかと思つと、素裸^{すはだか}体に下帯一つ、半紙を二つ折りにしたのを腰に挟んだ壺^{しとね}振りが、鉢巻をして、威勢のよいところを見せていた。正面の褥^{しとね}の上にドツカリと坐り、銀造りの長脇差しを引き付け、盆を見ている男があつたが、これが五郎蔵で、六十五歳だというのに、五十そこそこにはしか見え、髪など、小鬢^まへ、少し霜を雑^まじえているばかりであつた。段鼻^{あご}の、鷲のような眼の、赧^{あざ}ら顔は、いかにも精力的で、それに、頤^{あご}などは、二重にくくれているほど肥えているので、全体がふくよかであり、武士あがりというだけに、品^{しな}があり、まさに親分らしい貫禄を備えていた。甲州紬^{つむぎ}茶^{ちや}微^{みじ}塵^{ちん}の衣裳に、紺献上の帯を結んでいるのも、よく似合つて見え

た。その横に女が坐っていた。以前から五郎蔵が、自分のものにしてしようと苦心し、それを、柳に風と受け流し、今に五郎蔵の自由にならないところから、博徒仲間このしやかいで、噂の種になっている、お浦という女であった。二業——つまり、料理屋と旅籠屋はたごとを兼ねた、武蔵屋というのへ、一、二年前から、流れ寄つて来ている、いわゆる茶屋女なのである。年は二十七、八でもあろうか、手入れの届いた、白い、鞣なめし革のような皮膚は、男の情緒こころを悩ますに足り、受け口めいた唇は、女形おやまのように濃のうじよう情であつた。結城の小袖に、小紋縮緬ちりめんの下着を重ね、厚板あついたの帯を結んでいる。こんな賭場へ来ているのは、五郎蔵が、

「おいお浦、祝儀ははずむから、小屋へ来て、客人の、酒や茶の

接待をしてくんな」と頼んだからであるが、その実は、五郎蔵と
しては、片時もこの女を、自分の側そばから放したくないからであつ
た。

（賭場に神棚が祭つてあるのは変だな）

と、盆の背後、客人の間に雑じつて立っていた頼母は、五郎蔵
やお浦から眼を外し、五郎蔵の背後、天井に近く設けられてある、
白木造りの棚を眺めた。紫の幕が張つてあり、燈明が灯してあつ
た。

（何かの縁起には相違あるまいが）

ゆすり浪人

この間にも、五百両胴のチヨボ一は、勝負をつづけて行つた。胴親、五郎蔵の膝の前に積まれてある、二十五両包みが、封を切られたかと思うと、ザラザラと賭け金が、胴親のもとへ掻き寄せられもした。

一人ばかりらしいほど受け目に入っている客人があつた。編笠を冠つたままの、みすばらしい扮装みなりの浪人であつたが、小判小粒とり雑まぜ、目紙めがみの三へ張つたところ、それが二回まで受け、五両が百二十五両になつた。それだのに賭か金ねを引こうともせず、依然として三の目へ張り、

「壺！」と怒鳴っているのであつた。

客人たちは囁き出した。

「お侍さんだけに度胸があるねえ」

「今度三が出たらどうなると思う」

「胴親が、四倍の、五百両を附けるまでよ」

「元もと金きんを加えて、六百二十五両になるってわけか」

「それじゃア、五百両胴は潰れるじゃアねえか」

染八という乾児こぶんが中盆をしていたが、途方にくれたように、五郎蔵の顔を見た。と、この時まで、小面憎そうに、勝ち誇っている浪人を、睨にらみ付けていたお浦が、

「親分」と例の五郎蔵へ囁いた。

「喜代三を引っ込めなさいよ」

喜代三というのは、壺振りの名であった。

「喜代三にやア、三が振り切れそうもないじやアありませんか」

「大丈夫だ」

五郎蔵の声は自信に充ちていた。

「天^{あまくに}国様が附いている」

それから神棚の方へ頤をしゃくつたが、「五郎蔵の賭場、一度の疵^{きず}も附いたことのねえのは、天国様が附いているからよ。喜代三、勝負しろ」

（天国様？）

と、五郎蔵の言葉^{ことば}を小耳に挟んで、不審を打ったのは、頼母で、（それじゃアあの神棚には、天国の剣が祭つてあるのか？）

改めて神棚を眺めた。燈明の火が明るく輝き、紫の幕が、華やかに榮え、その奥から、真鍮の鋌を持った祠の、扉が覗いていた。

（あの祠の中に天国があるのであるまいか）

彼がここへ来たもう一つの目的は、五郎蔵が来栖勘兵衛だとして、はたして、天国の剣を持っているかどうか、それを知ることであった。

頼母はじつと神棚を見詰めた。

と、

「わーッ」

という声が聞こえ、

「一だーッ」^{びん}

「お侍、やられたのーッ」^{さむれえ}

という声が聞こえた。

頼母は、はっとして、盆の方を見た。

骰子の目が、一を出して、目紙の上こころに、ころがつている。

(態ア見ろ!)^{ざま} というように、染八が、浪人の前から、百二十五両を掻き集めようとしているのが見えた。

「待て！」

浪人が刀を抜き、ピタリと目紙の上へ置いた。

「その金、引くことならぬ！」

「何を！」

「賭場荒らしだーッ」

場内総立ちになった。

瞬間に浪人は、編笠を刎^はね退け、蒼黒い、痩せた、頬骨の高い、五十を過ぎした、兇暴の顔を現わし、落ち窪んで、眼隈^{めくま}の出来ている眼で、五郎蔵を凝視^{みつ}めたが、

「お頭^{かしら}ア、いや親分、お久し振りでござんすねえ」と、言葉まで侍らしくなく、渡世人じみた調子で、「いつも全盛で、おめでとうございます」

五郎蔵は、相手の顔を見、不審^{いぶか}しそうに眼をひそめたが、そろりと脇差しを膝へ引き付けると、

「汝^{わりや}ア？」

「しづえてんぜん渋江典膳で。……お見忘れたア情ねえが、こう痩せ涸れてしまつちやア、人相だつて変る筈で。……それにさ、お別れしてつから、月日の経つこと二十年！ ハツハツ、お解りにならねえ方が本当かもしれねえ」

「……………」

「お頭ア、いや親分、あの頃はようござんしたねえ、二十年前は。……来栖勘兵衛、有賀又兵衛といやア、泣くこ児も黙る浪人組の頭、あつしやア、そのお頭の配下だったんですからねえ。……徒党を組んでの、押し借り強請ゆすりの薬が利きすぎ、とうとう幕府おかみから、お触れ書きさえ出されましたつけねえ。あつしやア、暗記そらで覚えておりやす。『近年、諸国在々、浪人多く徘徊いたし、槍鉄砲を

たずさえ、頭分、師匠分などと唱え、廻り場、持ち場などと号し、めいめい私に持ち場を定め、百姓家へ参り、合力を乞い、少分の合力銭等やり候えば、悪口乱暴いたす趣き、不屈き至極、目付け次第からと掬め捕り、手に余らば、斬り捨て候うも苦しからず、差し押さえの上は、無宿、有宿にかかわらず、死罪その外重科に処すべく候云々』……勘兵衛とも又兵衛とも、姓名の儀は出ておりませんが、勘兵衛、又兵衛を目あてにしてのお触れ書きで。そうしてこのお触れ書きは、今に活いきている筈で。……ですから、勘兵衛、又兵衛が、今に生きていて、この辺にウロウロしていると知れたら、忽ち捕り手が繰り出され、捕らえられたら、首が十あつたつて足りやアしねえ。……それほどの勢力のあつた浪人組も、徒党

も、二十年の間に、死んだり、殺されたり、ご処刑受けたりして、今に生きている者、はて、幾人ありますかねえ。……三人だけかもしれねえ。……一人は私で。一人は、ここから一里ほど離れている古屋敷に、いざり壁者になって生きている爺さんよ。……もう一人は……」

「お侍さん」と、五郎蔵が云った。「いい度胸ですねえ」

「何んだと」

「あつしやア、どういふものか、ご浪人が好きで、これまで随分世話を見てあげましたが、ご浪人に因縁つけられたなア今日が初めてで」

「つけるだけの因縁が……」

「いい度胸だ」

「褒められて有難え」

「百二十五両お持ちなすつて。……お浦、胴巻でも貸してあげな」

「親分！」と、お浦は齒切りし、「あんな乞食浪人こじきに……」

「いいつてことよ」それからお浦の耳へ口を寄せたが、

「な！ ……」

「なるほどねえ。……渋江さんとやら、それじゃアこれを……」

お浦の投げた縞の胴巻は、典膳の膝の辺へ落ちた。それへ、金包みを入れた典膳は、ノツシリと立ち上がったが、礼も云わず、

客人を掻き分けると、場外そとへ出て行った。

その後を追ったのは、お浦であった。

典膳の運命は

この日が夜となり、火祭りの松明が、諏訪神社の周囲を、火龍のように廻り出し、府中の宿が、篝火かがりびの光で、昼のように明るく見え出した。

この頃、頼母は、物思いに沈みながら諏訪神社みと府中しゆくとを繋つないでいるなわて暇道なわてを、府中の方へ歩いていった。賭場で見聞いたことが、彼の心を悩ましていたのであった。渋谷典膳という浪人が、五郎蔵を脅かした言葉から推すと、いよいよ五郎蔵は来栖勘兵衛であり、飯塚薪左衛門は、有賀又兵衛のように思われてならなかった。

そうして、五郎蔵が来栖勘兵衛だとすると、神棚に祭られてあつたのは、天国の剣に相違ないように思われた。このことは頼母にとつては、苦痛のことであつた。

（天国の剣が、存在するということが確かめられれば、父の説は、誤りということになる。しかるに父は、その誤つた説で、五味左衛門と議論したあげく、試合までして、左衛門を打ち挫き、備中守様のご前で恥をかかせた。そのために左衛門は悲憤し、屠腹して死んだのであるから、左衛門を殺したのは、父であると云われても仕方がなく、左衛門の倅左門が、父を討つたのは、敵討ちと云ふことになる。その左門を、自分が、父の敵として討つということとは、はつとご法度の、「又敵討ち」にならうではあるまいか）

(いつそ、天国を手に入れ、打ち砕き、この世からなくなしてしまつたら)

こんな考えさえ浮かんで来るのであつた。

(天国のような名刀が、二本も三本も、現代こんにちに残っている筈はない。あの天国さえ打ち砕いてしまつたら)

枯れ草に溜っている露を、足に冷たく感じながら、頼母は、府中の方へ歩いて行つた。

と、行く手に竹藪があつて、出たばかりの月に、葉叢はむらを、薄白く光らせ、微風そよかぜにそよいでいたが、その藪蔭から、男女の云い争う声が聞こえて来た。頼母は、(はてな?) と思ひながら、その方へ足を向けた。

府中の方へ流れて行く、幅十間ばかりの、髪川という川が、竹藪の裾を巡って流れていて、淵も作れないほどの速い水勢ながれが、月光を銀箔のように砕いていた。その岸を、男と女とが、酔っていると見え、あぶなつかしい足どりで歩き、云い争っていた。

「これお浦、どうしたものだ。どこまで行けばよいのだ。蛇の生殺しは怪しからんぞ。これいいかげんで……」

渋江典膳であった。五郎蔵の賭場で、百二十五両の金を強請ゆすり、場外へ出ると、賭場で、五郎蔵の側にいたお浦という女が、追っかけて来て、親分の吩咐いいつけで、一献こん献けんしたいといった。こいつ何か奸策あつてのことだろうと、典膳は、最初は相手にしなかつたが、田舎に珍しいお浦の美貌と、手に入った籠絡ろうらくの手管てくだとに誘そ

惑そのかされ、つい府中しゆくの料理屋へ上がった。酒を飲まされた。酔つた。酔つたほどに、下根げこんの典膳は、「お浦、俺の云うことを諾きけ」と云い出した。

お浦はお浦で、五郎蔵から、

「あんな三下に、大金を強請ゆすられたは心外、さりとて、乾兒こぶんを使つて取り返すも大人気ない。お浦、お前の腕で取り返しな。取り返したら、金はお前にくれてやる」と云われ、その気になり、出かけて来た身だったので、「ここではあんまり内密ないしよの話も出来ないから……ともかくも外へ出て」と、連れ出して来たのであつた。

「どこへ行くのだお浦、ひどく寂しい方へ連れて行くではないか

……」

と、典膳は、お浦の肩へ手をかけようとした。

お浦は、それをいなしたが、

「何をお云いなのだよ。この人は……」

そのくせ、心では、（一筋縄ではいけそうもない。……それにこんな破落戸^{ならず}武士、殺したところで。……そうだ、いつそ息の根止めて……）と、思っているのであった。

典膳がよろめいて、お浦の肩へぶつかつた時、お浦は、何気なさそうに、典膳の懐^{ふところ}中へ手をやった。

「これ！」

「胴巻かえ？」

「うん」

「重たそうだねえ」

「百二十五両！」

「ああ、昼間の金だね」

「うん。……五郎藏め、よく出しおった。旧悪ある身の引け目、態さまア見ろだ。……お浦、いうことを諾いたら、金をくれるぞ。十両でも二十両でも」

「金なら、妾だつて持つているよ」

「端はした金だろう」

「鋼鉄はがねさ、斬れる金さ」

お浦は、片手を懐中へ入れ、呑んでいたあいくちヒ首を抜くと、「そ

「れ、斬れる金を！」と、典膳の脇腹へ突っ込んだ。

「ヒエーッ、お浦アーッ、さては汝^{おのれ}！」

「汝も蜂の頭もありやアしないよ」

胴巻をグルグルと手繰^{たぐ}り出し、背を抱いていた手を放すと、典膳は、弓のようにのけ反ったまま、川の中へ落ちて行った。

(止どめを刺さなかったがよかったかしら?)

お浦は、岸から覗き込んだ。急の水は、典膳を呑んで、下流へ運んで行ったと見え、その姿は見えなかった。

「案外もろいものだねえ」

草でヒ首の血糊を拭った時、

「お浦殿、やりましたな」

という声が聞こえて来た。さすがにお浦もギョツとして、声の来た方を見た。竹藪を背にして、編笠をかむった武士が立っていた。

「どなた？」

「旅の者じゃ」

「見ていたね」

「さよう」

「突き出す気かえ」

「役人ではない」

「話せそうね」

と、お浦は、構えていたヒ首を下ろし、

「見遁^のがしてくれるのね」

「殺して至当の悪漢じゃ」

「ご存知？」

「賭場で見ていた」

「まあ」

お浦の恋情

「昼の間、五郎蔵殿の賭場へ参った者じゃ」

「あれ、それじゃア、まんざら見ず知らずの仲じゃアないのね」

「それに、同宿の誼^{よし}みもある」

「同宿？」

「拙者は、府中の武蔵屋に泊まっておる」

編笠の武士、すなわち、伊東頼母は、そう、今日、府中へ来ると、五郎蔵一家が、武蔵屋へ宿を取っていると聞き、近寄る便宜にもと、同じ旅籠はたごへ投じたのであった。しかるに、五郎蔵はじめその一家が、もう賭場へ出張つたと聞き、自分も賭場へ出かけて行つたのであった。

「まあ。武蔵屋に。それはそれは。妾も、武蔵屋の婢女おんなでござんす」

「賭場で、典膳という奴、五郎蔵殿へ因縁つけたのを見ていた。殺されても仕方ない」

「それで安心。……妾アどうなることかと。……でも、こころざし芳志には芳志を。……失礼ながら旅用の足したに……」

と、お浦が、胴巻の口へ手を入れたのを、頼母は制し、

「他に頼みがござる」

「他に……」お浦は、意外に思ったか、首を傾かしげたが、何か思いあたったと見え、やがて、月光の中で、唇をゆがめ、酸味すみある笑い方をしたかと思うと、「弱いところを握られた女へ、金の他に頼みといつては、さあ、ホッ、ホッ」

「誤解しては困る」

と、頼母は、少し周章あわてた。しかし嚴肅の声で、「不躰ぶしつけの依頼をするのではない」

「では……」

「賭場に神棚がありましたのう」

「ようご存知」

「ご神体は？」

「はい、天国とやらいう刀……」

「天国!? おお、やつぱり! ……お浦殿、その天国を拝見したいのじゃが」

「天国様を? ……異いないお頼み。……何んで?」

「拙者は武士、武士は不断に、名刀を恋うるもの。天国は、天下の名器、至宝中の至宝、武士冥利、一度手に取って親しく」

「なるほどねえ、さようでございますか。……いえ、さようでござ

ございましたとも、女の身の妾などにしてからが、江戸におりました頃、歌舞伎を見物、水の垂れそうに美しい、吉沢あやめの、若衆姿など眼に入れますと、一生に一度は、ああいう役者衆と、一つ座敷で、盃のやり取りしたいなどと。……同じ心持ち、よう解りまする。……では何んとかして、あの天国様を。……おおちようど幸い、五郎蔵親分には、あの天国様を、賭場へ行く時には賭場へ持つて行き、宿へ帰る時には宿へ持つて帰りまする。……今夜妾がこつそり持ち出し、あなた様のお部屋へ……」

「頼む」

「お部屋は？」

「中庭の離座敷」

はなれ

「お名前は？」

「伊東頼母」

「お顔拝見しておかねば……」

頼母は、そこで編笠を脱いだ。

お浦はその顔を隙かして見たが、「まあ」と感嘆の声を上げた。

「ごきりよう縹うしろ織よしな！ ……お前髪立ちで！ 歌舞伎若衆といおう

か、お寺お小姓と云おうか！ 何んとまあお美しい！」

見とれて、恍惚うっとりとなつたが、

「女冥利、妾アどうあろうと……」

と、よろめくように前へ出た。

若衆形吉沢あやめに似ていると囁かれた、無双の美貌の頼母が、

月下に立った姿は、まこと舞台から脱^ぬけ出した芝居の人物かのよう
うで、色ごのみの年増女などは、魂を宙に飛ばすであろうと思わ
れた。前髪のはつれが、眉のあたりへかかり、ポツと開けた唇か
ら、揃った前歯が、つつましく覗いている様子など、女の子より
も艶^{なまめ}かしかつた。

「天国様は愚か、妾ア……」

と、寄り添おうとするのを、

「今夜、何時に？」

と、頼母は、お浦を押しやった。

「あい、どうせ五郎蔵親分が眠ってから……子の刻頃……」

「間違いござるまいな」

「何んの間違いなど。……あなた様こそ間違いなく……」

「お待ちしましょう」

と、云い棄て、頼母は歩き出した。お浦は、その背後姿を、な
お恍惚とした眼付きで見送ったが、
(妾ア、生き甲斐を覚えて来たよ)

紙帳の中

この夜が更けて、子の刻になった時、府中の旅籠屋、武蔵屋は
寝静まっていた。

と、お浦の姿が、その廊下へ現われた。廊下の片側は、並べ

て作つてある部屋部屋で、襖によつて閉ざされていたが、反対側は中庭で、月光が、霜でも敷いたかのように、地上を明るく染めていた。質朴な土地柄からか、雨戸などは立ててない。お浦は廊下を、足音を忍ばせて歩いて行つた。廊下が左へ曲がつた外れに、離座敷はなれが立っていた。藁葺き屋根わらぶの、部屋数三間ほどの、古びた建物で、静けさを好む客などのために建てたものらしかった。離座敷は、月に背中を向けていたので、中庭を距てた、こつちの廊下から眺めると、屋根も、縁側も、襖も、一様に黒かった。お浦は、その一間に、自分を待っている美しい若衆武士のことを思うと、胸がワクワクするのであった。（早くこの天国様をお目にかけて、その代りに……）と、濃情のこの女は、刀箱を抱えてい

た。

やがて、離座敷の縁側まで来た。お浦は、年にも、茶屋女という身分にも似ず、闇の中で顔を赧らめながら、部屋の襖をあけ、人に見られまいと、いそいで閉め、

「もし。……参りましたよ」

と虚うつろのような声で云い、燈火ともしびのない部屋を見廻した。と、闇の中に、仄白く、方形の物が懸かっていた。

（おや？）とお浦は近寄って行った。紙帳であった。（ま、どうしよう、部屋を間違えたんだよ）

と、あわてて出ようとした時、紙帳の裾から、白い、細い手が出て……、

「あれ！」

しかし、お浦は、紙帳の中へ引き込まれた。

附近ちかくの農家で飼っていると見え、家にわとり鶏の啼き声が聞こえて来た。

部屋の中も、紙帳の中も静かであつた。

紙帳は、闇の中に、経きよう帷かたびら子らのように、気味悪く、薄白く、

じつと垂れている。

家とり鶏の啼いた方角から、今度は、犬の吠え声が聞こえて来た。

祭礼の夜である、夜盗などの彷徨さまよう筈はない、参詣さんぎ帰りの人が、遅く、その辺を通るからであろう。

やがて、燧いし石を切る音が、紙帳の中から聞こえて来、すぐにボ

ツと薄黄いろい燈ひのひかり火が、紙帳の内側から射して来た。

さてここは紙帳の内部なかである。――

唐草の三揃いの寝具に埋もれて、お浦が寝ていた。夜具の襟が、頤の下まで掛かっている、濃化粧をしている彼女の顔が、人形の首かのように、浮き上がって見えていた。眼は細く開いていて、瞳が上うわまぶた瞼まぶたに隠され、白眼ばかりが、水気を帯びた剃かみそり刀の刀身みかのように、凄く鋭く輝いて見えた。呼吸をしている証拠として、額から、高い鼻の脇を通って、頬にかかっている後おくれ毛が、揺れていた。しかし尋常の睡眠ねむりとは思われなかった。気を失っているのらしい。

そのお浦の横に、夜具から離れ、畳の上に、膝を揃え、端然と、

五味左門が坐っていた。

ふと手を上げて鬢びんの毛を撫でたが、その手を下ろすと、ゆるやかに胸へ組み、

「蜘蛛くもはただ網を張っているだけだ」と、呟いた。

「その網へかかる蝶や蜂は……蝶や蜂が不わ注意いからだ」

と、また、彼は呟いた。

独ひとりごと言を云うその口は、残忍と酷薄とを現わしているかのよ

うに薄く、色も、赤味などなく、薄墨のように黒かった。

それにしても、紙帳に近寄る男は斬り、紙帳に近寄る女は虐さい遇なむという、この左門の残忍性は、何から来ているのであろう？

紙帳生活から来ているのであった。

彼の父左衛門は、生前、春、秋、冬を、その中に住み、夏は紙帳れを畳んで蒲団の上に敷き、寝莫蔭代りにしたが、左門も、春、秋、冬をその中に住み、夏は寝莫蔭代りに、その上へ寝た。そういうことをすることによって、亡父ちちの悩みや悶えを体得したかったのである。そう、彼の父左衛門は、紙帳に起き伏ししながら、天国の剣を奪われて以来衰えた家運について、悩み悶えたのであった。……しかるに左門は、紙帳の中で起き伏しするようになった。……だから、だんだん一本気いっこくとなり、狭量となり、残忍殺伐となった。何故だろう？ 狭い紙帳を天地とし、外界そとと絶ち、他を排し、自分一人だけで生活くらすようになったからである。そういう生活は孤独生活であり、孤独生活が極まれば、憂鬱となり絶望的となる。

その果ては、氣の弱い者なら自殺に走り、氣の強いものなら、鬱積している気持ちを、突発的に爆発させて、兇暴の行為をするようになる。左門の場合はその後者で、無意味といたいほどにも人を斬り、残忍性を發揮するのであった。

「突然はいつて来たこの女は？ ……」

眩き眩き彼は、女の寝顔を見た。その眼は、しんにゆう走の最後の一画を、眉の下へ置いたかのように、長く、細く、尻刎ねしていた。

「これは何んだ？」と、女の枕もとに転がっている、白い風呂敷包みの、長方形の物へ眼を移した時、彼は眩いた。やがて彼は手を延ばし、風呂敷包みを引き寄せ、包みを解いた。白木の刀箱が現われた。箱の表には、天国と書いてある。

「天国？」

彼は、うな魔されたような声で呟いた。瞬間に、額こそ秀でてい
 が、こめかみ顛顛の低い、頬の削けた、鼻が鳥の嘴のくちばしのように鋭く高い、
 蒼白の顔色の、長目の彼の顔が、注した血で、燃えるように赭く
 なった。烈しい感動を受けたからである。

「天国？」

彼の肩がまずふる顛え、その顛えが、だんだんに全身へ伝わって行
 った。

「天国？ ……まさか！」

にわかに、彼は口を歪め、眼尻へ皺を寄せた。嘲笑ったのであ
 る。

「まさか、こんな所に天国が！」

しかも彼の眼は、刀箱の箱書きの文字に食い付いているのであった。

彼が天国の剣に焦こがれているのは、親譲りであつた。彼の父、左衛門は、生前彼へこう云つた。「我が家には、先祖から伝わつた天国の剣があつたのじゃ。それを今から二十年前、来栖勘兵衛、有賀又兵衛という、浪人の一党に襲われ、奪われた。……どうともして探し出して、取り返したいものだ」と。——その左衛門が、自殺の直後、悴せがれ左門へ宛あたてて認しためた遺書には、万難を排して天国を探し出し、伊東忠右衛門一族に示せよとあつた。父の敵かたきとして忠右衛門を討ち取り、父の形見として紙帳を乞い受け、故郷を出

た左門が、日本の津々浦々を巡っているのも、天国を探し出そう
ためであつた。その天国がここにあるのである。

「信じられない！」

彼はまた魘されたような声で云つた。そうであろう、蜘蛛の網
にかかつた蝶のように、紙帳の中へはいつて来た、名さえ、素姓
さえ知らぬ女が、天下の至宝、劍の王たる、天国を持っていたの
であるから。

「……しかし、もしや、これが本当に天国なら……」

それでいて彼は、早速には、刀箱の蓋ふたを開けようとはしなかつ
た。開けて、中身を取り出して見て、それが贗物にせものであると証明
された時の失望！ それを思うと、手が出せないのであつた。ま

さか！　と思ひながら、もし天国であつたなら、どんなに嬉しかろう！　この一縷るの希望を持つて、左門は、尚も刀箱を見据えていたのであつた。

「これが天国なら、この天国で、伊東頼母めを返り討ちに！」
また、呻うめくように云つた。

恩讐壁一重

彼は、故郷くにからの音信たよりで、忠右衛門の悴の頼母が、自分を父の敵だと云い、復讐の旅へ出たということを知つた。彼は冷笑し、
(討ちに来るがよい、返り討ちにしてやるばかりだ)とその時思

った。そうして現在いまでは、天国を求め旅のついでに、こつちから頼母を探し出し、討ち取ろうと心掛けていたのであった。

正氣かえに甦ると見えて、お浦が動き出した。肉附きのよい、ムツチリとした腕を、二本ながら、夜具から脱き、敷き布団の外へ抛り出した。

と、左門は、刀箱を掴んだが、素早く、自分の背後へ隠し、その手で、膝脇の自分の刀を取り上げた。女が正氣に返り、騒ぎ出したら、一討ちにするつもりらしい。武道で鍛えあげた彼の体は、脂肪あぶらも贅ぜい肉にくも取れて、痩せすぎるほどに痩せていた。それでいて硬くはなく、撓しないそんなほどにも軟らかく見えた。そういう彼が、左の手に刀を持ち、それを畳の上へ突き及び腰をし、長く頸

を延ばし、上からお浦を覗き込んでいる姿は、昆虫——蜘蛛が、それを見守っているようであった。紙帳の中へ引き入れられてあ
る行燈あんどんの、薄黄いろい光は、そういう男女を照らしていたが、
男女を蔽うている紙帳をも照らしていた。内部うちから見たこの紙帳
の気味悪さ！ 血蜘蛛の胴体どうは、厚味を持つて、紙帳の面に張り
付いていた。左衛門が投げ付けた腸はらわたの、皮や肉が、張り付いたま
まで凝結こごつたからであった。それにしても、蜘蛛の網が、何んと
その領分を拡大ひろめたことであろう！ 紙帳の天井にさえ張り渡さ
れてあるではないか。血飛沫ちしぶきによつて作られた網が！ 思うにそ
れは、先夜、飯塚薪左衛門の屋敷で、左門によつて討たれた浪人
の血と、片足を斬り取られた浪人の血とによつて、新規あらたに編まれ

た網らしく、血の色は、赤味を失わないで、今にも、糸のように細い滴しずくを、二人の男女もへ、したたらせはしまいかと思われた。

お浦は、夜具からはみ出した腕を、宙へ上げ、何かを探すような素振りをしたが、

「頼母様！ 天国様を持って参りました！」
と叫んだ。もちろん、夢中で叫んだのである。

その頼母は、ずっと以前まえから、壁一重へだてた隣りの部屋へやに、お浦を待ちながら、肅然と坐り、「一刀斎先生剣法書」を、膝の上へ載せ、行燈の光で、読んでいた。

下婢おんなの敷いて行つた寝具よるのものは、彼の手で畳まれ、部屋の片隅

に置かれてあつた。女を待つに寝ていてはと、彼の潔癖性が、そうさせたものらしい。前髪を立てた、艶々しい髪に包まれた、美玉のような彼の顔は、淡く燈火の光を受けて、刻ほりを深くし、彫刻のような端麗さを見せていた。

「事ノ利ト云フハ、我一ヲ以テ敵ノ二ニ応ズル所也。譬バ、撃タトヘチテ請ケ、外シテ斬ル。是レ一ヲ以テ二ニ応ズル事也。請ケテ打ち、外シテ斬ルハ、一ハ一、二ハ二ニ応ズル事也。一ヲ以テ二ニ応ズル時ハ必ズ勝ツ」

彼は口の中で読んで行つた。

(すなわち、積極的に出れば必ず勝つということなのだ)

彼は、本来が学究的の性格だったので、剣道を修めるにも、道

場へ通つて、竹刀しなや木刀で打ち合うことだけでは満足しないで、沢庵禅師の「不動智」とか、宮本武蔵の「五輪の書」とか、そういう聖賢や名人の著書をひもと繙くことによつて、研究を進めた。今、

「一刀齋先生劍法書」を読んでいるのもそのためであつた。

（積極的に出れば必ず勝つということだな……少なくとも、五味左門と出合つた時には、この法で、この意気で、立ち合わなければならない）

（お浦はどうしたものであろう？）

頼母は、「一刀齋先生劍法書」から眼を放し、考えた。

さつき、縁側で人の気配がしたので、それかと思つたところ、隣りの部屋の襖が開き、そこへはいつて行つたらしく、音沙汰な

くなつた。その後は、人の来る様子もなかつた。

(浮気者らしかつたお浦、俺のことなど忘れてしまったのかも知れない)

時が経つて行つた。寝静まつている旅籠はたごからは、何んの物音も聞こえて来なかつた。

立ち向かつた左門と頼母

突然、隣りの部屋から、女の叫び声の聞こえて来たのは、さらにそれからしばらく経つた後のことであつた。(はてな?)と頼母は耳を澄ました。(変だ!)……というのは、その女の叫び声

が「頼母様！」と聞こえ、「天国様を」と聞こえたからであった。しかしそれだけで、後は聞こえて来なかった。

(空耳だったかな)

そのくせ頼母は、かたわ傍らの刀を掴み、立ち上がった。襖をあけて縁側へ出た。すぐ眼にはいったのは、月光で、霜でも降ったように見える広い中庭と、中庭をへだ距てて立っている母屋おもやとであった。

縁側を左の方へ数歩あゆめば隣り部屋の前へ行けた。そこで頼母は足音を忍ばせ、隣り部屋の前まで行き、また、耳を澄ました。たしかに人のいる気配はあったが、声は聞こえなかった。

(これからどうしたものだろう?)

ぶしつ不躰けに襖をあけることは出来なかった。とはいえ、女の声で、

自分の名を呼び、天国様をと云ったからには、——空耳でないとして——声の主を確かめたかった。

(まさかお浦が、こんな部屋とこへ来ていようとは思われないが……)
 しかし……いや、しかし何も無い、声の主を確かめさえすればよいのだ！ ……しかし、それをするには、やっぱり襖をあけなければ……。

(咎とがめられたら、部屋を間違えたと云えばよい)
 頼母は、わざと無造作に襖をあけた。

「あッ」

声と一緒に、ほとんど夢中で、頼母は、庭へ飛び下り、これも夢中で抜いた刀を、中段に構え、切っ先越しに、部屋の中を睨にらん

だ。

見誤りではなかった。帳内なかで灯っている燈の光で、橙黄色だいだいいろに見える紙帳が、武士の姿を朦朧もうろうと、その紙面おもてへ映し、暗い部屋の中に懸かっている。

（林の中に釣つてあつた紙帳だ。では、あの中にいる武士は、五味左門に相違ない。……先夜は、知らぬことはいえ、同じ飯塚薪左衛門殿の屋敷へ泊まり合わせ、今夜は、同じこの旅籠の、しかも壁一重へだてた部屋に泊まり合わせようとは）

運命の不思議さ気味悪さに、頼母は、一瞬間茫然としたが、

（左門は親の敵、あくまで討ち取らなければならぬのであるが、あの凄腕前では……）

体の顫えを覚えるのであった。

しかし彼にとつて、一抹の疑惑があつた。紙帳は、左門ばかりが釣つていゝとは限らない。紙帳の中の武士は、左門ではないかもしれない……。

(何んといつて声をかけたらよかろうか?)

彼はしばらく紙帳を睨んで躊躇ためらつた。

紙帳は、そういう彼を、嘲笑うかのように、そよぎもしないで垂れている。

「卒爾ながら、紙帳の中のお方にお訊ね致す」

と、とうとう頼母は、少し強こわばつた声で云つた。

「貴殿、先夜、飯塚薪左衛門殿の屋敷へ、お泊まりではなかつた

かな」

こう云つてから、これはいいことを訊いたと思つた。泊まつたといへば、紙帳の中の武士は、五味左門に相違ないからであつた。何故というに、左門は、先夜、自分の本名を宣なのつて、薪左衛門の屋敷へ泊まつたということであるから。

しかし紙帳の中からは、返辞がなく、紙帳に映っている人影も、動かなかつた。

頼母は焦心あせりを感じて来た。それで、ジリジリと、縁側の方へ歩み寄りながら、

「貴殿はもしや、五味左門と仰せられるお方ではござらぬかな？」と訊いた。

すると、ようやく、紙帳に映っている人影が動き、しわが唳れた声で、
「そう云われる貴殿は、どなたでござるかな？」
と訊き返した。

「拙者は……」

と、頼母は云ったが、当惑した。本名を宣るものだろうか、それとも、偽名を使ったものだろうか？

（相手が五味左門なら、当然宣りかけて討ち取らなければならぬいし、もしまた人違いなら、無断に襖をあけ、抜き身をさえ構えて誰すい何した無礼を、これまた、本名を宣って詫びなければならぬいのだから……）

頼母は、本名を宣ることにした。

「拙者ことは、伊東頼母と申し、隣りの部屋へ泊まり合わせたものでござる」

俄然騒動が起こった。

「おお頼母様でございますか！ 妾はお浦でございます！ ……
部屋を取り違えて……」

という声が、紙帳の中から起こり、すぐに、女の立ち上がる影法師が、紙帳の面へ映った。が、それは一瞬間で、たちまち悲鳴が起こり、女の姿が仆れるのが見え、つづいて燈火が消え、部屋の闇の中に、ぼんやりと白く紙帳ばかりが残った。

しかし、やがて、紙帳の裾が、鉄漿おはぐろをつけた口のようにワングリと開き、そこから、穴から出る爬虫類ながむしかのように、瘦せた身

長い高い武士が出て来た。刀をひっさげた左門であった。左門は、縁先まで一気に出、その氣勢に圧せられ、後へ退り、抜き身を構えている頼母を睨にらんだが、

「貴殿が伊東頼母殿か、拙者は五味左門、巡り逢いたく思いながら、これまでは縁なくて逢いませなんだが、天運拙つたなからこよい今宵逢い申したな。本懐！ ……貴殿にとっては拙者は、父の敵でござろうが、拙者にとつても貴殿は、父の敵の嫡ちやく宗そう、恨うらみがござる！ 果たし合いましうぞ！」

と、例の、噎れた、陰湿とした声で云った。

難劍「逆ノ脇」

左門は急に驚いたように、

「貴殿とは、今宵が初対面と思いましたが、そうではござらぬな。過ぐる夜拙者、道了塚のほとりの、林の中で野宿をいたし、通るかかりのお武家呼び止め、腰の物拝見を乞いましたところ、拒絶とわられ、やむを得ず、一当てあてて……フツフツ、若衆武士殿を氣絶させましたが、どうやらそれが貴殿らしい。……頼母殿、さようでござろう」

痛いところへさわられた頼母は、赤面し、切齒し、黙っていた。しかし彼には左門が気味悪く思われてならなかった。黒く大きく立っている離座敷はなれ、——壁と襖とは灰白はいしろかったが、その襖の開

いている左門の部屋は、洞窟ほらの口のように黒く、そこに釣つてあ
 る紙帳は、これまた灰白く、寝棺のように見え、それらの物像ものを
 背後うしろにして、瘦せた、身長せいの高い左門が、左手に刀を持ち、その
 拳を腰の上へあて、右手の拳も腰の上へあて、昆虫むしが飛び足を張
 ったような形で、落ち着きはらつて立っている姿は、全く気味悪
 いものであつた。

左門は云いつづけた。

「ところで、先刻さきほど、一人の女子が、拙者の巢へ——寝所へ、迷
 い込んでござる。美しい女子ではあり、先方から参つたものでは
 ありして、拙者、遠慮なく、労いたわり、介抱いたし……女子も満足い
 たしたかして眠つてござる。……しかるにその女子、貴殿が姓名

を宣られるや、眼覚め、叫びましたのう。『頼母様でございますか、妾はお浦でございます。……部屋を取り違えてこんな目にと。……さては、お浦という女子、貴殿の恋人そうな。……気の毒や、拙者、貴殿の恋人を……』

ここで左門は例の含み笑いをしたが、

「それにいたしても、不思議のことがござったよ。……そのお浦という女子、天国の剣を所持し参ったことじゃ。……おお、そうそう、そういうえば、そのお浦儀、夢の中で『頼母様、天国様を持つて参りました』と叫びましたつけ。……さては、貴殿へお渡ししようため、天国を持参したものと見える。……今もお浦儀、その天国を、大事そうに抱いて寝てござる」

こう云つて来て左門は、お浦がああ叫んで立ち上がったところを、一当てあてて気絶させ、気絶したお浦が、刀箱の上へ仆れた姿を、脳裡へ描き出した。

「天国の剣を欲しがるは拙者で、貴殿ではない筈。その理由は申すまでもござるまい。……拙者といたしては、天国の剣をもつて、貴殿はじめ、伊東家の一族を、族滅ぞくめついたしたのでござる。……とはいえ、ああまで大切そうに、お浦殿が抱きしめている天国を、もぎ取るも気の毒。では、この関ノ孫六で、貴殿の息の根を止めることと致そう。行くぞーッ」

と叫んだ時には、左門は庭へ飛び下りてい、関ノ孫六は引き抜かれていた。

ハーツとばかりに呼吸を呑み、思わず数歩飛び退いた頼母は、相手の構えを睨んだ。何んと、左門の刀身が見えないではないか！ 見えているものは、肩から、左の脘まで湾曲している右の腕と、踏み出している右足とであった。そう、そういう姿勢で、ノビノビと立っている左門の体であった。

（何んという構えだ！ おお何んという構えだ！）

頼母は、怯えた心でこう思った。（あれが反対なら、脇構えなのだが）

そう、刀を自分の右脇に取り、切っ先を背後にし、斜め下にし、刀身を相手に見えないようにし、左足を一步踏み出したならば、五法の構えの一つ、脇構えになるのであるが、左門の構えは、反

対なのであった。

(では反対の脇構え——「逆ノ脇」なのであろうか?)

それにしても、あの構えは、どう変化することであろう? こ
つちが、彼奴きやつの真つ向へ斬り込んだならば、それより先に、彼奴
は、背後に隠している刀で、こつちの胴を払うかもしれない。こ
つちから相手の胴へ斬り込んだならば? それより先に、相手は、
こつちの頸へ、刀を飛ばせるかもしれない。突いて出たならば?
払い上げて、胸を突くだろう! どう変化するか解らない隠さ
れた刀の恐ろしさ!

紙帳を巡って

左門に逢つたなら「我の一を以もつて敵の二に応じ」よう。すなわち、攻撃的に出て、機先を制しようなどと考えていた頼母は、相手の構えを見ただけで、萎縮してしまった。しかし、心中の怒りは、その反対に昂たかまつた。恋人などではないお浦が、どう左門に扱われようと、意に介するところではなかったが、しかし、左門が、お浦をこの身の恋人と解し、その恋人を……そうしてこの身を嘲笑していることが、怒りに堪えなかつた。天国を左門に取られたことも、鬱うつ忿ぶんであつた。自分の手へ渡つたなら、打ち碎くべき天国なので、刀そのものに執着があるのではなかつたが、左門の手へ渡つたとあつては、自分の父忠右衛門の、天国不存在

説が、あまりにもハッキリと破壊されたことになる。鬱忿を感じざるを得なかつた。

(父の敵、自分の怨み、おのれ汝左門、討たいで置こうか！)

怒りは頼母を狂気させた。

しかし左門の凄さ！

(どうしよう？)

この時、忽然と思ひ出されたは、やはり伊藤一刀斎の、剣道の極意を詠つた和歌であつた。

(切り結ぶ太刀たちの下こそ地獄なれ身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。

……そうだ、身を捨ててこそ！)

頼母は猛然と斬り込んだ。

と、その瞬間、左門は、水の引くように、滑らかに後へ退いた。
(逃げるぞ！)

頼母は驚喜した。自分の氣勢に恐れて、左門が逃げたと思つたからであつた。頼母は追つた。

何んたる軽捷けいしょう！ 左門は、背後うしろざまに縁の上へ躍り上がった。

構えは？ 依然として逆ノ脇！ そこへ柳が生えたかのように、嫻しなやかに、少し傾き、縁先まで追つて来た頼母を見下ろしている。危ないかな頼母！ 左門の、例の、肩から左脇まで柔らかに湾曲している腕が延び、その手に握られて、背後ざまに隠されている刀が、電光のように閃めき出た時、お前の脳天は、鼻から頤まで、切り割られるのを知らないのか！

それにしても左門は、何んのために縁まで退いたのであろう？
暗い部屋の中の、灰白い紙帳を背後にして立っている左門が、
心の中で叫んでいる声を聞いたなら、その理由を知ることが出来
よう。

「父上よ父上よ、あなたを辱^はかしめ、あなたを憤死させました、
忠右衛門の悴頼母めを、今こそ討ち取りまして、父上の怨みの残
りおります紙帳へ、その血を注ぐでございましょう。止どめは、
天国の剣で致しまする」

つまり左門は、頼母の血を、亡父の怨恨^{うらみ}の残っている紙帳へ注
いでやろうと、紙帳間近まで、頼母を誘^{おび}き寄せて来たのであつた。
そうと知らない頼母は不幸であつた。自分の氣勢に圧せられて

逃げる左門、たかが知れている！ もう一息だ！ こう思った頼母は不幸であつた。

微塵みじんになれ！ と、頼母は、縁へ躍り上がり、斬り付けた。

「あッ」

左門の姿が消え、眼前に紙帳が、風に煽あおられたかのように、戦そよいでいた。

(部屋の中へ逃げ込んだのだな)

頼母は突嗟とっさに思った。

(紙帳の中へはいった筈はない。……では、背後に?)

さすがに用心をし、頼母はソロソロと部屋の中へはいつて行つた。敷居を跨またぎ左右を見た。正面三、四尺の間隔へだたりを置いて、紙

帳が釣つてあり、その左右は闇であり、闇の彼方には、部屋の壁が立っている筈であつた。……左門の姿はどこにも見えなかつた。（紙帳の背後に隠れているのか、それとも、左右どつちかの、紙帳の横手に、身をひそめているのか？）

頼母は、紙帳を巡つて、敵を討とうと決心しながらも、右へ行くか、左へ行くかかと迷つた。しかしとうとう、左手へ心を配りながら、右の方へ進んだ。紙帳の角がすぐ前にあつた。角の向こう側に、左門が隠れているかもしれない。頼母は、やにわに刀を突き出して見た。闇を突いたばかりであつた。額に、冷たい汗を覚えながら、頼母はホツと息を洩らし、紙帳の角まで進んだ。前方を覗んだ。部屋の壁と、紙帳の側面とで出来ている空間が、

ただ、暗く細長く見えるばかりで、敵の姿は見えなかった。頼母は、ソロソロと進んだ。すぐに、紙帳の二つ目の角まで来た。

頼母の足は動かなくなった。（あの角の向こう側にこそ）こう思うと、居縮いすくむのであった。ほんのさつきまで、左門など何者ぞと、気負い込んでいた彼の自信も勇氣も、今は消えてしまった。技倆うでの相違がそうさせるのであり、十畳敷きほどの狭いこの部屋の中に、恐ろしい相手が確かにおりながら、その姿が見えないということが、そうさせるのであった。

（どうしたものか？）

この時、靈感のようなものが心に閃めいた。

頼母はやにわに刀を空に揮ふるった。紙帳の釣り手を切ったのである。

る。紙帳の一角が、すぐに崩れ出した。やわやわと撓たわみ、つづいて沈み、方形であつた紙帳が、三角の形となつて、暗い中に懸かつて見えた。しかし、左門の姿は見えなかつた。三つ目の紙帳の角へ来て、その釣り手を切つた時にも、左門の姿は見えなかつた。紙帳は今や、二つの釣り手を切られ、庭に面した残りの二筋の釣り手によつて、掲げられているばかりとなり、開けられてある襖を通し、中庭が見えていた。

（左門の隠れ場所が解つた。紙帳の四つ目の角の蔭だ）頼母はこう思った。

左門はたして何処いずこ

それに相違なからうではないか。頼母は、部屋へはいるや、右手へ進み、第一、第二、第三、と、三つまで、紙帳の角を通つたのであつた。しかも、左門はいなかつた。では、残つた、最後の紙帳の四つ目の角の向こう側に、おそらく膝を折り敷き、刀を例の逆ノ脇に構え、豹のような眼をして、狙っているに相違ないではないか。

こう思うと頼母は、また新たに恐怖を感じたが、刀を中段にヒタとつけ、その角を睨にらみ、様子をうかがつた。

ところが、これより少し以前まえから、母屋に近い中庭に、二つの人影があつて、こつちを眺め、囁ささやいていた。

角右衛門と紋太郎とであつた。

さつきから中庭で、人の云い争うような声が聞こえた。そこは五郎蔵一家の用心棒である二人であつた。身内同士間違いを起こしたのであるまいかと、二人して寢所から脱け出し、様子を見に来たところ、向こう側の離座敷はなれの襖が開いてい、紙帳の釣つてあるのが見えた。

「紙帳だーッ」

「うむ、紙帳が！」

二人ながら呻くように云つた。

先夜、飯塚薪左衛門の屋敷で、紙帳の中の武士に、同僚二人を討たれたことを思い出したからである。

と、紙帳の釣り手が、次々に二カ所まで切られたのが見えた。

(何か事件が起こっている)と、二人ながら思った。

「小林氏うじ」と、角右衛門は、汗を額へ産みながら、「これは、あの時の武士らしゅうござるぞ」

「さよう」と、紋太郎は、若年だけに、一層おび怯え、地に敷かれて
いる影法師が揺れるほどに顫えながら、「其そ奴がまた誰かを……
どつちみち、あの部屋で切り合いが……」

「彼奴きやつとすれば同僚の敵、……討ち取らいでは……と云つて、あの
凄い剣技うででは……こりやア親分にお話しして……」

「乾児衆こいぶんにも……」

「うむ。……では貴殿……」

「心得てござる……」

と、紋太郎は、母屋の縁へ駈け上がり、五郎蔵一家の寝ている、奥座敷の方へ走って行った。

それを見送ろうともせず、怯えた眼で、角右衛門は、紙帳ばかりを見ていた。

と、また、釣り手が一筋切られた。

切ったのは頼母であった。

頼母は、あるいは左門が、最初の位置から身を移し、紙帳の、第一の角の背後に隠れていようもしれぬと思い、ソロソロと紙帳の裾を巡り、引き返し、真つ先に自分が曲がった紙帳の角まで近づき、釣り手を切って落としたのであった。

「出る！ 左門！」

と頼母は叫んだ。しかし、叫んだものの、飛びかかつて行こうとはせず、反対に、飛び退くと、部屋の背後の壁へ背をもたせ、刀を、例の中段に構え、眼前を睨んだ。

釣り手を切られた紙帳の角は、やわやわと撓み、やがて崩れ、今は一筋の釣り手に掲げられている紙帳は、凋しほんだ朝顔の花を、逆さかさに懸けたような形に、斜面をなして懸かっていた。

左門の姿は見えなかった。

いよいよ左門の居場所は確実に解った。やはり、最後に残った釣り手の背後——釣り手の角の背後にいたのであった。

その方へグツと切っ先を差し付け、頼母は大息を吐いた。

さよう、左門はその位置に、片膝を敷き、片膝を立て、刀を逆ノ脇に構え、最初はじめから現在いままで、寂然せきぜんと潜んでいたのであつた。一方は、隣り部屋と境いをなしている壁であり、一方は、閉めのこされてある襖であり、正面は紙帳である。——この三つのものでよつて、濃い闇を作っているこの場所は、何んと身を隠すに屈竟な所であろう。

彼は、頼母が、自分の方へは来ないで、反対の方へ進み、紙帳の釣り手を、次々に切つておとすのを見ていた。走りかかり、背後から、一刀に斬り斃たおすことは、彼にとっては何んでもないことであつた。しかし、彼はそれをしなかつた。何故だろう？ 蜘蛛が、自分の張つた網へ、蝶が引つかかろうとするのを、網の片隅

に蹲うづくま居りながら、ムズムズするような残忍な喜よろこび悦をもつて、じつと眺めている。——それと同じ心理こころを、左門が持っているからであつた。

まだ彼は動かなかつた。

しかし彼には、紙帳の彼方むこうに、刀を構え、斬り込もう斬り込もうとしながらも、こつちの無言の気合いにに圧せられ、金縛りのようになつている、頼母の姿が、心眼に映じていた。

彼は、姿を見せずに、気合いだけで、ジリジリと、相手の精神こころを疲つか勞れさせているのであつた。

斬り下ろした左門

神氣こころの疲労つかれが極点に達した時、相手は自然ひとりでに仆れるか、自暴自棄に斬りかかって来るか、二つに一つに出ることは解っていた。そこを目掛け、ただ一刀に仕止めてやろう。——これが左門の狙いどころなのであった。

彼の観察は狂わなかつた。頼母は、凋しぼんだ朝顔を逆さに懸けたような形の紙帳の、その萼がくにあたる辺を睨み、依然として刀を構えていたが、次第に神氣こころが衰え、刀持つ手にしこりが来、全身に汗が流れ、五体からだに顫えが起こり、眼が眩みだして来た。……と、不意に一足ヒヨロリと前へ出た。蝦蟇がまが大きく引く呼吸いきをするや、空を舞っている蠅が、弾丸たまのようにその口の中へ飛び込んで行く

であろう。ちようどそのように、頼母は、眼に見えない左門の氣合いに誘おびきよ引せられたのであつた。ハツと氣付いた頼母は、背後へ引いた。が、次の瞬間には、ヒヨロヒヨロと、もう二足前へ誘おびきだされていた。

猛然と頼母は決心した。

(身を捨ててこそ！)

畳の上に敷かれてある紙帳を踏み、例の萼にあたる一点を目ざし、真一文字に突つ込んだ。

グンニヤリとした軟らかい物を蹠あしうらに感じた。萼が崩れ落ちた。

一筋の釣り手が、切つて落とされたのである。その背後へ、巨大な丸太がノシ上がった。自分で釣り手を切つて落とし、その刀を

上段に振り冠り、左門が突つ立つたのであつた。闇の夜空を縦に突ん裂く電光の凄さを見よ！ 左門は斬り下ろした！ 悲鳴が上がつて頼母の体が紙帳の上へ仆れた。しかし悲鳴は女の声であつた。斬り損じた刀を取り直し、再度頭上へ振り冠つた左門の足もとを、坂を転がり落ちる丸太のように、頼母の体が転がり、縁側の方へ移つて行つた。紙帳の中の、氣絶しているお浦の体を踏んだのは、頼母にとっては天祐であつた。それで彼は足を掬われて仆れ、左門の太刀を遁がれることが出来たのである。左門は、転がつて逃げる頼母を追つた。しかし縁まで走り出た時には、既に頼母は起き上がり、庭を走つていた。

「逃げるか、卑怯者、待て！」

左門は追ひ縋った。

喊とぎのこえ 声こゑが起こつた。

十数人の人影が、抜き身を芒すすきの穂のように揃え、一団となり、庭を、こつちへ殺到して来ようとしていた。

五郎藏の乾兒こぶん達であつた。

その中から角右衛門の声が響いた。

「彼奴きやつこそ、先夜、飯塚殿の屋敷で、我々の同僚二人を、いわれなく討ち果たしました悪侍でござる！」

つづいて、紋太郎の声が響いた。

「我々同僚の敵かたき、お討ち取りくださいなれ！」

その人数の中へ、駈け込んで行く頼母の姿が見えた。

頼母の声が響いた。

「彼は五味左門と申し、拙者の実父忠右衛門を討ち取りましたる者、本日巡り逢いましたを幸い、復讐いたしたき所存……」

群の中には、松戸の五郎蔵もいた。寝巻姿ではあるが、長脇差しを引つ下げ、抜け上がっている額を月光に曝らし、左門の方を睨んでいた。

彼は、紋太郎によつて呼び立てられ、眼覚めるや、乾兎たちと一緒に、庭へ出て来たのであつた。彼は、来る間に、紋太郎から、紙帳武士のどういふ素姓の者であるかを聞かされた。飯塚薪左衛門の屋敷で、角右衛門や紋太郎の同僚を、二人まで、いわれもないのに討ち果たした悪侍とのことであつた。しかし彼としては、

その言葉を、どの程度まで信じてよいか解らなかつた。が、庭へ出て来て、前髪立ちの武士から、その武士が、親の敵だと叫ばれ、その武士が、前髪立ちの武士を追つて走つて来、自分たちの姿を見るや、刀を背後へ隠して下げ、右腕を左胸まで曲げて柄を握り、右足を踏み出した異様な構えで、全身から殺気を迸らせながら、しかも寂然と静まり返つて立つた姿を見ると、容易ならぬ相手だと思ひ、いかさま、人など、平気で幾人でも殺す奴だろうと思つた。

「野郎ども」と五郎蔵は、乾児たちに向かつて怒鳴つた。「あの三ピンを、引つ包んで膾くろに刻なますんでしまえ！　しかし殺しちやアいけねえ。止どめはお若衆に刺させろ！　やれ！」

声に応じて乾児たちは、一本の杭を目差して、黒い潮が、四方から押し寄せて行くように、左門を目掛け、殺到した。

黒い潮が、渦巻き、沸わき立つように見えた。飛沫しぶきが、水銀のように四方へ散った。——白刃が前後左右に閃めくのであった。数声悲鳴が起こった。渦潮は崩れ、一勢に引いた。杭は、わずかにその位置を変えたばかりで、同じ姿勢で立って、その前の地面に、三個みっつの死骸が——波の引いた海上に、小さい黒い岩が残ったかのように、転がっていた。左門に斬られた五郎蔵の乾児たちであつた。

子供を産む妖怪蜘蛛

五郎藏は地団駄を踏み、いつか抜いた長脇差しを振り冠り、左門へ走りかかったが、にわかには足を止め、離座敷はなれの方を眺めると、

「蜘蛛くもが！ 大蜘蛛が！」

と喚き、脇差しをダラリと下げてしまった。

畳数枚にもあたる巨大な白蜘蛛が、暗い洞窟の中から這い出すように、今、離座敷はなれの、左門の部屋から、縁側の方へ這い出つつあった。背を高く円く持ち上げ、四本の足を引き摺るように動かし、やや角ばって見える胴体を、縦に横に動かし——だから、太い、深い皺を全身に作り、それをウネウネと動かし、妖怪蜘蛛ばけものは、やがて縁から庭へ下りた。と、離座敷が作っている地上の

陰影^{かげ}から、蜘蛛は、月の光の中へ出た。蜘蛛の白い体に、無数に附着^ついてる斑点^{まだら}は、五味左衛門の腸^{はらわた}によって印^つけられた血の痕であり、その後、左門によって、幾人かの人間が斬られ、その血が飛び散って出来た斑点でもあった。そうして、この巨大な妖怪蜘蛛は、紙帳なのであった。では、四筋の釣り手を切られ、さつきまで、部屋の中に、ベツタリと伏し沈んでいた紙帳が、生命^{いのち}を得、自然と動き出し、歩き出して来たのであろうか？ 幾人かの男女が、その内外で、斬られ、殺されて、はずかしめられ、怨みの籠っている紙帳である、それくらいの怪異は現わすかもしれない。

庭を歩いて行く紙帳蜘蛛は、やがて疲労^{つか}れたかのように、背を低めて地へ伏した。しかしすぐに立ち上がった。背が高く盛り上

がった。と、それに引き絞られて、紙帳の四側面が内側へ窪み、切られ残りの釣り手の紐ひもを持った四つの角が、そのためかえつて細まり、さながら四本の足かのようにになった。窪んだ箇所は黒い陰影を作り、隆起している角は骨のように白く見えた。紙帳蜘蛛は歩いて行く。と、蜘蛛は、地面へ、子供を産み落とした。彼が地面へ伏し沈み、やがて立つて歩き出したその後へ、長い、巾の小広い、爬虫類を——蛇くちなわを産み落としたのである。しかしそれは、黒繻子くろじゆすと、紫縮緬とを腹合わせにした、女帯であった。女帯は、地上に、とぐろを巻き尻尾しっぽにあたる辺を裏返し、その紫の縮緬の腹を見せていた。蜘蛛は、自分の影法師を地に敷きながら、庭を宛あてなく彷徨さまよつて行つた。と、また子供を産み落とした。紅裏をつ

けた、藍の小弁慶の、女物の小袖であつた。蜘蛛は、庭の左手の方へ、這つて行つた。

やがて、母屋と離座敷はなれとの間の通路みちから、この旅籠はたご、武蔵屋の構外そとへ出ようとした。そうしてまたそこで、地上へ、血溜りのよな物を——胴抜きそとの緋の長襦袢を産み落とした。

三個の死骸を間に挟み、左門と向かい合い、隙があつたら斬り込もうと、刀を構えていた頼母も、その背後に、後見でもするように、引き添つていた五郎蔵も、刀を逆ノ脇に構え、頼母と向かい合つていた左門も、その左門を遠巻きにしていた五郎蔵の乾児たちも、そうして、この中庭の騒動に眼を覚まし、母屋の縁や、庭の隅などに集まっていた、無数の泊まり客や、旅籠おんなの婢や番頭

たちは、この、紙帳蜘蛛の怪異に胆を奪われ、咳一つ立てず、手足を強張らせ、呼吸を呑んでいた。不意に、左門の口から、呻くような声が迸ったかと思うと、紙帳を追って走り出した。

「遁がすな！」という、五郎蔵の、烈しい声が響いた。瞬間に、乾児たちが、再度、四方から、左門へ斬りかかって行く姿が見えた。しかし左門が振り返りざま、宙へ刀を揮うや、真つ先に進んでいた乾児の一人が、左右へ手を開き、持っていた刀を、氷柱のように落とし、反げざまに斃れた。

蜘蛛の姿は消えていた。

その蜘蛛が、しばらく経って姿をあらわしたのは、武蔵屋から

数町離れた、瀬の速い川の岸であった。その岸を紙帳蜘蛛は、よろめきよろめき、喘ぎ喘ぎ、這っていた。でも、とうとう疲労れきったのであろう、四足を縮め、胴体に深い皺を作り、ベタベタと地へ腹這った。円く高く盛り上がっていた背も撓み、全体のが角張り、蜘蛛というより、やはり、一張りの紙帳が、地面へ捨てられたような姿となった。川面を渡って、烈しく風が吹くからであったが、紙帳は、痙攣を起こしたかのように、顫えつづけた。と、不意に紙帳は寝返りを打った。風が、その内部へ吹き込んだため、紙帳が一方へ傾き、ワングリと口を開けたのである。忽然、紙帳は、一間ほど舞い上がった。もうそれは蜘蛛ではなく、紙鳶であった。巨大な、白地に斑点を持った紙鳶は、蒼々と月の

光の漲みなぎっている空を飛んで、三間ほどの彼方むこうへ落ちた。でも、また、すぐに、川風に煽られ、舞い上がり、藪や、小丘や、森や、林の点綴つつづられている、そうして、麦畑や野菜畑が打ち続いている平野の方へ、飛んで行つた。

怨恨上と下

最初、紙帳の舞い上がった地面に、一人の女が仆れていた。お浦であつた。水色の布きぬを腰に纏きっているばかりの彼女は、水から上がった人魚のようであつた。

彼女は疲労つかれ果かてていた。左門によつて気絶させられたところ、

頼母に踏まれて正氣づいた、そこで彼女は夢中で遁がれようとした。が、彼女を蔽うている紙帳が、彼女にまつわり、中から出ることが出来なかつた。冷静に考えて、行動したならば、紙帳からのがれた脱出すことなど、何んでもなかつたのであろうが、次から次と——部屋の間違い、氣絶、斬り合いの叫喚さけび、次から次と起こつて来た事件のため、さすがの彼女も心を顛倒てんとうさせていた。そのため、紙帳を冠つたまま、無二無三に逃げ廻つたのである。体をもかくにつれて、帯や衣裳は脱げて落ちた。

もくず藻屑のように振り乱した髪を背に懸け、長い頸うなじを延びるだけ延ばし、円い肩から、豊かな背の肉を、弓形にくねらせ、片頬を地面へくっ付けたまま、今にも呼吸が切れそうなほどにも、烈しく

喘いでいるのであった。

(咽喉のどが乾く！ 水が飲みたい！)

彼女はこればかりを思っていた。

(川があるらしい、水の音がする)

この時までも、小脇に抱いていた天国の刀箱を、依然小脇に抱いたままで、彼女は川縁の方へ這って行った。

一方は宿の家並みで、雨戸をとぎした暗い家々が、数町の彼方あなたに立ち並んでおり、反対側は髪川で、速い瀬が、月の光を砕いて、銀箔を敷いたように駛はしつてい、その対岸に、今を盛りの桜の老樹が、並木をなして立ち並んでい、烈しい風に、吹雪のように花を散らし、花は、川を渡り、お浦の肉体の上へまで降って来た。そ

うして、その桜並木の遙か彼方むこうの、斜面をなしている丘の上の、諏訪神社の辺りでは、火祭りの松たいまつの火が、数百も列をなし、うね蜒り、渦巻き、揉みに揉んでいるのが、火龍が荒れまわっているかのように見えた。

お浦は、やっと川縁まで這い寄った。彼女は、崖の縁を越して、前の方へ腕を延ばした。すぐそこに川が流れているものと思つたかららしい。

（水が飲みたい、水を！）

しかし川は、彼女のいる川縁から、一丈ばかり下の方を流れていた。そうして、川縁から川までの崖は、中窪みに窪んでい、その真下は岩組であつた。

その岩組の間に挟まり、腰から下を水に浸し、両手で岩に取り縋り、半死半生になつてゐる男があつた。渋江典膳であつた。

彼は、この髪川の上流、竹藪の側で、お浦のため短刀で刺された上、川の中へ落とされた。女の力で刺したのと、衣裳の上からだつたので、傷は浅かつた。しかし、川へ落ちた時、後脳を打ち、氣絶した。でも、氣絶したのは、典膳にとつては幸運だつた。水を飲まなかつた。その典膳は、ここまで流されて来、ここの岩組の間に挟まり、長い間浮いてゐるうちに蘇生した。蘇生はしたが、衰弱しきつてゐる彼は、川から這い上がることさえ出来なかつた。助けを呼ぶにも、声さえ出なかつた。彼はただ、岩に取り縋つてゐるだけで精一杯であつた。

彼の心は、五郎蔵とお浦とに対する、怒りと怨みとで一杯であった。

(彼奴ら二人に復讐するたればかりにも、生き抜いてやらなけりやア)

こう思っているのであった。

(昔の同志、同じ浪人組の仲間を、頭分たる彼奴が、女を使つて殺そうとしたとは！ 卑怯な奴、義理も人情も知らない奴！ …… そつちがその気なら、こつちもこつち、彼奴の素姓を^{あば}発き、その筋へ訴え出てやろう。即座に縛り首だ！ 五郎蔵め、思い知るがいい！ …… お浦もお浦だ、女の分際で、色仕掛けで俺を^{たばか}騙り、殺そうとは！ どうともして引つ捕らえ、^{なぶ}鬻り殺しにしてやらな

けりやア！)

川から上がりたい、水から出たいと、彼は縋っている手に力をこめ、岩を這い上がろうとした。しかし、腰から下を浸している水の、何んと粘つくく、黴かもちのように感じられることか！ どうにも水切りすることが出来ないのであった。

と、その時、頭上から、土塊つちくれと一緒に、何物か崖をすべり落ちて来、岩に当たり、幽かすかな音を立て、水へ落ちた。

典膳は、水面を見た。細い長い木箱はこが、月光で銀箔のように光っている水に浮いて、二、三度漂い廻ったが、やがて下流の方へ流れて行った。

典膳は、崖の上を振り仰いだ。

なまなま

生々と白く、肥えて円い、女の腕が、長く延びて差し出されてい、指が、何かを求めするように、閉じたり開いたりしていた。

「あ」

と、典膳は、思わず声を上げた。意外だったからである。しかし、次の瞬間には、誰か、女が、この身を助けよう、引き上げようとして、手を差し出してくれたのだと思つた。

「お助けくださいますか、^{かたじ}忝けのうござる。生々^{しやうじやうよよ}世々、
ご恩に着まするぞ」

と、典膳は、咽喉^{のど}にこびりついて容易に出ない声を絞つて云い、一気に勇気を出し、川から岩の上へ這い上がった。

葉の恋心

腕の主はいうまでもなくお浦で、お浦は、この期ごになつても、恋しい男の頼母へ渡そうと、抱えていた天国の刀箱を、不覚にも川の中へ落としたので驚き、延ばしている腕を一層延ばし、思わず指を蠢うごめかしたのであつた。その時彼女は、崖下から、人声らしいものの、聞こえて来るのを聞いた。彼女は狂喜し、地を摺つて進み、肩と胸とを、崖縁からはみ出させ、崩れた髪で、額縁のように包んだ顔を覗かせ、崖下を見下ろし、

「もし、どなたかおいででございますか。刀箱を落としましてございます。その辺にありはしますまいか？ ……あ、水が飲みた

い！ 水を汲んでくださいまし」

典膳は、この時、もう岩の上に坐りこんでいたが、女の声を聞いても、耳に入れようとはせず、ただ、女の腕に縋り、それを手頼りに、崖の上へあがろうと、ひしと女の手を握った。

「お願いでございます。この手を、グツとお引きくださいませ。それを力に、私、崖を上がるでございます。ご女中、さ、グツとこの手を……」

お浦は、突然手を握られて、ハツとしたが、咽喉の渴きがいよいよ烈しくなつて来たので、握られた手を振り放そうとはせず、「水を！ まず、水を！ ……その後にお力になりましょう。手をお引きいたすでございます。……おお、水を！」

この二人を照らしているものは、練絹ねりぎぬで包んだような、朧おぼろの月であつた。

典膳は、やつと、ヒヨロヒヨロと立ち上がった。お浦の体は、いよいよ崖の方へはみ出した。

二人の顔はヒタと会つた。

「……………」

「……………」

鶉うがらす鳥が、川面を斜はすに翔けながら、啼こぼき声を零こぼした。

こういう事件があつてから三日の日が経つた。

その三日目の朝、飯塚薪左衛門の娘しおりの葉は、屋敷を出て、郊外

を彷徨さまよつた。さまよいながらも彼女の眼は、府中の方ばかりを眺めていた。連翹れんぎょうと李すももの花で囲まれた農家や、その裾を丈低い桃の花木で飾った丘や、朝陽を受けて薄瑪瑙うすめのう色に輝いている野川や、鶯うぐいすな菜や大根の葉に緑濃いろどく彩色いろどられている畑などの彼方あなたに、一里の距離へだたりを置いて、府中の宿が、その黒つぽい家並みを浮き出させていた。

(今日あたり頼母様にはお帰りあそばすかもしれない)

(いいえ、頼母様、是非お帰りあそばしてくださいまし)

山水のように澄んでいる眼には、愛情の熱が燃え、柘榴ざくろの蕾つぼみのように、謹ましく紅い唇には、思慕の艶が光り、肌理きめ細かに、蒼いまでに白い皮膚には、憧憬あこがれの光沢つやさえ付き、恋を知った処女おとめ

栞の、おお何んとこの三日の間に、美しさを増し、なまめかしさを加えたことだろう！ 彼女は過ぐる夜、屋敷の中庭で、頼母と会つて以来、それまで、春をしらずに堅く閉ざしていた花の蕾が、一時に花弁はなびらを開き、色や馨りかおを悩ましいまでに発散はなすように、栞も、恋心を解放はなし、にわかにかに美しさを加えたのであつた。

わたしおっと
（妾の良人は頼母様の他にはない）

処女の一本気が、恋となつた時、行きつくところはここであつた。まして栞のように、発狂している父親を看病し、老いたる僕しもべや乳母うばや、荒々しい旅廻りの寄食浪人などばかりに圍繞とりまかれ、陰鬱な屋敷に育つて来た者は、型の変つた箱入り娘といふべきであり、箱入り娘は、最初にぶつかつて来た異性に、全生涯を委まかそ

うとするものであるにおいてをや。殊に相手が、若く、凜々しく、頼り甲斐のある、無双の美丈夫であるにおいてをや。

(頼母様、早くお帰りなされてくださりませ)

その頼母は、自分たち飯塚家に、わけても父薪左衛門に仇をす^{あだ}る、松戸の五郎蔵という博徒の親分が、何故父親に仇をするのか、五郎蔵の本当の素姓は何か？ それを、自分たちのために探り知るべく、出かけて行ってくれたのであった。

(頼母様、お会いしとうございます。早くお帰りなされてくださいます)

五郎蔵の素姓も、五郎蔵が、何故父親に仇をするのかをも、頼母の口から聞きたくはあったが、しかしそれよりも、狂わしいま

でに恋している処女おとめは、ただひたむきに、恋人の顔が見たいのであつた。

髪川から、灌漑用に引かれています堰せきの縁へりには、堇すみれや、紫雲英げんげや、
いかりそう碇草いかりそうやが、精巧な織り物を展のべたように咲いてい、水面には、
みずすまし水馬みずすましが、小皺のような波紋を作つて泳いでい、底の泥には、
どじょう泥鰌どじょうの這つた痕が、柔らかい紐のように付いていた。ことごと
はなげなわく春酣はなげなわの景色であつた。

「おや」と呟いて、葉は、堰の縁へ、赤緒の草履の足を止めた。
 水面に、水藻をまとい、目高の群に囲まれながら、天国と箱書き
 のある刀箱が、浮いていたからである。

名刀天国

（天国といえは、氣を狂わせておられるお父様が、狂氣の中でも、何彼と仰せられておられた名劍の筈だが……）

それが、こんな堰に浮いているとは思議だと、葉は、しばらく刀箱を見ていたが、やがて蹲むと、刀箱を引き上げた。箱からしたたるビードロのような滴を切り、彼女は、両手で刀箱を支え、じつと見入った。ゆかしい古代紫の絹の打ち紐で、箱は結えられていた。箱は、まさ 杢の細かい、桐の老木で作ったものであり、天国と書かれた書体も、墨色も、古く雅みやびていた。

（ともかくもお父様へお目にかけて……）

その裾の辺りへ去年の枯れ草を茂らせ、ところどころ壁土を落とした築地^{ついで}。鋌は錆び、瓦は破損^{いた}み、久しく開けないために、扉に干割^{ひわ}れの見える大門。——こういうものに囲まれた彼女の屋敷は、廃屋の見本のようなものであつたが、栞は、その大門の横の潜門^{くぐり}をくぐつて屋敷の中へはいつて行つた。

その栞が、しばらく経つた時には屋敷の奥の、古びた十畳ばかりの部屋に、父、薪左衛門と向かいあつて坐つていた。

栞は、膝の上の刀箱を、父の方へ差し出したが、

「ただ今お話し申し上げました、堰の水に浮いておりました刀箱は、これでございます。ご覧なさりませ、天国と、箱書きしてございます」

と云い、緞子の厚い座布団の上へ坐り、蒔絵の脇息へ倚つてい
る、父親の顔を見た。

薪左衛門は、その卯の花のように白い総髪を、肩の上でユサリ
と揺り、おちつきなく、キョトキョト動く眼を、グツと据えたが、
やっと咽喉から押し出したような嗄れ声で、

「ナニ、天国?! ……まことか! ……まことなりやお手柄、我
ら助かる! 身の面目になる!」

と云つたが、突然、棚から陶器すえものが転げ落ちるような声で笑い
出し、

「贖物にせものであろう、贖物であろう、贖物の天国、鑑定してやろう
ぞ!」

と、鉤のように曲がつている左右の指で、ムズと箱を掴んだ。

紐が解かれ、蓋が開けられた。箱の底に沈んでいたのは、古錦襪の袋に入れられた白鞆の剣であった。やがて鞆は払われ、刀身があらわれた。

薪左衛門は、狂人ながら、さすがは武士、白木の柄を両手に持ち、柄頭を丹田^{たん でん}へ付け、鉾子^{ぼうし}先を、斜^{はす}に、両眼の間、ずっと彼^む方に立て、ジツと刀身を見詰めた。立派であった。

それにしても、この奥まった部屋の暗いことは！ 年中陽の光が射さないからであつた。それで、この部屋にあつて、鮮明^{あざやか}に見えるものといえば、例の、卯の花のように白い薪左衛門の頭髪^{かみ}と、化粧を施さないでも、天性雪のように白い、栞の顔ばか

りであった。

いや、もう一つあった。薪左衛門によつて保持たもたれている天国の劍であつた。

おお、この「持つ人の善悪に関わらず、持つ人に福德を与う」とまで、云い伝えられている、日本最古の刀匠——大宝年中、大や和まに住していた天国の作の、二尺三寸の刀身の、何んと、部屋の暗さの中に、煌こうこう々たる光を放していることか！ その刀身の姿は細く、肌は板目で、女性を連想おもわせるほどに優美であり、鈍多にえく、小乱れのだれ刃も見えていた。そうして、切つ先から、四寸ほど下がった辺りあたから、両刃もろはになつていた。何より心を搏たれることは、それが兇器の劍でありながら、微塵みじんも殺伐の氣のないこ

とで、劍というよりも、名玉を劍の形に延べた、氣品の高い、匂うばかりに美しい、一つの物像もののかたちといわなければならぬことであつた。

「まあ」と、栞は、思わず感嘆の声を上げ、水仙の茎のような、白い細い頸うなじを差し延べ、眼を見張り、刀身を見詰めた。

それにも増して、刀身へ穴でも穿あけるかのように、その刀身を見詰めているのは、燠おきのように熱を持った薪左衛門の眼であつた。薪左衛門も栞も、時の経つのを忘れていたようであつた。どこにいるのかも忘れていたようであつた。

人は往々にして、真の驚異や、真の感激や、真の美意識に遭ぶつ遇かつた時、時間ときと空間ところとを忘却わすれるものであるが、この時の二人が

まさにそれであつた。

名刀の威徳

「葉や」と、不意に、薪左衛門は、優しいおだや穩かな声で云つた。

「これは、天国の劍に相違ないよ。私には見覚えがある。遠い昔に——二十年もの昔でもあろうか、五味左衛門という者の屋敷から、天国の劍を強奪……いやナニ、頂戴したことがあるが、それがこの劍なのだよ。……ゆえあつてその天国の劍は、今まで行衛不明となり、同志、来栖勘兵衛からは……いやナニ、誰でもよい、同志の一人からは、わしがその劍を隠匿ししたように誣しいられたが

……それにしても、葉や、よくそなた、この劍を目付け出してく
れたのう」

その云い方は、全然、正氣の人間の云い方であり、その声音は、
これも正氣の人間の、五音の調った、清すがすが々しい声音であつた。

「まあお父様！」と、葉は叫ぶように云い、父親が、正氣に返つ
たらしいのに狂喜し、のめるように膝で進み、薪左衛門の膝へ取
り継つた。

「そのお顔は！ そのお声は！ ……おおおお、お父様、すつか
り正氣の人間に！ ……」

いかさま、ほんのさつきまでは、薪左衛門の顔は、狂人特有の、
聾ひそんだ眉、上擦つた眼、食いしばつた口、蒼白の顔色、そういう

顔だったのに、何んと現在の顔は、のびのびとした眉の、沈着いた眼の、穏かに軽く結んだ口の、尋常の人の容貌に返っているではないか。これはどうしたことなのであろう？ 奇蹟的事件にぶつかった時、人は往々、濁った気持ちや、狂った精神を、本来の正氣に戻すことがあるものであるが、薪左衛門にとつては、天國の劍の出現は、その奇蹟的事件といつていいらしく、そのため、烈しい感動を受け、日頃の狂疾が、一時的に恢復したのかもしれない。

「ナニ正氣の人間に？」

と、薪左衛門は、栞の言葉を、不審しそうに聞き咎めた。

「栞や、正氣の人間とは？」

「おお、お父様お父様、あなた様は、長らくの間、ご乱心あそばしておいでなされたのでございます」

「乱心？」

「はい、過ぐる年、松戸の五郎蔵という、博徒の親分が参りまして、お父様と、お話しいたしましたのですが、その時、突然お父様には、『^{おのれ}汝、来栖勘兵衛、まだこの俺を苦しめるのか！』と叫ばれまして、その時以来、ずっとご乱心……」

「……………」

「そればかりか、お父様には、以前からお持ちの、腰の刀傷が元で、^{いざり}躰者に……」

「ナニ、躰者に？」と、叫んだかと思うと、薪左衛門は、腰を延

ばし、ノツと立ち上がった。立てなかつた。

「おおおお葉や、わしは躓者じゃ！ ……躓者じゃ躓者じゃ、わしは躓者じゃ！ ……ワ、わしは、イ、躓者じゃーツ」

時が沈黙のまま経って行つた。天井裏で烈しい音がし、悲しそうな鼠の啼き声が聞こえた。こういう古屋敷の天井裏などには、大きな蛇が住んでいるものである。それが梁はりから落ちて、鼠を呑んだらしい。

時が経って行つた。

薪左衛門の顔には、恐怖、悲哀、絶望、苦悶の表情が、深刻に刻まれていた。当然といえよう。乱心していたということだけでさえ、恥ずかしいことなのに、躓者にさえなつたという。生まれ

もつかぬ躰者に。

薪左衛門は眼を閉じた。その瞼が痙攣を起こしているのは、感情を抑えているからであろう。栞の肩を抱いている手が、烈しく顫えているのも、感情を抑えているからであろう。

父の苦悶の顔を、下から見上げている栞の顔にも、恐怖と不安と悲哀とがあつた。

(烈しいお父様の苦悶が、お父様を駆つて、また乱心に……)
これが栞には恐ろしく悲しいのであつた。

やがて薪左衛門は弱々しく眼を開けた。その眼についたのは、右手に捧げている天国の剣であつた。剣は、依然として、珠を延べたかのように、気高い、穏かな光を放し、宙に保たれていた。

この劍の威徳には、煙りさえも近寄れないのであろうか？ と云うのは、少しでもお父様の狂ったお心を静めてあげようと、優しい娘心から、栞は、毎日この部屋で香を焚くのであつて、今も床の間に置いてある唐金の香炉から、蒼白い煙りが立ち昇つてい、その一片が、刀の切っ先をクルクルと捲いた。しかし何かに驚いたかのように、煙りの輪は、急に散り、消え、後には、暗い空間に、刀身ばかりが、孤独におごそ厳かに輝いてるではないか。

それを見詰めている薪左衛門の眼は、次第に平和になり、顔からも、悲哀や苦悶や絶望の色が消えた。

返らぬ記憶

「葉や」

と、ややあつてから、薪左衛門は、おちつきのある、しみじみとした声で云つた。

「わしが乱心中に、どんなことを云つたか、どんな事をしたか、話しておくれ」

葉は、お父様が沈着な態度に返つたので、ホツと安心し、

「それはそれはお父様、ご乱心中には、何んと申したらよいやら、いろいろ変つたことをなさいました。また、おつしやいもなさいました。……何から申し上げてよいやら。……おおそうそう、来栖勘兵衛という男が、お父様を討ちに来るなどと……」

「来栖勘兵衛がわしを討ちに？ ……うむ、葉や、それは正気になつた今のわしでも云うよ。 ……そういうことがあるような気がするよ」

「そうしてお父様には、ご自分を、有賀又兵衛じゃとおつしやいました」

「……………」

「それからお父様は、来栖勘兵衛がわしを討ちに来るから、旅の浪人などが訪ねて来たら、逗留させて、加担人かとうどにしろと。 ……それで妾わたしは、訪ねて参られた浪人衆を、お泊めいたしましてございます」

「そうかえ、それはいいことをしておくれたねえ。 ……来栖

勘兵衛は強い男なのだから、わしには、どうしても加担人かとうどが入用いのだよ」

「それからお父様は、そのようにお御足みあしが不自由になられてからも、毎日のように、野中の道了様へ、お参詣まいりに行かねばならぬとおっしゃいますので、いつそ道了様を屋敷内に勧かんじよう請しょういたしたらと存じ、道了様そっくりの塚を、お庭へ築きましたところ……」

「おおおお、そんな苦労まで、栞や、お前にかけたのかねえ。……野中の道了!! うむ、道了塚!」

と、薪左衛門は、グツと眼を据えた。

「するとお父様には、それを真の道了様と思われ、毎晩のように、甕まわりり車に乗られ、塚の周囲をお廻りなさいましてございます」

「あさましいことだったのう」

「ところが、数日前の晩のことでございますが、加担人として、お泊まりくださいました、伊東頼母様と仰せられるお方が、その塚のあたりを逍遙さまよつておられますと、お父様が、来栖勘兵衛と勘違いされ、『勘兵衛、これ、汝おのれに逢つたら、云おう云おうと思つていたのだが、野中の道了での決闘、俺は今に怨恨うらみに思っているぞ。……事実を誣しい、俺に濡ぬれ衣ぎぬを着せたあげく、股へ一太刀！……おのれ勘兵衛、もう一度野中の道了で決闘し、雌雄を決しよう、長い長い間、機会の来るのを待っていたのだ』とおっしゃったそうでございます」

「野中の道了での決闘？ フーム……」

と、薪左衛門は考え込んだ。

（野中の道了で、来栖勘兵衛と、俺は、決闘した覚えはある。…だが何んの理由で、決闘したのだろう？）

彼には、肝心のことが解らなかつた。

（わしの頭脳あたまは、まだ本当に快癒なほりきっていないのかもしれない）
大病をして、大熱を発し、人事不省に落ち入ったものや、乱心して恢復した者のある者が、過去の記憶を、一切忘却してしまうことがある。一切忘却しないまでも、その幾個いくつかを、忘れてしまうことがある。薪左衛門の場合はその後者らしかつた。

（何んの理由で、俺は、勘兵衛と、野中の道了で決闘したのだろう？）

思い出そう、思い出そうと、薪左衛門は焦心あせつた。

「葉や」と、薪左衛門は、傷いたましい声で云つた。

「わしを野中の道了へ連れて行つておくれ。……あそこへ行つたら、わしの記憶が蘇よみがえ生なるかもしれないから」

蹩いざり車に乗つた薪左衛門と、それを引いた葉とが、野中の道了

塚へ着いたのは、正午まひるであつた。春陽に浸つている道了塚は、そ

の岩にも、南無妙法蓮華經と刻ほつてある碑いしぶみにも、岩の間にこめて

ある土壌つちにも、花卉や花粉やらがちりばめられていた。この高さ

二間周囲十間の道了塚は、いわば広々とした平野の中に出てい

る瘤こぶのようなものであつた。しかし、この一見平凡の道了塚も、

過去に多くの秘密を持つている薪左衛門にとっては、重大な記念

物らしく、葉に助けられて、それを蹙りのぼる彼の顔には、複雑な深刻な表情があつた。やがて彼は碑を正面まえにして坐つた。彼の手には、鞆に納められた天国が、握られていた。

「葉や、わしはここで一人で考えごとをしていたのだよ。一人にしておいてくれ」

薪左衛門は、握っている白鞆の劍の周囲を、黄色い蝶が、謎めいた飛びかたをしているのを、無心で眺めながら、何んとなく放心したような声で云つた。

塚の中からの声

「はい」

と葉は、素直に答えて、衣裳の赤い裾裏と、草履の赤緒との間に、白珊瑚しろさんごのように挟まっている可愛らしい素足を運ばせ、塚を下りた。そうして、塚の裾に、萌黄色もえぎいろの座布団を敷いた甍り車が、もうその座布団の上へ、落花を受けて、玩具おもちゃかのように置いてある横に立って、父親の方を振り返って見たが、やがて所在なさそうに、道了塚の背後に、壁のように立っている雑木林―かつて、五味左門が、紙帳を釣って野宿した、その雑木林の中へはいつて行つた。

一人となつた薪左衛門は、碑を見上げて、じつとしていた。裾に坐つて、見上げているためでもあろう、六尺の碑が、二丈にも

高く思われ、今にも、自分の上へ、落ちかかつて来はしまいかと案ぜられた。陽に照らされて、その碑の面は、軟らかく艶めいてさえ見えたが、精悍に匆ねて刻^ほつてある七字の題目は、何かを怒^{いか}つて、叱咤しているかのよう思われた。

薪左衛門の記憶は徐々に返つて来た。自分が有賀又兵衛と宣り、兄弟分の来栖勘兵衛と一緒に、浪人組の頭として、多勢の無頼の浪人を率い、関東一帯を荒らし廻つた頃の、いろいろさまさまの出来事が、次から次と思ひ出されて来た。

(幾万両の財宝を強奪したことやら)

奪つた財宝の八割までを、自分と勘兵衛とが取り、後の二割を、配下の浪人どもへ分配してやった悪^{あく}辣^{らつ}の所業^{しわざ}なども思ひ出され

た。そうして、大仕事をすると、官おかみの探索の眼をくらすため、

一時組を解散し、自分は今の屋敷へ帰つて来、真面目な郷士、飯

塚薪左衛門として、穏しく生活したことなども思い出されて来た。

(下しもうさ総の五味左衛門方を襲い、天国の剣と財宝とを奪い、さら

に甲州の鴨屋を襲つて、巨額の財宝を手に入れたのを最後として、

全まったく然組を解散したつけ)

(その後、来栖勘兵衛は、故郷の松戸へ帰り、博徒の頭になつた
筈だ)

こんなことも思い出された。

(だが、何んの理由で、俺と勘兵衛とは、この道了塚で決闘した
のだろうか?)

決闘の現場の道了塚へ来て考えても、その理由ばかりは思い出されないのであった。

(わしの^{あたま}頭脳はまだ快癒^なりきららないのかもしれない)

淋しくこう思った。

と、その時、何んたる怪異であろう！ 坐っている道了塚の下から、大岩を貫き、銀の一本の線のような、恐怖と悲哀とを^な縋^ない^ま雑^まぜにした男の音が、

「秘密は^{あば}剖かない！ 裏切りはしない！ 助けてくれーッ」
と、聞こえて来たではないか。

「う、う、う！」

と薪左衛門は、呻き声をあげたが、やにわに天国の剣を引き抜

き、春の白昼まひるに現われた、「声の妖怪もののけ」を切り払うかのように、
頭上に振り、

「あの声！ 聞き覚えがある！ ……二十年前に聞いた声だ！
ここで、この道了塚で！ ……秘密はあの声にあるのだ！ 決闘
の秘密は！ ……おおおお、それにしても、二十年前に聞いたあ
の声が、二十年後の今日聞こえて来るとは？」

一つの影が、碑を掠め、薪左衛門の肩へ斑ふを置き、すぐ消えた。
鳶が、地上にある鼠の死骸を目付け、それをくわえて、翔び上が
ったのであった。道了塚を巡って、酣たけなわの春は、華麗な宴うたげを展開い
ていた。耕地には菜の花が、黄金の筵むしろを敷き、灌漑用の水路には、
水の銀箔が延べられてい、地平線を劃かきって点々と立っている村落

からは、犬の吠え声と鶏の啼き声とが聞こえ、藁家の垣や庭には、木蓮や沈しんちようげ丁花や海かいどう棠や李が咲いていたが、紗を張つたような霞の中では、ただ白く、ただ薄赤く、ただ薄黄色く見えるばかりであつた。でも、それは、この季節らしい柔らかみを帯びた風景として、かえつて美しく、万物を受胎に誘う春風の中に、もろもろの香におい気の籠こもっているのと共に、人の心を恍惚とさせた。それにも関わらず、薪左衛門ばかりは、ふたたび乱心に落ち入るかのよように思われた。振り廻まわしていた天国の剣を、今は額かぶに押し当て、沈痛に肩を締め、全身をガタガタふる顫ふるわせた。

（声の秘密を解かなければならない！ どうあろうと解かなければならない！）

その声はまたも岩の下から、いや、岩の下の地の底から、一本の銀の線かのように、土壌つちを貫き、岩を貫いて聞こえて来た。

「秘密は剖かない！ 裏切りはしない！ 助けてくれーッ」

（あの声は、渋江典膳の声ではない！ しかし典膳と一緒に働いていた男の声だ！）

薪左衛門は呻いた。

葉の発見した物

この頃葉は、林の中を逍遙さまよっていた。

父親の乱心が癒ったことと、恋人の頼母が、今日あたり帰って

来るだろうという期待とで、彼女の心は喜よろこび悦のぞみと希望とに燃えて
いたのであった。

（頼母様といえは、あのお方とはじめてお逢いしたのは、道了様
の塚の裾辺りだったつけ）

葉は、過ぐる日、氣絶していた頼母を、この手で介抱して、蘇
生させたことを思い出した。

（妾、あの方の命の恩人なのよ。……頼母様、妾を粗末にしては
いけないわ）

つい心の中で甘えたりした。

林の中は、光と影との織り物をなしていた。木々の隙を通つて、
射し込んでひかりいる陽光は、地上へ、大小の、円や方形の、こがねいろ黄金色

の光の斑を付け、そこへ萌え出ている、すみれ 堇や土筆や薺の花を、細かい宝石のように輝かせ、その木洩れ陽のかよ 通い路の空間に、ぶよ 蟻子やかげろう 蜻蛉や蜂が飛んでいたが、それらの昆虫の翅や脚などをも輝かせて、いかにも楽しく躍動している「春の魂」のように見せた。心に喜悦を持っている葉は、何を見ても楽しかった。

栗や柏や櫛などが、その幹や枝に陽光を溜め、陽光の溜っている所だけが、生き生きと呼吸しているように見えるのも、蕾を沢山持った山吹が、うつき 卯木と一緒に、小丘のように盛り上がっている、その裾に、栗色の兎が、長い耳を捻るように動かしながら、うずく 蹲居ま っている、さくらんぼ 桜実のような赤い眼で、葉の方を見ていたが、それも葉には嬉しくてならなかった。

葉は木々を縫つて目的なく彷徨あてさまよつて行つた。

一つの林が尽き、別の林へはいろいろとする処に、木立ちのない小さい空地があり、そこまで来た時、

「あれ」と云つて、葉は足を停めた。

その空地に、巨大な白蝶の死骸かのように、一張の紙帳が、ベツタリと地に、張り付いていたからである。

「紙帳だよ、……まあ紙帳！」

どうしてこんな林の中などに紙帳が落ちているのか、不思議でならなかつたが、それと同時に、数日前、自分の屋敷へ泊まった五味左門と云う武士が、部屋へ紙帳を釣つて寝、その中で、同宿の武士を殺傷したことを思い出した。

(その紙帳ではあるまいか?)

(まさか!)

と思ひ返したものの、気味が悪かつたので、葉は立ち去ろうとした。しかし、紙帳とか蚊帳かやとかを見れば釣りたくなり、布団を見れば敷いてみたくなるのが女心で、葉も、その心に捉とらえられ、立ち去るところか、怖こわ々ではあつたが、あべこべに紙帳へ近寄つた。紙帳には、泥や藁屑が附いていた。そうして血痕らしいものが附いていた。

(気味が悪いわ)と葉は、またも逃げ腰になつたが、でも、やっぱり逃げられなかつた。

短く切られてはいたが、紙帳には、四筋の釣り手がついていた。

いつか葉は、その釣り手を、木立ちにむすびつけていた。

間もなく紙帳は、葉の手によつて、空地へ釣られ、ところどころ裂け目を持ったその紙帳は、一杯に春陽を受け、少し弛るだそうに、裾を地に敷き、宙に浮いた。

(この中で寝たら、どんな気持ちするものかしら?)

この好奇心も、女心の一つであろう。

葉は、紙帳の中へはいろいろとして、身をかがめ、その裾へ手をかけた。

しかし葉よ、その紙帳こそは、やはり、五味左門の紙帳なのであり、三日前の夜、風に飛ばされて、ここまで来たものであり、そうして、その中へはいったものは、男なら殺され、女なら、生い

命のちより大切の……そういう紙帳なのに、葉よ、お前は、その中へはいろいろとするのか？

そんなことを知る筈のない葉は、とうとう紙帳の中へはいった。処女の体を呑んだ紙帳は、ほんのちよつとの間、サワサワと揺れたが、すぐに何事もなかったように静まり、その上を、眼白や頬白が、枝移りしようとして翔かけり、その影を、刹せつな刹せつな映した。

戸板の一団

ちょうどこの頃のことであるが、この林から一里ほど離れた地と点ころに、だだっ広い前庭を持った一構えの農家が立って、家にわとり鶏

の雛ひなが十羽ばかり、親鶏の足の周囲を、鬱金色うこんいろの綿の珠が転がるかのよう、に、めまぐるしく転がり廻っていた。と、筵をかけた戸板いを担にない、それを取り巻いた十人の男が、街道の方から走つて来、庭の中へはいつて来た。戸板から滴しずくが落ちて、日和ひよりつづきで白く乾いている庭の礫こいしの上へ滴したたり、潰いぢれた苺いちごのような色を作なした。血だ！

「咽喉が渴いてたまらねえ。水だ水だ」

と喚わめいて、一人の男が、一団から離れ、母屋おもやと隠居家との間にある井戸の方へ走つて行つた。すると、母屋の縁側近くに集まつて、餌をあさりはじめていた、例の家鶏の一群は、これに驚いたか、けたたましく啼き出し、この一団が侵入して来た時から、生

け垣の隅で臆病らしく吠えつづけていた犬は、今は憤怒したように猛りたつた。

「俺^{おい}らも水だ」

と、云つて、もう一人の男が、井戸の方へ走つた。

そういう二人にはお構いなく、戸板を担つた一団は、庭の外れ、街道に添つて建ててある、大きな納屋の方へ走つて行つた。

農事がそろそろ忙しくなる季節であつた。この家の人々は、おおかた野良へ出て行つたとみえて、子守娘^{こもり}と、老婆とが、母屋の入り口に莫塵を敷き、穀物の種^よを選び分けていたが、その一団を見ると、呆氣にとられたように、眼を見合わせた。

咽喉が渴いてたまらねえ、水だ水だと喚いた最初の男が、井戸

端まで行つた時、井戸の背後の方に、藁葺きの屋根を持った、古い小さい隠居家が、破れ煤ふすぶれた障子を陽に焙あぶらせて立つていたが、その障子が、内側から細目に開き、一人の武士が、身を斜めに半身を現わし、蒼味がかつた、幽鬼じみた顔を覗かせた。けたましく啼きたてた家畜の声に、不審を打つたかららしい。

「わツ、わりやア、五味左門！」

と、井戸端まで辿りついた男は喚いた。松戸の五郎蔵の乾児の、中盆の染八であつた。

「野郎！」

と染八は脇差しへ手をかけた。遅かつた。

この時、もう左門は、その独活うどの皮を剥いたように白い足で、

縁板えんを踏み、地へ下り、染八の面前へまで殺到して来ていた。

「わッ」

染八の肩から、こう蹴鞠けまりの毬まりのような物体ものが、宙へ飛びあがり、それを追つて、深紅の布が一筋、ノシ上がった。切り口から吹き上がった血であった。染八の首級くびは、碇いかりづな綱なのように下がっている撥ね釣瓶はつるべの縄つるべに添い、落ちて来たが、地面へ届かない以前まえに消えてしまった。年月と腐蝕むしくいとのためにボロボロになっている井桁を通し、井戸の中へ落ちたのであった。

「夕、誰たれか、来てくれーッ」

染八の後を追つて、これも水を飲みに来た壺振りの喜代三は、染八の死骸が、片手を脇差しの柄へかけたまま、自分の前へ転が

つて来たのに躓つまずき、夢中で両手を上げて、そう叫んだ。しかし誰も来ない以前まえに、左門の刀が、胴から反対側の脇下まで斬つていた。死骸となつて斃れた喜代三の傷口から、大量の血が流れ出、地に溜り、その中で蟻が右往左往した。啓あなを蟄でて間のない小蛇が、井戸端の湿地しめじに、灰白い紐のように延びていたが、草履を飛ばせ、はだし跣足となり、白あしうらい蹠らをあらわしている死骸の染八の、その蹠の方へ這い寄つて行つた。そうしてその、小蛇が、染八の足首へ搦み付いた頃には、五味左門は、道了塚の方へ続いている林の一つへ、その長身を没していた。

彼は道了塚の方へ歩いて行くのであつた。

悩みの殺人鬼

懐^{ふところ}手^でをし、少し俯^{うつむ}向き、ゆるゆると歩いて行く左門の姿は、たつた今、人を殺した男などとは思われないほど、冷静であつたが、思いなしか、淋しそうではあつた。顔色もいくらか蒼味を帯びていた。林の中はひっそりとしていて、小鳥の啼き声ばかりが、頭上から、左右から聞こえて来た。山鳩が幾羽か、野の方から林の中へ翔^かけ込んで来たが、人間の姿を見て驚いたように、一斉に棹のように舞い立ち、木々の枝へ停まつた。

木々を巡り、藪^よを避け、左門は、道了塚の方へ歩いて行く。

それにしても、どうして彼は、農家の隠居家などにいたのであ

ろう？ 何んでもなかつた、三日前の夜、府中の武蔵屋で、ああいう騒動を惹き起こしたが、切り抜けて遁がれた。遁がれたものの、伊東頼母を、返り討ちにすることが出来なかつたことが残念であつた。

(いずれば彼奴も、この左門を討とうと、この界限を探し廻つてゐることであろう、そこを狙つて討ち取つてやろう)

こう思い、あの農家に頼み込み、しばらく身を隠して貰つたのであつた。出かけて行つて、頼母の居場所を探りたくはあつたが、松戸の五郎蔵一味が、まだ府中にいて、この身の現われるのを待ち、討ち取ろうとしているらしかつたので、今日までは外出しなかつたのである。

左門には、あの夜以来、心にかかることがあった。紙帳を失ったことである。何物にも換えがたい大切な紙帳を！

そう、紙帳は、左門にとつては、ちょうど、かたつむり蝸牛かたつむりにおける

殻のようなものであった。肉体の半分のようなものであった。その中で住み、眠り、考え、罪悪さえも犯した紙帳なのだから！

恋人のような離れ難いものと云つてもよかつた。それに紙帳は、彼にとつては、一つの大きな目的の対象でもあった。頼母を殺し、その血を注ぎ、憤死された父上の妄執を晴らしてあげたい！その血を注ぐ対象が紙帳なのであるから。

その紙帳を紛失した彼であつた。淋しそうに、気抜けしたように歩いて行くのは、当然といってよからう。

（あの夜紙帳が、独り^{ひと}りで歩いたのは、中にお浦がいて、紙帳から出ようとしたが出られず、もがきながら走ったからだ。それは、あの女の着ていた物が、次々に脱げて、地へ落ちたことで知れる）
しかし、その後、紙帳やお浦はどうなったことか？

それが解らないからこそ、左門は憂鬱なのであった。

林を縫って流れている小川があり、水が清らかだったので、底の礫^{こいし}さえ透けて見えた。それを左門が跨いで越した時、水に映った自分の姿を見た。顔に精彩がなかった。

（家を喪った犬は、みすぼらしいものの代表のように云われているが、俺にとっては紙帳は家だ。それを失ったのだからなア）
顔に精彩のないのも無理がないと思つた。

(どうぞして紙帳を探し出したものだ)

彼は黙々と歩いて行つた。

それにしても、何故彼は、道了塚の方へ行くのであろう？ た
いした理由があるのではなく、数日前ここの林へ紙帳を釣つて野
宿したことがあり、それが懐かしかったのと、五郎蔵の乾児二人
を斬り、身をかくしたところが林で、その林が道了塚の方へつづ
いていたので、それで道了塚の方へ足を運ぶまでであつた。

彼は、どうして五郎蔵の乾児二人が、自分の隠れている農家な
どへやって来たのか、解らなかつた。

(やはり五郎蔵一味め、俺の行衛を探しているのだな)

こう思うより仕方なかつた。彼には五郎蔵の乾児たちが、むしろ筵を

かけた戸板を担って、あの農家の納屋なやの方へ行つたことを知らなかつた。それは、その一団の姿が、母屋の蔭になつていて、見えなかつたからである。

(どつちみち油断はならない)

こう思つた。

やがて彼は、記憶に残っている、かつての夜、紙帳を釣つて寝た、道了塚近くの林へ来た。

突然彼は足を止め、茫然として前方を見据えた。無数の血痕を附けた、紛れもない自分の紙帳が、林の中の空地に釣られてあるではないか。紙帳は、主人に邂逅めぐりあつたのを喜ぶかのように、落葉樹や常磐木ときわぎに包まれながら、左門の方へ、長方形の、長い方の

面を向け、微風に、その面へ小皺を作り、笑った。

左門は、紙帳が、どうしてこんなところへ来ているのか、誰が紙帳を釣ったのか？ と、一瞬間不思議に思ったが、それよりも、恋していると云つてもよいほどに、探し求めていた巢を——紙帳を、発見したことの喜びに、肌に汗がにじむほどであった。

彼は、何をおいても、紙帳の中へはいり、この平和を失った、イライラしている心持ちを鎮めたいと思った。

彼は、声をさえ発し、紙帳へ走り寄った。それが生物いきものであったならば、彼は紙帳を抱き締めたであろう。彼はやにわに紙帳の裾をかかげた。

「あッ」

彼は驚きで胸を反らせた。

新鮮な果実このみ

紙帳の中に、彼の眼前に、彼以外の紙帳の主がいるではないか。そう、紙帳を箱とすれば、箱へ納まった京人形のように、一人の美しい娘が、謹ましくはあつたが、充分くつろ寛いだ姿で、安らかに、長々と寝て、眠っているではないか。

(無断で俺の巢へ入り込んだ女め！)

憤怒いかりが勃然ぼっぜんと左門の胸へ燃え上がった。

(だが、女だ、綺麗な娘だ！)

左門の、少し黒ずんで見えていた唇へ、赤味が注し、眼へ光が射した。

左門は紙帳の中へはいった。彼は娘の顔をつくづくと見た。

（見覚えがある。飯塚薪左衛門の娘、栞だ！）

事の意外に左門はまたも驚いた。

過ぐる夜、飯塚家へ泊まった時、挨拶に出た栞という娘が、この紙帳の中に眠っているようとは！

（不思議だなア）

左門は両眉の間へ皺を畳んだ。

（しかし、栞であろうと誰であろうと……）

左門は、やがて地に腹這い、蛇が鎌首を持ち上げるように、首

を上げ、頤の下へ両手を支い、葉の姿をながめていた。葉は、そんなこととも知らず、片腕を枕にして、眠りつづけていた。友禪の襦袢の袖から、白い滑かな腕が覗いていたが、曲げた肘の附け根などは、円く軟らかく、薄桃色をなし、珠のようであった。

この頃、五味左門が身を隠していた、例の農家の、街道に添った納屋には、陽がなんどりと、長閑のどかにあたっていた。

この辺の農家の誇りの一つとすることに、大きな納屋を持つということがあった。それは、鋤や鍬などの農具を、沢山に持っているというこのことの証拠になるからであった。それでこの納屋も、土蔵ほどの大きさを持つてい、屋根に近い位置に、四角の窓を一つ穿うがっていた。その屋根に雀が停まっています、羽づくろいし、そ

の裾を、いたち鼬が、チヨロチヨロと徘徊していたが、これは赤黄色い土壌と、灰色の板とで作られているこの納屋を、大變詩的な存在にしていた。

と、一人の武士が、刀の鞘を陽に照らし、自分の影を街道に落としながら、納屋の方へ歩いて来た。伊東頼母であつた。頼母はあの夜、敵五味左門を取り逃がしたので、それを探し出し、敵わぬまでも勝負しようとして、武蔵屋を出で、府中をはじめ、近所のそちこちを、今日まで三日間さがし廻つた。だが左門の行衛ゆくえは知れなかつた。そこで一旦、飯塚薪左衛門の屋敷へ帰ろうと、今この街道を歩いて来たのであつた。飯塚家へ帰るといふことは、彼にとってには喜びであつた。恋人の栞と逢ふことであるから。過ぐる

夜、あの屋敷の庭で、純情の処女、栞と、手を取り交わして以来、栞が、何んと烈しく、一本気に、頼母を愛し出したことか。その愛の烈しさに誘われて、頼母も、今は、燃えるように、栞を愛しているのであった。その栞と逢えるのだ！ 頼母は幸福で胸が一杯であった。武蔵屋での苦闘と、三日間左門を探し廻った辛勞とで、頼母は少し痩せて見えた。頤など細まり、張っていた肩など、心持ち落ちたように見えた。

「や、これは！」

と、頼母は、納屋の前へさしかかり、何気なく窓を見上げた時、驚きの声をあげて足を止めた。窓にも陽があたっていて、明るかったが、納屋の内部は暗いと見え、窓の向こう側は闇であった。

その闇を背後にして、明るい窓外に向き、一つの男の首級が、頼母の方へ顔を向けているではないか。陽のあたっている窓の枠を、黄金色の額縁とすれば、窓の内部の闇は、黒一色に塗りつぶされた背景であり、そういう額の面に、男の首級一個が、生白く描かれていた。首級は、乱れた髪を額へ懸け、眼を閉じ、無念そうに食いしばった口から幾筋も血を引いていた。

「首級だーッ」

と、頼母は、思わず叫んだ。と、首級はユルユルと動き、一方へ廻り、すぐに頼母の方へ、ぼんのくぼを見せたが、やがて窓枠からだんだんに遠退き、間もなく闇に融けて消えてしまった。しかし、すぐに続いて、今度は女の首級が一個、ユルユルと闇から

浮き出して来、窓へ近寄り、頼母の方へ正面を向けた。やはり眼を閉じ、口を食いしぼり、額へ乱れた髪をかけていた。しかし、その首級くびもユルユルと廻り、頼母へぼんのくぼを見せ、やがて闇の中へ消えた。頼母は全身を強こわばらせ、両手を握りしめた。と、
「典膳の首級だーッ」

と、頼母は夢中で喚いた。そう、その首級は見覚えのある渋江典膳の首級であった。

(しかし典膳は、三日前の晩に、お浦のために殺されて、川の中へ落とされたではないか！ 何んということだ！ 何んという！

……)

闇へ消えた。とたんに、軟らかい生物の体を、木刀などで打つような音がし、それに続いて悲鳴が聞こえたが、見よ！ 窓を！ 典膳の首級とお浦の首級とが、ぶつかり合い、噛み合いながら、キリキリ、キリキリと、眉間尺のように廻り出したではないか。

頼母は、夢中で納屋の扉へ飛び付いた。

刹那、納屋の中から、

「丁だ！」という声が聞こえ、それに応じるように、「半だ！」という声が響いた。

頼母は納屋の扉を引き開け、内へ飛び込んだ。開けられた戸口から、外光が射し込み、闇であつた納屋の内部を昼間に変えたが、頼母に見えた光景は、地獄絵であつた。渋江典膳とお浦とが背後うし

手に縛られ、高く梁に釣り下げられてい、その下に立った五郎蔵
一家の用心棒の、望月角右衛門が、木刀で、男女を撲っているで
はないか。撲られる苦痛で、典膳とお浦とは身悶えし、身悶えす
るごとに、二人の体は、宙で、縊じれたり捻じれたりし、額や頤
をぶつつけ合わせた。そういう二人の顔は、窓の高さに存在した。
だから窓の外から見れば、二個の首級が、噛み合い食い合いして
いるように見えるのであった。納屋の壁には、鋤だの鍬だの鎌だ
のの農具が立てかけてあり、地面には、馬盥だの、だの稻扱き
だのが置いてあったが、そのずっと奥の方に、裸体蠟燭が燃えて
おり、それを圍繞んで、六人の男が丁半を争っていた。五郎蔵
の乾児どもであった。その横に立って、腕組みをし、勝負を見て

いるのは、これも用心棒の小林紋太郎で、その南京豆のような顔は、蠟燭の光で黄疸病やみのように見えていた。

これらの輩やからは、戸のあく音を聞くと、一斉にそつちを見たが、

「染八か」「何をしていたんだ」「喜代三はどうした」「いい勝負がはじまっている」「仲間にはいりな」

などと声をかけた。

井戸の方へ水を飲みに行った二人の身内の一人が、帰って来たものと思つたらしい。しかし明るい戸口の外光ひかりを背負しよつて立つている男が、染八でもなく喜代三でもなく、武士だったので、乾児たちは一度に口を噤つぶんでしまった。

頼母に一番近く接していた角右衛門が、真つ先に侵入者の何者

であるかを見てとつた。

「わ、わりやア伊東頼母！」

と叫ぶと、持っていた櫂の木刀を、真剣かのように構えた。しかしこの老獪な用心棒は、打ち込んで行く代わりに背後へ退き、粗あらかべ壁やもりへ守宮のように背中を張り付け、正面に、梁から、ダラリと人形芝居の人形のように下がり、尚グルグルと廻っている、典膳とお浦との体の横手から、恐こわそうに頼母を見詰めた。

乾児たちは角右衛門の声を聞くと、一斉に立ち上がった。蠟燭が仆れて消えた。

「いかにも伊東頼母！」

「探しているところだ！」

「いいところへ来やがった」

「たたんでしまえ！」

「誘かどわかし拐ぬすつとめ！」

「盗賊ぬすつとめ！」

乾児たちは口々に喚わめきだした。

「親分にお知らせして……さよう親分にお知らせした方がよろしい。……拙者一走りして……」と、臆病者の紋太郎は、侵入者が頼母だと知った瞬間、一ひととび躍して、乾児たちの背後へ隠れたが、今度はいち早く、納屋から逃げ出そうとして、そう叫びながら、乾児たちを掻き分けて前へ出、頼母の体によって半分以上塞ふさがってはいるが、しかし尚明るく見えている戸口を狙った。

頼母は、この意外なありさまに度胆を抜かれたが、そのうち自分、何か誤解されているらしいことに感付いた。

「方々——いや五郎蔵殿のお身内、拙者はいかにも伊東頼母、先夜、父の敵五味左門に邂逅めぐりあいたしました際には、ご助力にあずかり、千万忝けのうござった。お礼申す。その夜お断わりもいたさず武蔵屋を立ち退きましたは、とり逃がしました左門を探し出そうためで。……しかし挨拶なしにお暇いとまいたしましたは拙者の不調法、お詫わびつかまつる。……いやナニここへ参りましたのもほんの偶然からで。……さよう、窓から、お浦殿の顔と典膳めの顔とが……どっちみち偶然からで。……それにいたしましたしても、只今の言葉、ちと不穩当！ 合点ゆきませぬ！ ……誘拐者とは？ 盗

賊とは？」

と云い云い、頼母は、油断なく四方へ眼を配った。

納屋の血煙り

「吐かすな！」と、首根っ子に瘤のある乾児が叫んだ。「白々しい三ピン！ 何を云うか！ ……親分の恋女、お浦を誘惑し、五郎蔵一家の守護神、天国の剣を持ち出させながら、白々しい！

……」

「他人の恋女をそそのかしやア誘拐者よ！」

「刀を持ち出させりや盗賊だ！」

乾児たちは口々にまた喚きだした。

頼母は（さてはそれでか）と思った。お浦と関係など附けたこととはなく、附けようと思つたことさえなかつたが、お浦の方では、そういう関係になるべく希望のぞんでいたことは争われなかつたし、天国の剣をお浦に持ち出してくるよう依頼たのんだのは、確かに自分なのであるから、乾児たちにそう云われてみれば、言下に反駁することは出来なかつた。

頼母は黙つてしまった。

頼母が困こまじて黙つている様子を見てとつた乾児たちは、

「そこで親分には手前をさがしだし、叩つ斬ろうとしているところなのよ」

「いいところへ来た」

「とつ捕つかまえろ」

「手に余ったら叩つ斬れ」

と喚き出し、

「それを見ろそれを！」

と、頬やもりに守宮いれずみの刺青いれずみをしている一人の乾児が、梁から釣り下

げられている典膳ふたりお浦ふたりを指さした。

「俺ら仲間の処刑しおき、凄かろうがな。……手前を捉えて、こうしよ

うというのが親分の念願なのさ」

「やつつけろ！」

脇差しを引き抜くものもあつた。

頼母も刀の柄へ手をかけ、先方さきが斬り込んで来たら、斬り払おうと構えたが、それにしてもお浦と典膳との境遇が、あまりに悲惨に、あまりに意外に思われてならなかった。

(いずれお浦は、あの後、五郎蔵の手に捕えられたものらしい)

あの後というのは、お浦が左門の紙帳を冠つたまま、武蔵屋の庭から消えた後のことであつて、あの時、紙帳が自然ひとりのように動きだしたのは、その実、その中にお浦がいたのだということはお浦の衣裳が、次々に紙帳の中から地に落ちたことによつて、頼母にも悟れたのであつた。

(その後どうして五郎蔵の手に捕えられたのであろう?)

(そうして、殺された筈の典膳が、生きていたとは? ……そう

して五郎蔵の手に捕えられたとは？ ……どこでどうして捕えられたのであろう？)

彼にはこれらのことがどうにも合点いかなかったが、事實は、あの夜お浦と典膳とは、髪川の上と下とで逢った。岸の上の女が怨みあるお浦だと知ると、典膳は猛然と勇気を揮い起こし、岸へよじ上り、お浦へ掴みかかった。お浦は相手が典膳だと知るや、悲鳴を上げて遁がれようとした。二人は組み合い捻じ合^ねった。そこへ駈け付けて来たのが、血路をひらいて逃げた左門を、捕えようとして追って来た五郎蔵達で、二人は五郎蔵たちの手によつて捕えられ、武蔵屋へしよびいて行かれ、そこで糾明された。お浦は容易に実を吐こうとはしなかったが、いわば痛目吟味^{いため}に逢わさ

れ、とうとう自分が伊東頼母を恋したこと、頼母の依頼によって天国の剣を持ち出し、頼母に渡そうとし、部屋を間違えて、五味左門の部屋へ行き、紙帳の中へ引き入れられたことなどを白状した。五郎蔵は怒った。自分が想いを懸けていた女が、頼母に心を寄せたことに対する怒りと、「持つ人の善悪にかかわらず、持つ人に福德を与う」とまで云われている天国の剣を、頼母へ渡そうとしたことが、五郎蔵をして嚇怒かくどさせた。彼はお浦を戮り殺なぶしにしようとした。

典膳に至っては、五郎蔵の過去の行状を知っていて、強請ゆすりに来たほどの男だったので、生きているからには殺さなければならず、これも戮り殺しにすることにした。

こうして惨酷の所業が今日まで行われて来たのであったが、府ゆく中で殺しては人目につき、後々がうるさいといふところから、この農家の納屋で、乾児たちに吩咐いいつけ、その鬮り殺しの最後の仕上げに取りかからせたのであった。

突然風を切つて木刀が、頼母の眉間へ飛んで来たので、頼母は瞬間身を反かわした。

「面倒くさい！ 方々、たたんでおしまいなされ！」

叫んで刀を抜いたのは、木刀を投げつけた角右衛門であった。

「そうだ、やれ！」

「膾なますに刻め！」

怒号する声が一斉に湧き起こり、納屋が鳴なり釜かまのように反響し

た。無数の氷柱つららが散乱するように見えたのは、乾児たちが脇差しを引っこ抜いたからであつた。

やにわに一人の乾児が横撲りに斬り込んで来た。頼母は、右手の壁の方へ身をかわしたが、抜き打ちざまに、眉間から鼻柱まで割り付けた。

「やりやアがつたな！」

と喚くと、もう一人の乾児が、むこうみずにも、脇差しを水平にし、体もろとも、突っ込んで来た。それを頼母は左へ反わし、乾児が、脇差しを壁へ突っ込んだところを、背後から、肩を背筋まで斬り下げた。

二人を助けて

と、間髪を入れず、三人目の乾児が、

「野郎！」と叫んで、足を薙ぎに飛び込んで来た。

「命知らずめ！」

と頼母が叫んだ時には、もうその乾児の脳天を、鼻柱まで斬り下げ、その隙を狙って紋太郎が、脱兎のように戸口を目がけて逃げだしたのを、追おうともしないで見捨て、昏迷あがった四人目の乾児が、

「チ、畜生オーツ」

と悲鳴のような声をあげて、滅茶滅茶に脇差しを振り廻し、ヒ

ヨロヒヨロと接近ちかよつて来るやつを、真正面から、肩を胸まで斬り、望月角右衛門が、

「拙者、頼母めを背後より……各　《おのおの》方は正面から……」

と叫び、刀を振り冠り、背後へ廻ると見せかけ、その実は、お浦と典膳とが釣り下がっているその足の下を潜り、戸口から飛び出したのをも見捨て、生き残った二人の乾児が、これも戸口から駆け出そうとするのを、素早く前へ立って遮さへぎり、

「逃げれば斬るぞ！　坐れ！」

と大喝し、二人の乾児が、ベツタリと坐つたのを睨み、

「脇差しを捨てろ！」

二人の乾児は脇差しを投げ出した。

左門へ立ち向かつては子供のようにあしらわれる頼母ではあつたが、本来が勝れた腕前、博徒や用心棒に対しては段違いに強く、またたくま瞬間に四人を斃し、二人を追い、二人を生擒とりこにしてしまったのである。

頼母はホツとし、大息を吐き、しばらくは茫然としていた。

(恩こそあれ、怨みのない五郎蔵殿の乾児衆を殺したとは……)

武蔵屋で、左門と出会った時、五郎蔵たちに助けられなかったならば、自分は手もなく左門に討ち取られたことであろう！ 五郎蔵殿とその乾児衆とは、自分にとっては恩人に相違ない！ それを、時の機勢はすみとはいえ、先方から仕掛けた刃傷沙汰とはいえ、

その恩人の乾児を四人殺したとは……。

(殺生な!) その優しい心から、頼母は暗然とせざるを得なかった。

と、その時、頭上から、

「頼母様ア—ツ」

と叫ぶ、女の声が聞こえて来た。頼母はハツとし、気が付き、

声の来た方を振り仰いだ。半分死にはいり、ほとんど人心地のな

かったお浦が、今の乱闘騒ぎで、正気を取り戻したらしく、藍の

ように蒼い顔を、薄暗い梁の下に浮き出させ、血走った眼で、思

慕に堪えないように、じつと頼母を見下ろしていたが、紫ばんだ

唇を動かしたかと思うと、

「頼母様アーツ……あなた様のために……あなた様に差し上げよう
と持ち出しました天国の御みつるぎ剣を、残念や、髪川へ落としまし
てございます。……こればかりが心残り！ ……死にまする、わたし妾
は間もなく死にまする！ ……いいえ何んの怨みましようぞ！
想いを懸けましたあなた様のために、五郎蔵親分になぶ鬪り殺しにさ
れて死ぬこそ、妾のような女には分相応！ ……本望！ ……喜
んで死にまする！ 頼母様アーツ」

荒縄の一端で釣り下げられている彼女であった。肩も胸も露あらわ出
に、乳房のあたり咽喉のあたり焼きごて鋺でも当てられたか、赤く爛ただ
れ、皮膚かわさえ剥むけている。深紅の紐でも結びつけたように、血が
はぎ脛を伝わっている。

「頼母殿と仰せられるか、一思いにお殺しくだされい！ お慈悲でござるぞーッ」と叫んだのは、縄の他の端に繋がれた、お浦と並び、釣り下げられている典膳であった。

「おのれ五郎蔵、この怨み死んでも晴らすぞよ！ ……汝の過去の罪悪、わけても道了塚での無慈悲の所業しわざ！ それを俺に剖あばかれるかと虞おそれ、瞞だまし討ちから罫り殺しにかけおつたな！ ……可哀そうなは伊丹東十郎！ あいつの悲鳴、今も道了塚へ行かば、地の下から聞こえるであろうぞ、『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーッ』と。……天国の剣を、汝が手に入れたも、この典膳が才覚したればこそじゃ。……その俺を罫り殺し！ おのれ五郎蔵オーッ」

ワングリと開けた暗い口から、焰ほのおの先のような舌を、ヒラヒラ出入りさせた。前歯が数本脱けている。引き抜かれたものらしい。爪を剥がされた足の指から、今も血がしたたつてい、その指の周囲を、金蠅が飛び廻っている。

頼母はやにわに刀を揮うと、二人を釣っている縄を切った。

「お浦殿オーツ」と頼母は、地に落ちて来たお浦を宙で抱き止めると、ベタリと坐り、お浦の体を膝へ掻き上げた。「頼母、お助けつかまつるぞオーツ」

恩こそあれ怨みのないお浦であった。この身を恋してくれたこと、なるほど、五郎蔵からみれば、怒りに堪えない所業であったろうが、この身からすれば、尋常に恋されたまでである。憎むべ

き筋ではない。その恋ゆえに、天国の剣を持ち出してくれたという。感謝しなければならぬではないか。その恋ゆえに、鬪り殺しにかけられたという。助けないでおられようか！ 四辺を見れば、壁に戸板が立てかけられてあつた。

「おのれ汝ら！」と頼母は、地べたに坐つてふる顫えている二人の乾児を睨みつけ、「戸板を持って！ ……お浦殿とそのお武家様とをか昇き載せよ！ ……そうして汝ら戸板をかつ担げ」

一団は納屋を出た。

（角右衛門どもの注進で、五郎蔵が乾児を率い、襲つて来るやも知れぬ。何を措いても身を隠さなければ！ ……では附近ちかくの林へ

！)

「走れ！ 向こうの林へ駆け込め！」

戸板の一団は、さつき、五味左門が身を没した同じ林の中へ駆け込んだ。

処女と殺人鬼

道了塚の林の中の紙帳の中で、葉が眼をさましたのは、これより少し以前まえのことであつた。彼女は、自分が蝶になつて、春の野を舞いあそんでいる夢を見ていた。野の中に、一本ひとつもとの、木蓮の木があり、白絹細工のような花が、太陽ひに向かつて咲き揃つているのを見、（美しく清らかで、若々しくて、まるで頼母様のよ

うですこと）と思い、一輪の花の中へ分け入った時、木蓮の花の、倍もありそうな巨大な、そうして血のように赤い蜘蛛くもが、突然、頭上うえから、舞い下がって来た。

「あッ、蜘蛛が！」と、蝶の葉は叫び、叫んだ自分の声に驚いて眼をさまし、起き上がった。と、狼狽して、紙帳の向こう側の隅へ、飛ぶように身を引き、そこへ、固くなつて坐つた若い、身長せいの高い、総髪そうがみの武士を認めた。

「まあ」と、葉は云つて、驚きを二倍にしたが、立派なお侍さんが、女の自分の声に驚いて、ケシ飛んで行ったのがおかしく、それに気の毒でもあつたので、「怖がらなくともよろしゅうござい
ますの。……わたし妾、ねぼけ寝呆気て叫んだだけでございますもの」と云い、

無邪気に、口をあけて笑った。

武士——五味左門は、

「ナニ、怖がらなくともよいと。……ふうん」

と、呆れて、まじまじと、葉の顔を見詰めた。

「あツ蜘蛛が」と叫ばれ、眼をさまされた。さすがの彼も、不意だったので胆をつぶし、思わず紙帳の隅へ飛び退がったままで、相手を怖がったのでも何んでもなかつた。怖がるといえば、葉こそ、怖がらなければならぬ筈である。はいったが最後、たいがい殺される紙帳の中へはいり、殺人鬼のような当人の左門と向かい合っているのであるから。それなのに、その葉が、「怖がらなくともよい」と云う。「ふうん」と、左門としては呆れ返らざ

るを得なかつた。

しばらく顔を見詰め合っている二人を、紙帳は、昼の陽光ひを浴びて、琥珀色こはくに、明るく、蔽うていた。時々、横腹が蠕動ぜんどうし、ウネウネと皺しわを作ったり、フワリと膨れたりするのは、春風が、外から吹き当たるからで、そのつど、例の、血汐で描かれた巨大な蜘蛛が、数多い脚を動かした。

「まあ」と葉は、驚きの声をあげた。「あなた様は、先夜、妾の家へお泊まりくださいました、五味左門様では？」

「さよう左門でござる。……その際は、お騒がせいたしましたな」と、左門は、削こけた、蒼白い頬へ皺しわを畳み煤色すすいろの唇くちを幽かにほころばせて微笑した。

（殺人者の左門と知ったら、怖がることであろうぞ）と思ったからである。

事実、葉は、その武士が、自分の屋敷で人を殺した、五味左門だと知ると、慄然とした。

（どうしよう？）

しかし、次の瞬間には、

（妾は、この人に悪いことをしていないのだから、殺される気遣いはない）と、初心うぶの娘らしい心から、そう思った。

それに、自分の寝言に驚いて、紙帳の隅へケシ飛んで行った左門の様子が、いかにも笑止だったので、（この人、それほど悪い人でないに相違ない）

と、思った。

栞と左門とは、しばらく見詰め合っていた。

「一人のお侍様をお殺しになり、もう一人のお侍様の足を斬り落
としなさいましたのね。……でも、よくよくのことがなければ、

あのような惨^{むごたらし}酷いことは……」

と、ややあつてから栞は考え深そうな様子で云った。

「きつとあの方達、あなた様に、よくよく悪いことを……」

「それでもござらぬ」

「いいえ、きつとそうだと存じますわ。でも、あなた様というお
方、気の弱い、臆病なお方でございますものねえ」

馬鹿のような無邪気さ

「ナニ、気が弱くて臆病？」

左門は、また呆れた。

「ええ、そうでございますわ。それに、謹み深い、丁寧な、善良いいお方でございますわ」

「……………」

「女の子の寝言に吃驚びっくりなすって、紙帳の隅へケシ飛んで行つたまま、お行儀よく、膝にお手を置いて、かしこまっておいでになるのですものねえ」

云われて、左門は、自分を見廻して見た。なるほど、痩せた肩

を聳^{そび}かし、両手をお行儀よく膝の上へ置き、膝をちんまりと揃えて坐っていた。叱られた子供が、姉さんの小言を、かしこまつて聞いている格好であつた。左門は苦笑した。しかし左門としては、何も葉に遠慮して、そんな態度をとつたのではなく、突然の葉の声に驚き、飛び退がつた時にそういう姿勢をとり、それをこの時まで持ち続けて来たまでであつた。

(それにしてもこの娘は、何んと朗らかで、無邪気なのであろう)
左門は、体を寛^{くつろ}げた。

(いい氣持ちだ)

左門は、心が豊かになり、和^{なご}やかになるのを感じた。

「第一、このお家、妾のものでなく、あなた様のものではないま

すわ。あなた様のご主人様で、妾はお客様でございますわ。そのご主人様が、遠慮するということございませんわ」

と栞は云つて、膝の上で、長い袖を弄もてあそんだ。紅色の勝った、友禅模様の袖は、いろいろの落花の積み重ねのように見え、それを弄んでいる娘の、白い、細い、柔らかい指は、その花の積み重ねを、出たりはいったりする、蚕かのように見えた。

「家とは？」

「紙帳のことですの」

「ははあ」

と云つたが、左門は、(いいことを云つてくれた)と思つた。

(紙帳こそ、俺の家であり巢なのだからなあ)

また左門はいい気持ちになった。そこで膝を崩し、手を懐中
へ入れ、ノンビリとした姿勢となった。

「紙帳といえは、妾がお釣りののでございますの」
葉は云いつづけた。

「妾、林を散歩して、ここまで参りましたところ、紙帳が落ちて
いたではございせんか……最初は、本当は、気味悪かったので
ございますのよ。……でも、見ているうちに、釣りたくなりました
たので、釣りましたところ、今度は、はいつてみたくなりました。
……はいりましたところ眠くなりました。そこで妾、眠ったので
ございますわ……」

「ははあ」と左門は云ったが、さては紙帳は、あの夜、お浦によ

つて、武蔵屋の庭から外へ運び出され、それから、何かの理由で——風にでも吹かれ、ないしは、お浦自身ここまで持つて来て、棄てて立ち去ったのかもしれないと思つた。

(どっちみち紙帳を、ここで取り戻すことが出来たのは幸福だつた)

二人はしばらく黙つていた。

ふと、上の方で、ひそかな物音がした。

葉は、顔を上向けた。紙帳の天井に、楓の葉のような影が二個映つてい、それが、ひそかな音を立てて、あちこちへ移動つていた。小鳥の脚の影らしい。また二個数が増した。もう一羽、紙帳へ停まつたらしい。四個よっつの小鳥の脚の影は、やがて紛もつれあ合つた。

戯れているらしい。と、二個ずつ離れ、つづいて、意外に高い、でも優しい啼き声が響いて来た。

「テツポ、シチニオイテ、イツツブ、ニシユ」

と、その声は聞こえた。

とたんに、四個の脚の影は消えた。飛び去ったらしい。しかしやや離れたところから、同じ啼き声が聞こえて来た。

「ほおじろ頬白でございますわね」

と葉は云つて、眼を細め、左門の顔を見た。

「何んといつて啼いたかご存知？」

「さあ」

「『鉄砲質に置いて、五粒二朱』——と、啼いたのですわ」

「ははあ」

「猟にあぶれた 猟かりゆうど師しが、鉄砲をかついで、山道を帰って来る時、高い木の梢で、ああ啼かれますと、猟師は憤おこれて来るそうでございます」

「ふ、ふ」

と、左門は、思わず、含み笑いをした。

「その筈でございますわ」と栞は云いつづけた。

「そのように不景気では、今に、鉄砲を質に置いて、五粒二朱借りるようになるぞよ、などと頬白にひやかされては、猟師としては、憤れて来ますわね」

「憤れますとも」

「でも、頬白は、普通、『一筆啓上仕る』と啼くのだそうでございます」

「物の啼き声は、聞きようによつて、いろいろに取れますわい」

愛すればこそ

「蛙が何んといつて啼くかご存知？」

「さあ」

「久太という小博徒こばくちうちが、勝負に負けて、裸体にむかれて、野良路を帰つて来ると、その前を、郷方見廻りの立派なお侍さんが二人、歩いて行かれましたそうで。……すると、田圃の中から、蛙

が啼きかけましたそうで。……何んといつて啼いたかご存知？」

「知るわけがござらぬ」

「『あんた方お歴々、あんた方お歴々』と啼いたそうでございませぬ」

「それも聞こえますなあ」

「久太が通ると、また、蛙は啼きかけたそうですが、何んといつて啼いたかご存知？」

「知るわけはござらぬ」

「『裸体でオホホ』と啼いたそうでございます」

「なるほど、それも聞きとれますなあ」

「久太は怒って、蛙を捕えて、地べたへ叩きつけましたそうで。」

……何んといつて蛙が啼いて死んだかご存知？」

「知るわけはござらぬよ」

「『久太ア』と啼いて死んだそうでございます」

「あツはツはツ」と左門は、爆笑した。「『キューター』……あツはツはツ」

爆笑してから、ハツと気がついた。

（俺は幾年ぶりで、気持ちよく、腹の底から、何んの蟠わだかまりもなく、笑つただらう？）

そうして、彼の気持ちは、快く爆笑させてくれた葉に対して、感謝しなければならぬようなものになっていた。

（妾、どうして今日は、こう何んでも、気安く思うことが云える

のだろうか？)

と、葉は葉で、自分ながらその事が、不思議なような気がした。(やはり、お父様のご病気がお癒りになったからだわ。……そうして、頼母様が、今日あたり、帰っておいでになるからだわ)——それに相違なかつた。それだから、心が喜びに充ちてい、何んでも云え、何んでも受け入れることが出来、何んでもよい方へ解釈することが出来るのであつた。

また二人は、しばらく沈黙して、向かい合っていた。

左門は、いつか、肘を枕にして横になつた。

蕾を持った春蘭が、顔の前に生えていて、葉の隙から葉の姿が、すだれご簾越しの女のように見えていた。葉は、顔を上向け、また、何

か想いにふけつていようであつた。華やかな半襟の合わさり目から、白い滑かな咽喉が覗き、その上に、ふくよかな円い顔が載つていて、咽喉の形が、象牙の撥ぼちのように見えているのも、初ういう々いしかつた。

葉は笑つた。頼母のことを思つての、「想い出し笑い」であつた。

「葉殿」と、左門は、相手の心を探るように云つた。

「そなた、誰かと恋し合つておられますな」

「ま、……どうして……」

しかし葉の耳朶は紅を注した。

「様子でわかります」

「……………」

「あまりに浮き浮きとしておられる。あまりに幸福そうじゃ。…
…若い娘ごが、そのように成られること、恋以外にはござらぬ」

「……………」

「栞殿のような、美しい、賢い、無邪気な娘ごに恋される男、何
者やら、果報者でござるよ」

「……………」

「相手の殿ごも、栞殿を愛しておられますかな？」

讐敵紙帳の内外

「それはもう……」と、栞は思わず云つて、また顔を染めた。

「その殿ご、心変りせねばよいが」

「なんの……決して……そのようなこと！」

「競争者でも出来て……」

「競争者でも……」

と、栞の顔へ、はじめて不安の影が射した。

「さよう、競争者でも出来ましたら、男の心など、変わるもので」

「いいえいいえ、そんなことがありますものか！ ……でも、も

しや、そんなことになつたら……死にまする！ 妾は死にま

する！」

「こう云っているうちにも、あばず阿婆擦れた女などが、そなたの恋人

——いずれ、しおらしい、初心の葉殿の恋人ゆえ、同じ初心のしおらしい殿ごでござろうが、その殿ごへ、まとい付いて……」

葉の顔色は次第に変わり、眼が、地面の一所へ据えられた。

その様子を見ると左門は、本来なれば、性来の悪魔性が——嗜しぎやく

虐性が、ムクムクと胸へ込み上げて来、この純情の処女おとめの心を、

嫉妬さいぎと猜疑さいぎとで、穢してやろうという祈願ねがいに駆り立てられるので

あつたが、今は反対で、

（気の毒な！ こんな純情の処女の心を苦しめてはいけない）と思つた。そこで快活に笑い、

「いやいや葉殿、心配はご無用になされ、純情の殿ごなりや、どのような性悪る女であろうと、誘惑の手延ばされぬものでござる。

……それにしても、葉殿のような娘ごに、そのようにまで想われる男、果報者の代表、うらやましい次第、何んという名のお方でござるかな？」

「はい、そのお方の名は……」

葉が云いかけた時、紙帳の外から、

「やア、ここに紙帳が釣つてあるわ！ ……やア、左門めの紙帳じゃ！」

という声が聞こえた。

頼母の声であつた。

「左門！」と、その声は叫んだ。「我は伊東頼母、先夜は府中武蔵屋で、むぎむぎ取り逃がしたが、再度ここで巡り合つたは天の

祐^{たす}け！ 父親の敵、今度こそは遁^のがしはせぬ！ 出て来て勝負を致せ！」

「頼母様アーツ」

と、その声を聞いて、まず呼ばわったのは、栞であった。

「頼母様アーツ、妾、栞でござりまする！ ……今日あたりお帰りくださりましょうかと、心待ちに待つておりましたところ！ おお、やっぱりお帰りくだされましたか！ ……それにいたしても変った所で！ 頼母様アーツ」

と、栞は、叫び叫び、紙帳の裾をかかけ、外へ出ようとした。しかし、その栞は、背後から、左門の手によつて引き戻された。「伊東頼母氏か。 ……紙帳の中におる者は、いかにも五味左門、

貴殿父上の敵じゃ！ ……が、頼母殿、紙帳の中には、もう一人ひとがいる！ 飯塚薪左衛門殿の娘葉殿じゃ！ ……いや、驚き申したわ。葉殿に恋人のあること、たった今、この帳中で、葉殿より承つてござるが、その恋人が、貴殿、頼母殿であろうとは！」

左門は、そう云い云い、刀の柄を右手で掴んだが、一振りすると鞘を飛ばせ、蒼光る刀身を、頼母のいると覚しい方へ差し付けた。

「悪縁といえ、よくよくの悪縁でござるよの」と左門は、辛辣な声で云いつづけた。

「貴殿のお父上を討ち取ったばかりか、武蔵屋では、貴殿の恋人、博徒五郎蔵の女お浦という者を、拙者この帳中で、……しかるに、

同じこの紙帳の中で、貴殿第二の恋人、葉殿を。……重なる怨みとはこの事！ フツフツ、これでは貴殿、拙者を見遁がすことな
りますまいよ！」

悲痛の頼母

「頼母様アーツ」

と葉は、左門の手から遁がれよう遁がれようと身悶えしながら、
必死となって叫んだ。

「左門様が、あなた様のお父様の敵などとは夢にも知らず、先^{さき}刻^どから、紙帳の中で、物語りいたしましたは真実ではござりま

するが、何んの貞操みさおを！」

「それは真実じゃ！」

と、左門は、意外に真面目の声で云った。

「葉殿は、純潔じゃ。……それから……」と云ったが、云い止めた。

しかし、やがて決心したように、誠実のこもった声で、

「先夜、武蔵屋で、お浦と申す女子を手に入れたよう申したが、これも嘘じゃ！ ……拙者に関する限り、お浦という女は純潔じゃ！ ……本来、拙者は女嫌いだな。いわば女性嫌忌性なのじゃ！」

(それにしても)

と、左門は、自分で自分を疑った。

(どうして、こう、俺は素直な気持ちになつたのであろう。……先夜は、頼母めを苦しめようために、手を触れさえしなかつたお浦という女を、手に入れたなどと偽いつわり云つたのに。……いまに至つてそれを取り消すとは)

——左門には、その理由がわからなかつたが、しかし、その理由は、朧おろというような、本当に無邪気な、純な処女と、罪のない、子供同士のような話をし、腹の底から笑つたことが影響し、彼の心が、人間本来の「善」に帰つたからであるかもしれない。

「動くか、頼母！」

しかし、突然、左門は一喝し、グルリと体を廻し、紙帳の、側

面の方へ向き、刀を差し付けた。

「紙帳の内と外、見えぬと思うと間違うぞよ。……紙帳の中にある左門こそ、不動智の位置にいる者じゃ。左へも右へも、前へも後へも、十方八方へ心動きながら、一所へは、瞬時も止まり居坐らぬ心の持ち主じゃ。眼光めは、紙背に徹するぞよ！……嘘と思わば証拠を挙げようぞ。……汝、今、紙帳より一間の距離へだたりを持ち、正面より側面へ移ったであろうがな。……現在いまは同じく一間の距離を持ち、紙帳の側面、中央なかばの位置に立ち、刀を中段に構え、狙いすましておろうがな。……動くか！」

と、またも大喝し、左門は、グツと左へ体を向け、紙帳の背面へ刀を差し付けた。

紙帳は、二人を蔽うて、天蓋のように、深く、静かに、柔らかく垂れていた。縦縞のように、時々襞が出来るのは、風が吹きあたるからであろう。

ここは紙帳の外である。——

頼母は、刀を中段に構え、紙帳から一間の距離を保ち、紙帳をにら睨んで突つ立っていた。全身汗を掻き、顔色蒼褪め、眼は血走っていた。お浦と典膳とを戸板に載せ、五郎蔵の乾児二人に担がせ、ここまで走つて来た頼母であった。見れば、林の空地に、見覚えのある、五味左門の紙帳が釣つてあつた。驚き喜び、宣りかけたところ、意外も意外、恋人葉が、その中にいて、声を掛けたとは！……それが、殺人鬼のような左門の手中にあつて、身うごき

が出来ずにいるとは！

これだけでも頼母は、逆上せざるを得なかった。その上、劍技にかけては、段違いに優れた左門によつて、紙帳の中から、嘲弄されたのである。頼母は文字通り逆上した。

（父の敵の左門、討たいで置こうか！ 恋人の葉、助けないで置かれようか！）

思うばかりで、体はほとんど自由を欠いていた。眼前の紙帳が、鉄壁のように彼には思われた。鉄壁を貫いて、今にも、左門の劍が、閃めき出るように思われた。腕が強^{こわ}ばり、呼吸がはずみ、足の筋が釣った。それでも、彼は、隙を狙うべく、紙帳を巡った。帳中の左門によつて、見抜かれてしまった。

手も足も出ないではないか。

常磐木と花木と落葉樹との林が立っている。鳥が翔け過ぎ、兎が根もとを走り、野鼠が切り株の頂きに蹲居り、木洩れ陽が地面に虎斑を作っている。

そういう世界を背後に負い、血痕斑々たる紙帳を前にして、頼母は、石像のように立っていた。差し付けた刀の切っ先を巡って、産まれたばかりらしい蛾が、飛んでいる。

と、その時、

「頼母様アーツ」

と呼ぶ、凄愴の声が聞こえて来た。

頼母のいる位置から、十数間離れた、胡頹子と野茨との叢の横

に、戸板が置いてあり、そこから、お浦が、獣のように這いながら、頼母の方へ、近づきつつあった。頼母様アーツと呼んだのは、お浦であった。彼女の眼に見えているものは、紙帳であり、彼女の耳に聞こえたものは、頼母と左門との声であった。武蔵屋の紙帳の中で、二度まで気絶させられた怨みある左門が紙帳の中にいる！ その左門は、自分にとつては、救世主とも思われる頼母様の親の敵だという！ おのれヤレ左門、怨みを晴らさで置こうか！ 懐かしい頼母様！ お助けしないでおられようか！ ……一人には怨みを晴らし、一人には誠まごころ心を捧げると、息絶え絶えながら、彼女は、紙帳の方へ這って行くのであった。

殺氣林に充つ

お浦は、獣のように這つて進んだが、渋江典膳は、よろめいたり、膝を突いたり、立ち木に縋ったりしながらも、さすがに立つて、この時、道了塚の方へ歩いていった。

そう、彼は、ここまで運ばれて来て、ここが、道了塚附近の林であることを知るや、

（この負傷^{いたで}では、どうせ命はない。では、せめて、数々の思い出と、数々の罪悪とを残している道了塚で、息を引き取ろう。……東十郎への罪滅しにもなれば、懺悔^{ざんげ}にもなる）
とこう思つて、そつちへ歩きだしたのであつた。

歩くにつれて、足からも手からも血がしたたつた。

しかし彼が道了塚まで辿りついたら、南無妙法蓮華經と刻られた碑にもたれ、天国の剣を放心したように握り、眼を閉じ、首を傾げ、昔の記憶を蘇生よみがえらせようと、じつと思いに耽っている、飯塚薪左衛門の姿を、見かけなければならぬだろう。

そう、薪左衛門は、そういう姿勢で、この頃、道了塚の頂きに坐っていた。

彼の顔には苦悶の表情があり、彼の体は不安に戦おのっていた。白髪には陽があたり、銀のように輝いていたが、その頭は、高く上がりがりそうもなかった。

人間の思考の中に、盲点というものがある。その盲点の圏内に

はいつた記憶は、奇蹟的事件にぶつからない限り、思い出されな
いということである。何故薪左衛門が、来栖勘兵衛と、この道了
塚で決闘したか、その理由の解らないのも、その盲点に引つかか
っているからであるらしい。

そうして、さつき聞こえて来た、塚の下からの悲しい叫び声、
「秘密は割あはかない、裏切りはしない、助けてくれーッ」

という声の主の何者であるか？ 何んでそう叫ぶのか？ それ
らのことの解らないのも、盲点の圏内に、その記憶が引つかかっ
ているかららしい。

ところで……広々と展開ひらけている耕地を海とし、立ち連なつて
いる林を陸とすれば、道了塚は、陸に近い、小島と云つてよく、

その小島にあつて、陸の林の一方を眺めたなら、林の縁を、人家の方へ一散に走つて行く、二人の人影を見たであろう。戸板を昇き捨て、素早く逃げ出した五郎蔵の二人の乾児こぶんであつた。二人の走つて行く様は、檻おりから解放された獣かのように軽快であつた。

と、その二人の走つて行く方角の、十数町の彼方あなたから、此方こなたを目差し、二十人ほどの一団が、林へ駆け込んだり、耕地へ出たりして、走つて来るのが見えた。

松戸の五郎蔵と、その乾児たちであつた。

五郎蔵の左右に従ついてゐるのは、角右衛門と紋太郎とで、この二人の注進により、五郎蔵は、頼母によつて、自分の乾児たちが殺されたことを知り、復讐のために乾児を率い、農家の納屋へ馳

せつけた。乾児たちの死骸が転がっているばかりで、頼母の姿も、お浦、典膳の姿も見えなかつた。母屋の門口で、種を選り分けていた老婆に訊くと、戸板を担った三人の者が、林の中へ駆け込んだと云う。

(頼母が、お浦と典膳とを戸板に載せ、生き残った俺の乾児に担がせ、逃げたのだ)

と、五郎蔵は察した。怒りと、嫉妬とが彼を狂気のようにした。「どこまでも追っかけ、探し出し、頼母、典膳、お浦、三人ながら叩っ殺せ！」

こうして一団は林へ駆け込み、こつちへ走って来るのであつた。乾児の中には、竹槍を持っている者もあつた。もう性急に脇差し

を抜いて、担いでいる者もあつた。武士あがりの、たく遅ましい顔の五郎蔵は、額からも頤からも汗をしたたらせ、火のような息をしながら、先頭に立つて走っていた。

殺気は次第に道了塚と、その附近の林とに迫りつつあつた。

それなのに、紙帳の中の、何んと、今は静かなことだろう！

左門の声も栞の声も聞こえず、しわぶき咳一つしなかつた。

頼母は、そういう気味悪い沈黙の紙帳を前にして、石像のように立ち尽くしていた。構えている刀の切っ先が顫えているのは、彼の心が焦慮している証拠であつた。

（何故沈黙だまっているのだろうか？ 何が行われているのだろうか？

……栞はどうしているのだ？ ……いや栞は何をされているのだ

ろう?)

恋人の葉が、殺人鬼のような左門と、紙帳の中にいる。二人ながら黙っている。何をされているのだ? もしや咽喉でも絞められて? ……

これを思うと頼母の腸は搔きはらわたむしむしられるようであった。

必死のお浦

この時、遙かの林の奥から、喊声が聞こえて来た。五郎蔵たちの一団と、戸板を置き捨て、逃げて行った二人の乾児とが邂逅めぐりあい、二人の乾児によって、頼母と、お浦と、典膳との居場所を知

つた五郎蔵たちの揚げた声であつた。

「逃がすな！」 「もう一息だ！」

二十数人の一団は、藪を廻り、木立ちを巡り、枯れ草を蹴開き、無二無三に走つた。

「いたぞーッ」

という叫びをあげたのは、先頭切つていた五郎蔵であつた。

「左門などには眼をくれるな！ 頼母とお浦と典膳とを仕止めろ！」

こう五郎蔵が叫んだ時には、長脇差しを抜いていた。

悪罵と怒号とが林を揺すり、乾児たちの抜いた、二十数本の脇差しが、灣に寄せた怒濤が、高く上げた飛沫しぶきのように白光つた。

そう、五郎蔵たちの一団は、紙帳を背後にし、この時ようやく這い寄り、足へ縋り付いたお浦を、縋らせたまま、蒼白の顔色をし、刀を構えて立った頼母を、引つ包んで討ち取ろうと、湾のように左右に開き、立ち向かったのであった。

「頼母様アーツ」とお浦は叫んだ。「妾ゆえに、お気の毒なこの憂き目！ ……想われたあなた様の因果！ さぞ妾が憎いでございましょう！ ……一思いにその刀で、妾をお殺しくださりませ！ ……あなた様に殺されましたら、本望の本望！ 頼母様アーツ」

頼母は切齒し、

「この場に臨んで、何を繰り言！ 放せ足を！ ……一大事の場合

合、邪魔いたすな！」

足を上げて蹴り、蹴られて、紙帳の裾にまろ転び寄ったお浦を、帳中から手が出て、引き入れた。

瞬間、白刃が、十数本、頼母に降りかかった。

それを頼母は、左右前後に、切り、防ぎ、そうして退き、ジリと退き、松の木の幹に背中をもたせ刀を構え、大息を吐き、八方へ眼をくばり、

（俺は、これから、どうなるのだ？）

と思つた。

この頼母の心境こころは、地獄さながらであつたが、帳中へ引き入れられたお浦の心境も、地獄さながらであつた。

——ここは紙帳の中である。

お浦は、左門へ、むしやぶりつこうとしていた。

おのれ

「汝、左門ンーン」

それは、血を吐くようなお浦の声であつた。

「汝のために、武蔵屋で、紙帳の中へ引き入れられ、気絶させられ、悩乱させられたばかりに、頼母様に差し上げようと思つた天国様を川へおとし、そればかりか、五郎蔵に捕えられ、『俺を裏切り、頼母へ心中立てした憎い女！ 黷り殺しにしてくれる』と、昨日まで府中で責め折檻せつかん、今日はいよいよ息の根とめると、百姓家の納屋へ戸板でかつぎこまれ、……そこを嬉しや、頼母様に助けられ、ここまでは連れられ遁がれては来たが……汝、左門ン

ーン……汝とは何んの怨みもないこの身、部屋を取り違えたが粗そ忽こつといえは粗忽……そのような粗忽、いましめて、放してさえくだされたら、何んの間違ひもなかつたものを！ ……汝の悪逆の所業から、それからそれと禍いを産み、頼母様を五郎蔵に怨ませ、アレアレあのように紙帳の外では、五郎蔵めに頼母様が！ ……」

胸はあらわ、髪は崩れ、頸には、折檻された痕の青あざがある。

——そういうお浦が、怨みと怒りで血走った眼を据え、食い入るように、下から、左門を睨み、地を這い、じりじりと進み、武者振りつこうとしているのであった。

純情の二人の女

左門は、右手に、抜いた関ノ孫六の刀を握り、それを、お浦へ差し付け、左手では、紙帳の裾をかかげ遁がれ出ようとする葉の帯を掴んでいた。

「お浦、事情を聞けばまことに気の毒、さぞ左門が憎いであろうぞ！　が、今は甲斐ない繰り言！　過ぎ去った事じゃ！　……」

と云ったが、抜き身を地へ置くと、その手を頤の下へ支い、眉根へ寄せたがために、藪睨みのようになって見える瞳で、つくづくとお浦の顔を見詰め、

「以前の拙者なりや、これまでその方より紙帳へ近附いたからには憂き目を見たは自業自得と、突っ放すなれど、いま現在の拙者の心境ではそ

れは出来ぬ。氣の毒に思うぞ！ 詫び申すぞ！ ……さりながら

一切は過ぎ去つたこと、繰り返しても甲斐はない！ ……今後は

贖罪とくざいあるばかりじゃ！ ……お浦、そちのその重傷おもてでは、生命

取り止むること覚束おぼつかないかもしれぬ。そこで云う、今こんじょう生唯

一の希望のぞみを申せ！ ……左門、身に代えて叶えてとらせる！」

「希望?! ……唯一の、今生の希望?!」

と、お浦は、すでに天眼になりはじめた瞳、小鼻がにわかになつて、

細く険しくなつた鼻、剗えぐられたように痩せ落ちた顛顛こめかみや

頬、そういう輪廓を、黒い焰のような乱髪で縁取りふちどり、さながら、

般若はんにゃの能面おもてを、黒ビロードで額縁したような顔を、ヒタと左門

へ差し向けたが、

「おおそれなら、頼母様のお命を！ 才、お助けくださりませ！

……五郎蔵の乾児大勢に、ああ取り囲まれましたは、所詮助からぬあのお方のお命！ ……お助けくださらば海山のご恩！ ……

……あなた様への怨みも消えまする！ ……左門様アーツ」

「左門様アーツ」

と、するとこの時、もがいて、ようやく、左門の手から遁がれた葉が叫んだ。

「妾からもお願いいたしまする！ ……頼母様のお命お助けくだ

さりませ！ ……聞けば頼母様、五郎蔵一味大勢の者に取り囲

まれ、ご危難とか！ ……おおお、あの物音が、頼母様討とう

の物音とか！ ……掛け代えのない大切の頼母様、才、お助けく

ださりませーッ」

乱れた衣裳、髻千切れた髪、蒼白な顔、嵐に揉まれる牡丹桜とでも云おうか、友禅の小袖の袖口からは、緋の襲着がこぼれ、半分解けた帯の間からは、身悶えするごとに、鴝色の帯揚げがはみ出し、髪へ掛けた鹿の子の布が、蠟細工のような耳朵のあたりで揺れている態など、傷ましく哀れではあつたが、尚美しさ艶かしさを失わない女の姿であつた。

「ナニ、掛け代えのない大切の頼母様？」

と、お浦は、はじめて栞へ眼をつけたが、

「汝わりやア何者？ ……見ればまだ小娘！ ……それなのに、妾の、

頼母様のことを！ ……」

氣も遠々に、次第に地面へ伏し沈もうとする体を、またも猛然と揺り起こし、しかし、立ち上がる氣力はなく両手を地に突き、朶の方へお浦は這い寄るのであった。

「さては汝は、おのれ頼母様に、横恋慕をしてこのお浦から……」

朶も今は一生懸命、胸を反らせ、膝を揃え、膝の上へ両手を重ね、毅然とした態度となったが、

「横恋慕などとは穢らわしい、そなたこそ誰じゃ？ そなたこそ横恋慕！ ……妾はこの土地の郷士飯塚薪左衛門の娘朶！ ……」

頼母様とは将来を誓約ちかった仲！ ……邪よこしまの恋などではござり

ませぬ！ ……それを横恋慕などと！ ……」

「吠ほぎくな小娘！」

と、お浦は、南国に住むという傘からかさへび蛇へびが、敵に襲いかかるよ
うに、ユラユラと背延せつかんびをし、両手を高く上げたが、

「命取られるまでに折せつかん檻なぶされ、鬻なぶり殺しにかけられたお浦、それ
も頼母様のため！　これが邪まの恋か！　……おとおお、これ
が邪まの恋か！　……恋？　なんの！　恋なものか！　おとおお、

恋などという生やさしいものは、妾にとっては、遠い昔の物語！

……真まっとう実の人間に復活かえろうと、久しい間、男嫌いで通して来

たものを！　……恋？　それも邪まの恋？　……何んの何んの頼

母様は、わたしにとっては恋以上のお方！　……救世主すくいぬし！　……

……おとおお、でも、この妾の心！　ああやつぱり恋かしら？　……

……恋なら恋でままよ！　その恋ひたむきにとげるまでよ！　……

吠ほぞいたな小娘！ 頼母様とは将来を誓約ちかつた仲と！ ……まこと
なりや、その仲裂かいで置こうか！ ……汝おのれを殺してエーツ」
と、バツと蔽いかかろうとした。

紙帳の外は修羅場

瞬間、白光が、二人の間を裁断たちきつた。

地に置いてあつた抜き身を取り上げ、左門が二人の間へ突き出したのであつた。

「待て！ ……さりながら、純情と純情！ ……ハーツ」
と、太息をした。

五郎蔵の鼻^{ひいき}屑を受けていながら、五郎蔵を裏切り天国の剣を持ち出し、頼母に渡そうとしたこと、邪^{しわざ}まの所業には相違なかったが、生命をかけての頼母への執着ぶりから云えば、お浦の想い、純情といわずして何んだらう。

左門のような人間をして、腹の底から笑わせた栞の無邪気さ！
その栞の頼母への恋が、純情であることはいうまでもなかった。
その純情と純情とが、狭い紙帳の中で、今や噛み合おうとして
いたのであった。

(俺には扱^あい兼ねる)

左門は太い息をしたのである。

「栞殿」

と、やがて左門は云つた。

「拙者、先ほど、阿婆あばず擦れた女などが、そなたの恋人へ附きまとうやもしれずと申しましたな。……お浦こそその女子！……しかし、そなたの、頼母殿を想う念力強ければ、お浦など、折しやくぶ伏くすること出来ましょう！……弱ければ、折伏しやくぶされるまでよ

！……お浦！」

と、お浦を、不愍ふびんそうに見詰め、

「そちの頼母殿への執着、浅間しいともいえれば不愍ともいえる！……しかし思え！そちの命は助からぬやもしれぬ。死に際を潔うせよ！……栞殿へ恋を譲れ！……そこまで強い想い、譲るは辛いであろうが、譲れば、かえってそちの煩惱、まず第一

に救われるであろうぞ！ …… 栞殿も救われ、頼母殿ものう。…
 …… 栞殿は無邪気な処女おほこ、頼母殿を、荒んだ仇し女などに取られる
 より、まだしも栞殿に譲った方がのう。…… さりながら、女の世
 界での出来事は、男の世界からはうかがいしること出来ぬわい！
 そちたちまか委せ！ …… おさらばじゃ！」

刀を引くと立ち上がり、紙帳の側面かべへ身を寄せたが、

「二人ながら安心いたせ！ 二人の希望を叶え、拙者、五郎蔵は
 じめ、五郎蔵の乾児どもを、斬って斬って斬りまくり、頼母殿の
 命はきつと救う！ …… 注意こころいたせ！」

と、左門は訓いましめるように云った。

「二人ながら紙帳を出るな！ …… 紙帳こそは拙者の家、わが城と

砦^り、この中にそちたちいる限りは、拙者身をもつて護つてとらせ
る！ 出たが最後、拙者関係^{かかわ}らぬぞ！」

幾多の悲劇を経験した紙帳は、またも悲劇を見るのかというよ
うに、尚睨み合っている二人の女と、今や紙帳の裾に蹲^{うずくま}居り、
刀を例の逆ノ脇に構え、斬つて出^いずべき機会を窺い、戸外^{そと}の物音
を聞きすましている左門とを蔽うていた。頼母によつて斬られた
五郎蔵の乾児たちの血が、新しくかかつて、古い血の痕の上を、
そうして左右を、新規に深紅に染め、それが、線を為^なし、筋を為
し、円を描き、方形を形^{かたちづく}成り、流れ凝り^{こじ}、紙帳の面貌^{おもて}は、い
よいよ怪異を現わして来た。

が、紙帳の外は？

ここ紙帳の外は、修羅鬪争の巷であつた。

頼母は既に紙帳の側から離れ、ふたたび立ち木の幹へ背をあて、群がり寄せ、斬りかかろう斬りかかろうとする五郎蔵の乾児たちを睨み、自分もいつか受けた数カ所の負傷きずで、——斬つた敵方の返り血で、全身朱あけに染まり、次第に迫る息を調べ、だんだん衰える気力を励まし励まし、……

そういう頼母の眼に見えているのは、正面乾児たちの群の中に立ち、彼を睨んでいる松戸の五郎蔵の姿であつた。

憎にくしみ悪にくしみに充ちた五郎蔵の眼がグツと据わり、厚い唇が開いたと見てとれた瞬間、怒号する声が聞こえて来た。

「憎いは頼母、親の敵に邂逅めぐりあつたという、義によつて助太刀し

てやったところ、恩を仇に、お浦めをそそのかし、天国の剣を持ち出させたとは何事！ 息の根止めずに置かれようか！ やア乾児ら、うろうろいたさず、頼母めを討つてとれ！ ……おおおお、お浦め、紙帳の中へ引き入れられたまま、いまだに出ぬぞ！ ……紙帳の中には左門がいる筈、その左門め、武蔵屋でも、同じ紙帳の中へ、お浦めを引き入れて……許されぬ左門！ やア乾児ら、左門めを討つてとれ！ ……典膳めの姿が見えぬぞ！ 典膳めはどうした？ ……俺の過去などと申して、あることないことを云い触らす痩せ浪人！ 生かしては置けぬ！」

喚きちらし、地団駄を踏む五郎蔵の心境も、苦しいものに相違こころなさそうであった。

「やあ汝ら手分けして典膳を探し出せ！」

声に応じて数人の乾児が、木立ちを潜つて走つて行く姿が見えた。

「やア松五郎！」と怒鳴る五郎蔵の声がまた響いた。「紙帳を窺

え！ 紙帳の中を！」

外光の中で見る紙帳の気味悪さ！

左門の任侠

今は中からは人声は聞こえず、
まわり 周囲の、さけびごえ 叫喚、どなりごえ 怒号、けんげ 剣
 戟きの響きを嘲笑うかのように、この、多量に人間の血を浴びた

長方形の物像は、ものかたち木立ちと木立ちとの間に手を拵げ、弛んだ裾で足を隠し、静かに立っている。吸つても吸つても血に飽かないこの怪物は、これまでも随分血を吸つたが、今日こそはそれにも増して、充分に吸うぞというかのように、静かな中にも胴顫いをさせている。そう、微風につれて、ゆるやかな弛みを作つたり、幽かな襞ひだを作つたりしているのであつた。裾の一所に、背を光らせた蜥蜴とかけがいて、這い上がるうとし、短い足で紙帳を搔いているのも、魔物めいていて不気味であつた。

と、その紙帳目掛け、松五郎なのであろう、一人の乾児が、抜き身を引つさげたまま、仲間の群から駈け抜け、走り寄るのが見えた。が、その体が紙帳へ寄り添つたと見えた瞬間、悲鳴が起こ

り、丸太のようなものが一間ばかり飛び、足を股から斬り取られた松五郎が、鼠煙火はなびのように地上をぶん廻り、切り口から、龍りゆう吐水どすいから迸る水のように、血が迸り、紙帳へかかるのが見えた。

すぐに紙帳の裾がパツクリと口を開け、そこから身を斜めにし、刀を袖の下にした、痩せた長身の左門が、ソロリと潜りくぐ出て来た。

「出たーッ」

と、五郎蔵は、自分が襲われたかのように叫んだ。

左門は紙帳を背後にし、頬の削けた蒼白い顔を、漲る春の真昼陽に晒らして立ち、少しまぶしそうに眼をしばたいた。

「出た！ 本当に出た！ 左門が！」

立ち木に背をもたせ、五郎蔵とその乾児たちとを睨んでいた頼

母も、紙帳を出た左門を認め、声に出して叫んだ。悪寒が身内を氷のように走った。

（絶体絶命！ ……俺はここで討たれるのか！）

大勢の五郎蔵の乾児たちを相手に斬り合うだけでさえ、今は手に余っていた。そこへ、いよいよ、自分より段違いに腕の勝れた左門が現われ出たのであった。勝ち目はなかった。

（残念！ 返り討ちに逢うのか！ ……栞殿を眼の前に置きながら、返り討ちに！）

眩くらみかかった彼の眼の、その眼界を素走って、五郎蔵の乾児数人が、左門へ襲いかかって行くのが見えた。と、その乾児たちを無視したように、左門の豹のような眼が、頼母の方へ注がれたが、

「頼母氏！」

という声が聞こえて来た。

「紙帳の中の二人の女子——栞殿とお浦との純情に酬いるため、二人の希望のぞみを入れ、拙者、貴殿へ助太刀つかまつるぞ。……ただし、拙者と貴殿とは讐敵かたき同士、恩に着るに及ばぬ、恩にも着せ申さぬ！……五郎蔵！」

と左門の眼が五郎蔵の方へ向いた。

「武蔵屋では、よくも拙者に手向かいいたしたな！ 今日返礼！ 充分に斬るぞ！」

「黙れ、犬侍！」

五郎蔵は躍り上がり躍り上がり、

「想いを懸けた俺の女を！ ……それを汝おのれ、よくもよくも！ ……
：汝こそ犬じゃ！ ……やア野郎ども犬侍を叩つ殺せ！」
声に応じ、竹槍を持った乾児が、左門眼がけて走り寄ったのが
見えた。と、左門の姿が無造作に一方に開き、竹槍の柄を掴んだ。
と思う間もなく、槍を掴まれた乾児が、よろめいて前へ出たところを、脇下から肩まで払い上げた。

「野郎ども一度にかかれ！」

怒号する五郎蔵の声に駆り立てられ、三人の乾児が左右から斬
つてかかった。

「頼母氏見られよ！」

と、左門の声が響いた。と同時に、一人の乾児の斬り込んで来

た脇差しを迎え、それより速く、その脇差しの上へ、自分の刀を重ねるように斬り付け、乾児の眉間を頤まで割り、

「これぞ我が流における『陽重の剣』でござるぞ！ ……先ほども紙帳の中より申しましたとおり、貴殿の剣法いまだ未熟、なかかもつて拙者を討つこととなりますまい。 ……されば拙者の剣法を仔細に見究め、拙者を討つ時の参考となされい！」

と呼ばわり、もう一人の乾児が、味方が討たれたのに怯え、立ち縮すくんでいる所へ、真一文字に寄り、肩を胸まで斬り下げ、

「頼母氏、今の斬こそは、我が流における『青眼破り』でござるぞ！ 相手、青眼に付けて、動かざる時、我より進んで相手の構えの中へ入り、斬るをもつてこの名ござる！」

と大音に呼ばわった。

左門の俠骨

いまだに立ち木に背をもたせ、五郎藏の乾兒たちと立ち向かっていた頼母は、眼に左門の働きを見、耳に左門の声を聞き、茫然とした気持ちにならざるを得なかつた。それは悲喜交こもこもの感情ともいえれば夢に夢見る心持ちとも云えた。左門が自分の味方として現われ出て来たことは、何んといつても頼母にとつては有難い嬉しいことであつた。しかし討たねばならぬ父の敵から助けられるということとは、苦くるしみ痛であつた。とはいえ現在いまの場合におい

ては、その苦痛は忍ばなければならなかった。もし五郎蔵一味に自分が殺されたならば、左門を討つことが出来なくなってしまうからである。今は、何を措いても、五郎蔵一味を殲滅せんめつするか追い払うかしなければならなかった。それには左門からの助太刀は絶対に必要のことであつた。

頼母は勇氣とみに加わり、今までは守勢の身であつたのが、攻勢に出、疾風のように五郎蔵の乾兒どもの中へ斬り込んだ。

胆を奪われた乾兒たちが狼狽し、散つて逃げた時、

(葉殿は?)

と、こういう場合にも、危険に曝さららされている恋人のことが心に閃めき、頼母は、逃げた乾兒どもを追おうともせず、身を翻え

すと一気に、紙帳へ駆け寄り、左門の立っている位置とは反対の、紙帳の裏側に立ち、紙帳を背にし、もう追い縋つて来た五郎蔵の乾児六、七人を前にし、構え込んだ。

五郎蔵の乾児たちは、今は、二派に別れて立ち向かわなければならぬことになった。

十数人の乾児たちは、左門へ向かった。

と、この時、左門の高く呼ぶ声が聞こえて来た。

「頼母殿、心得てお置きなされ！ 敵大勢四方よりかかるとも、一方へ追い廻せば結局は一人でござるぞ！ すなわち殿陣しんがりの一人が敵でござるわ！」

この言葉を証拠立てるためらしく、左門は突き進むと、左端の

一人を斬り斃し、戻りの太刀でもう一人を斬り斃し、狼狽した乾児たちが紙帳を巡って右手の方へ逃げるのを、隙かさず追ひ、逃げおくれた一人を、肩から背骨まで斜めに斬り下げ、紙帳の角を廻って尚追った。逃げた乾児どもは、頼母のいる紙帳の裏側まで来、そこに集まっていた七人の仲間とぶつかった。頼母に向かつていたその七人の乾児どもは、逃げて来た十数人の仲間の渦中に捲き込まれ、これも狼狽し後から左門が追って来るとも知らず、これは左手の方へ逃げだしたが、血刀を振り冠った左門の姿を見ると、仰天し、悲鳴を上げ、四方へ散り、紙帳から離れた。その乾児どもを追って、左の方へ走り出した頼母は、パツタリ左門と顔を合わせた。

「左門氏、ご助力、忝けのうござる！」

「黙らっしゃい！」

と左門は喝した。

「貴殿と拙者とは讐敵同士！ 恩には着せぬ、恩にも着たもうな

！」

「……………」

もう二人は別れていた。

左門に追われて逃げた十数人の五郎藏の乾児たちは、紙帳の角から少し離れた辺りあたで一団となり、左門を迎え撃つ姿勢をととのえた。しかし左門は物の数ともせず、駆け寄ると、以前まえと同じく、左端にいる一人を斬り斃し、返す刀で、もう一人の乾児を斬り伏

せ、これに恐怖した乾児どもが、ふたたび逃げ出したのを、紙帳に接近した位置を保ちながら追ったが、ふと、紙帳越しに、頼母の方を見た。頼母は乾児どもに包囲されていて、一人の乾児が背後から竹槍で、今や頼母の背を突こうとしていた。左門はやにわにこづか小柄を抜き、投げた。小柄は、紙帳の上を、飛び魚のように閃めき飛んだ。

頼母は、背後で悲鳴が起こったので、振り返って見た。竹槍を持った男が、咽喉のどへ小柄を立て、地面をのたうっている。事情が悟しれた。

「左門氏、あぶないところを……お礼申す！」

「貴殿と拙者とは讐敵同士……」

と左門は、逃げおくれた一人を、背後うしろざまに斬り伏し、

「恩に着るな、恩にも着せぬと申した筈じゃ！」

「……………」

この時まで五郎蔵は、乾児たちと離れて立ち、乾児たちの働きを見ていたが、左門と頼母とに、乾児たちが見る間に、次々に斬つてとられるので、怒りと恐怖と屈辱とで躍り上がり、頼母眼掛け駈け寄ろうとしたとたん、

「オ、親分ーン」

という声が、林の中から聞こえて来、一人の乾児が木のこ間まをくぐって走って来た。

「テ、典膳めは、道了塚の方へーッ」

「おおそうかーッ」

と、五郎蔵は応じたが、

「典膳だけは、俺の手で！ ……そうでない、と、安心が！ ……」
道了塚の方へ走り出した。

謎解かれる道了塚

この頃典膳は、道了塚まで辿りついていて、彼の肉からだ体も精こころ神も弱り果て、息絶え絶えであった。彼は塚の裾の岩へ縋り付いて呼吸を調えた。彼にとって道了塚は、罪悪の巢であり仕事の拠点であり悲惨惨酷の思い出の形見であった。彼は眼を上げて塚を見上

げた。二十年もの年月を経ておりながら、この自然物は昔とほとんど変化がなかつた。岩は昔ながらの形に畳み上げられてあり、苔も昔ながらの色にむしており、南無妙法蓮華經と彫刻きざまれてある碑も、昔ながらの位置に立っていた。その碑面が春陽を受けて、鉛色に光っているのも昔と同じであつた。

彼は懐かしさにしばらく恍惚うっとりとなり体の苦痛を忘れた。しかし彼は、すぐに、碑に体をもたせかけ、手に抜き身を持った老人が、放心でもしたように、茫然と、塚の頂きに坐っているのを認め、驚き、尚よく見た。

「あツ」と典膳は思わず声を上げた。

それは、その老人が、昔の頭、——二人あつた浪人組の頭の一

人の、有賀又兵衛であつたからである。

「オ、お頭アーツ」

と、典膳は悲鳴に似たような声で呼びかけた。

「有賀又兵衛殿オーツ」

——有賀又兵衛……現在の名、飯塚薪左衛門は、昔の、浪人組の頭目だつた頃の名を呼ばれ、愕然とし、毛をむしられた鶏のような首を延ばし、声の来た方を見た。

彼の眼に見えたものは、塚の裾に、塚の岩組から、栓かのように横へはみ出している小岩、それに取り縋っている全身血だらけの武士の姿であつた。

「誰じゃ？」

と云いながら薪左衛門は、立てない足を躡らせ、塚の縁の方へ身を進めた。

「渋江典膳にござりまする。……二十年以前浪人組栄えました頃、組の中におりました、渋江典膳にござりまする！」

「渋江典膳？ おお渋江典膳！ ……存じおる！ 存じおるとも！ 組中にあつても、有力の人物であつた！ ……来栖勘兵衛と、特に親しかつた筈じゃ」

「さようにござりまする。私は来栖勘兵衛お頭の秘蔵の腹心、伊丹東十郎氏は、有賀又兵衛お頭の無二の腹心として、組中にありまして、重く使用いられますござりまする」

「伊丹東十郎？ ……おお伊丹東十郎！ ……覚えておる覚えて

おる！ わしに一番忠実の男だった。……どうして今日まで思い出さなかつたのであろう？ ……おおそういえば、さつき聞こえて来たあの声、『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーッ』と云つたあの声は、まさしく伊丹東十郎の声だった。……おお、俺はすっかり思い出したぞ。……あの時、二十年前、甲州の鴨屋方を襲い、莫大もない金銀財宝を強奪し、帰途、五味左衛門方を訪れ、天国の剣を強請り取り、それを最後に組を解散し、持ち余るほどの財を担い、来栖勘兵衛と俺と、そちと伊丹東十郎とで、この道了塚まで辿つて来、いつもの隠匿所へ、財宝を隠匿したが……」

「その時私は、勘兵衛お頭の依頼により、素早く天国の剣を持ち

逃げして、林の中へ隠れましてございます」

「財宝を隠匿かくしたが、その時突然勘兵衛めは、伊丹東十郎を穴の中へ突き落とし、『此奴こやつさえ殺してしまえば我らの秘密を知る者はない』と申しおつた」

「深い穴の底から聞こえて参りましたが、東十郎の叫ぶ『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーッ』という声でございました。……林に隠れておりました私の耳へまでも、届きましてござりまする」

「おのれ不埒ふちうちの勘兵衛、従来これまで、奪つた財宝を、百姓ばらに担がせて運び、隠匿した際には、秘密を他よそへ洩らさぬため、百姓ばらを、財宝と一緒に、穴の中へ、切り落としたことはあるが、同じ

仲間を、穴へ落として生き埋めにするとは不義不仁の至り、直ちに引き上げよと拙者申したところ、突然勘兵衛め、拙者に切り付けおった」

「あなた様が刀を抜かれ、勘兵衛めと立ち合われるお姿が、林にかくれおりました私にも見えましてござります」

昔の同志、今の讐敵

「ああようやく、私の記憶は蘇^{よみがえ}生^{わし}つて来た。……ああ、これが、道了塚で勘兵衛と決闘した原因だったのだ。……決闘の結果は私の負けだったが」

「あなた様が股を勘兵衛に斬られて倒れられたお姿が、木の間にしに見えましてございます」

「彼奴きやつの方が以前まえから私わしより強かったのだからなあ。……彼奴は私の倒れるのを見て、林の中へ駆け込んで行った」

「勘兵衛お頭は私めを連れまして立ち去ったのでございます。……それから数日経ちました夜、勘兵衛お頭には私を連れて、ここ道了塚へ参り、穴倉を開き、財宝を取り出し、持ち去りましてござります」

「それなのに彼奴め、過ぐる年、私の所へ参り、財宝と天国の剣とを奪つたのは私であろうと云い懸かりを付けおつた」

「それもこれも、勘兵衛めの過去の罪悪を知っておる者、今日きょう日び

では、あなた様と私とただ二人だけというところから、難癖をつけて、あなた様を討ち取ろうとなされたのでございましょう」

「その私はどうかというに、浪人組を解散して以来、ずっと古屋敷に、隠者のように生活くらしていた。日課とするところは、道了塚へ行つて、我々の罪惡の犠牲になつた人々の菩提を葬い、懺悔することだった。……私の心は日に月に陰気になつて行つたものだ」

思い出多い過去の形見を、身に近く持つているということは、多くの場合、その人を憂鬱にし、衰弱に導くものである。たとえば、亡妻の黒髪を形見として肌身に附けている良人ひとが、いつまでも亡妻の思い出から遁がれることが出来ず、日に日に憂鬱になり衰弱して行くように。……薪左衛門が、過去の罪惡の形見の道了

塚を附近ちかくに持ち、そこへ日参したということは、彼を憂鬱にし彼を衰弱させたらしい。

「衰弱している私の所へ、博徒の頭、松戸の五郎蔵と成った勘兵衛が来て、私を威嚇おどしたのじゃ、典膳よ、恥ずかしながら私わしは、その時以来今日まで発狂していているのう」

「又兵衛殿オーツ、私はその勘兵衛のために、髑り殺しにかけられ、コ、このありさまにござりまする！」

「全身血達磨だるま！ どうしたことかと思つたに、勘兵衛めに髑り殺し!? ……どこで? どうして?」

この時嘲笑うような声が聞こえて来た。

道了塚の縁起

「鬪り殺しには府中でかけた！ 理由か？ 強請りに来たからよ」

それは五郎蔵であつた。林から抜けて、典膳の後を追つて来た五郎蔵であつた。年にも似ない逞ましい足をからげた衣裳の裾から現わし、抜き身をひっさげ、典膳の背後に立っていた。

「又兵衛！」と、五郎蔵は、典膳などには眼もくれず、はだかつた襟から、胸毛の生えている肉厚の胸を覗かせ、驚わしのような眼をヒタと塚の頂きの薪左衛門へ据え、呼ばわつた。

「久しぶりで、妙な所で逢つたのう。……さて、くどい事は云わぬ、ここで逢つたを幸い、始末をする！ 典膳と一緒に」

「……………」薪左衛門は、五郎蔵を認めた瞬間顔色を変えた。恐怖で蒼褪めた。しかし、五郎蔵の言葉の終えた頃には、口もとに、皮肉の微笑を漂わせていた。

「又兵衛」と五郎蔵は、相手を呑んでかかった、悠々とした声で云いつづけた。「俺とお主とは、昔は兄弟分、随分、仲もよかつた。そうして現在いまでも、大して怨恨うらみを持ち合っているという訳でもない。二十年前ここでお主と斬り合つたのも、東十郎を殺す助けるの意見の相違からに過ぎなかつた。その後お前の屋敷へ訪ねて行つたのも、実はお主がどのような生活くらしをしているか知りたかつたまでよ。だからよ、何もここでお主を討ち果たす必要はなさそうだが、だがやっぱり討ち果たさなければいけないなあ。とい

うのはこの男の悪い例があるからよ」と、はじめて典膳の方へ眼をやり、抜き身の峰で、典膳の肩の辺を擲^や揄^ゆするように叩いたが、「俺アこの男へは相当の手当をし『これまでの縁だ、今後はお互いに他人になろう、顔を合わせても挨拶もするな』と云つて、二十年前に別れたところ、二、三日前に、みすぼらしい風をして、俺の賭場^{ところ}へやつて来て、昔のことを云い出し、強請りにかかった。……そこで俺は思うのだ、いつお主が、隠者のような生活から脱け出して、俺を強請りに来はしまいかとな。この虞^{おそ}れをなくすにやア、お主をこの世から……」

「黙れ！」と、薪左衛門ははじめて吼^ほえた。「黙れ勘兵衛！　そ
ういう汝こそ、この劍の錆になるなよ！」

薪左衛門は、手に捧げていた天^{あまくに}国の劍の鐔^{つば}の辺を額にあて、
拝むような姿勢をとつたが、

「これ勘兵衛、汝は今、二人の間には、命取るような深い怨恨はないと申したな、大違ひじゃ！ 拙者においては、この年頃、命取るか取られるか、是非にもう一度この道了塚で、汝と決闘しようものと、そればかりを念願といたしておつたのじゃ。そうであらうがな、浪人組の二人頭として、苦楽を共にし、艱^{かんなん}難を分け合つた仲なのに、いざ組を解散するとなるや、共同の財宝を汝一人で奪い、天下の名刀を奪い取り——ええ、弁解申すな！ 典膳よりたつた今、事情^{しっかい}悉皆聞いたわ！ ……のみならず、それらの悪行を、この薪左衛門にかずけようとした不信の行為！ のみ

ならず、辛酸を嘗め合つた同志を穴埋めにした裏切り行為！ 肉を喰うも飽き足りぬ怨恨憎悪が、これで醸かもされずにおられようか！ ……持つ人の善悪にかかわらず、持つ人に福徳を与うと云われておるこの天国の剣が、我が手に入ったからには、汝と我との運命、転換かわつたと思え！ かかつて来い勘兵衛、この天国の剣で真つ二つにいたしてくれるわ！」

五郎蔵は、むしろ唾然とした眼付きで、春陽を受けた剣が、虹のような光茫ひかりを、刀身の周囲に作って、卯の花のように白い薪左衛門の頭上に、振り冠られているのを見上げたが、

「ナニ、天国の剣？ ……どうして汝の手に？」

と、前後を忘れ、ズカズカと塚の裾の方へ歩み寄つた。

と、その時まで、塚の真下に、小岩を抱いて、奄々とした氣息で、伏し沈んでいた典膳が、最後の生命力を揮い、胸を反らせ、腰を蜒うねらせ、のけ反った。とたんに五郎蔵の悲鳴が起こり、同時に彼の姿は地上から消え、彼の立っていた足もとの辺りに大きな穴が開いた。

天智天皇の七年、高麗国こまのくにの滅亡するや、その遺民唐の粟ぞくを食むことを潔しとせず、相率いて我が国に帰化し、その数数千に及び、武蔵その他の東国に住んだが、それらの者の長おさ、剽盜ぞくに家財を奪われるを恐れ、塚を造り、神を祭ると称し、塚の下に穴倉を設け、財宝を隠匿かくした。

これが道了塚の濫觴はじまりなのであつて、勘兵衛、又兵衛の浪人組

どもは、その塚を利用し、強奪して来た財宝を、その穴倉の中へ、隠匿したに過ぎなかった。栓のように見えていた小岩は、穴倉の上置きの磐石を迂らせる、こうかん槓桿こうかんだったらしい。その槓桿を動かしたがために、穴倉の口が開いたのらしい。

「う、う、う！」

という呻き声が、塚の縁から、穴倉の中を見下ろしている薪左衛門の口から起こった。

因果応報

その穴倉の中の光景は？　白昼の陽光ひが、新しい藁束のように、

穴倉の中へ射し、穴倉の中は、新酒を充たした壺のように明るかつたが、頭でも打つたのか、仰向けに仆れ、手足をバタバタ動かしながらも、立ち上がることの出来ない五郎蔵の姿が、負傷したかまきり螳螂かのように、その底に沈んで見えていた。でもその彼の、頭の辺や足の辺や左右やに、白く散在している物像はものかたち何んだらう？ 人間の骸骨であつた。それこそ、この穴倉の秘密を、世間へ知らせまいため、強奪した財宝を運ばせて来た百姓どもを、そのつど、浪人組の者どもは、この穴倉の中へ斬り落としたが、その百姓どもの骸骨に相違なかつた。今、尚、立ち上がるうとしてもがく、五郎蔵の足に蹴られ、三尺ぐらゐの白い棒が、宙へ躍り上がったが、宙で二つに折れて地へ落ちた。股の付け根からもげた

骸骨の脚が、宙でさらに膝からもげたものらしい。また、すぐに五郎蔵の手に刎ねられ、碗のような形の物体が、穴倉の口もと近くまで舞い上がって来たが、雪球ゆきだまのように一瞬間輝いたばかりで、穴倉の底へ落ちて行つた。髑髏どくろであつた。一体の、完全に人の形を保っている骸骨が、穴倉の壁面かべに倚りかかつていた。穴倉を出ようとして、よじ登ろうとして、力尽き、そのまま死んだものと見え両手を、壁面に添えて、上の方へ延ばしていた。仔細に眺めたなら、その骸骨の足もとに、鞘の腐くちた両刀が落ちているのを認めることが出来たろう。武士の骸骨である証拠であり、最後に犠牲になつた伊丹東十郎の骸骨に相違なかつた。その骸骨へ、もがいている五郎蔵の手が触れた。と、骸骨はユラユラと揺れた

が、すぐに、生命を取り返したかのように、グルリと方向を変え、傾き、穴ばかりの眼で五郎蔵を見下ろしたかと思うと、急に五郎蔵目掛け、仆れかかつて行き、その全身をもつて、五郎蔵の体を蔽い、白い齒をむき出している口で、五郎蔵の咽喉の上を蔽うた。恐怖の聲が、道了塚の頂きから起こり、つづいて、氷柱つららのようなものが、塚の縁から穴倉の中へ落ちて行つた。穴倉の中の光景を見て、気を取りのぼせた薪左衛門が、天国の剣を手から取り落としたのであつた。

この時典膳の体が、小岩を抱いたまま、前方へのめり、それと同時に、穴倉の光景は消え、地上には、もう穴倉の口はなく、それのあつた場所には、新しく掘り返されたような土壌つちと、根を出

している雑草と、扁平たいらの磐石と、息絶えたらしい典膳の姿とがあるばかりであつた。

そうして道了塚の上では、穴倉の地獄の光景を見たためか、神靈ある天国の剣を失つたためか、ふたたび狂人となつた薪左衛門が、南無妙法蓮華經と刻ほつてある碑いしぶみの周囲まわりを、墓のように這い廻りながら、

「葉よーッ、来栖勘兵衛めが、伊丹東十郎に食い殺されたぞよーッ、葉よーッ」

と、叫んでいた。

その葉は、林の中で、紙帳を前にし、頼母に介抱されていた。

栞を介かえている頼母の姿は、数カ所の浅傷あざと、敵の返り血とで、蘇芳すおうでも浴びたように見えてい、手足には、極度の疲労つかれから来た戦慄ふるえが起こつていた。

（敵は退けた。恋人は助けた！）

しかし彼は、それをしたのは自分ではなくて、大半は五味左門であることを思った。

（その上私は、あやうく竹で突き殺されるところを、左門に助けられた）

塑像そぞうのように縋り合っている二人の上へ降りかかっているものは、なんどりとした春陽であり、戦声せんせいが絶えたので啼きはじめた小鳥の声であり、微風に散る桜の花であつた。そうして二人の周

困に散^あ在る物といえ、五郎蔵の乾児たちの死骸であつた。

苦行者か殺人鬼か

頼母は、ふと、眼を上げて見た。左門が、乾児たちの死骸の中に立ち、もう血粘^{ちのり}をぬぐつた刀を鞘に納め、衣紋^{えもん}をととのえ、腕組みをし、紙帳を見ていた。その姿は、たつた今しがたまで、殺^さ戮^{つりく}をほしいままにしていた人間などとは見えなかつた。顔色はいつもどおり蒼白かつたが、いつも煤色の唇は赤くさえあつた。目立つのはその眼で、それには何かを悲しんででもいるかのような色があつた。何を悲しんでいるのであろう？ 頼母は左門の視

線が紙帳に食い入っているのを見、自分も紙帳を見た。

紙帳は、血によつて、天井も四方の側面がわも、ことごとく彩色いろどられていた。そうして、古い血痕と、新らしい血痕とによつて、怪ふ奇しぎな模様を染め出していた。すなわち、塔のような形が描かれてい、堂のような形が描かれてい、宝珠のような形が描かれてい、羅漢のような姿が描かれてい、仏のような姿が描かれてい、卍のような形が描かれているのであつた。

それは、諸法具足を象徴あらわした曼陀羅の模様であつた。血で描かれた曼陀羅紙帳は、諸ところどころ所切り裂かれ、いまだに血をしたたらせ、ノロノロとしたたる血の筋で、尚、如来の姿や伽藍の形を描いていた。

（諸法を具足すれば円満の境地であり、円満の境地は、一切無差別、平等の境地であり、この境地へ悟入はった人間ひとには、不平も不安も不満もない。そういう境地を模様で現わしたものが曼陀羅だ。……この紙帳の内と外とで、俺は幾十人の人を殺したことから。……また、この中で、父上も俺も、どれほど考え苦しみ、怒り、悶え、憎み、喜び、泣き、笑ったことか。紙帳こそは、父上と私との、思考かんがえと行動おこないとの中心であつた。……その紙帳が、曼陀羅の相を呈したとは？）

考えに沈んでいる左門の前で、血曼陀羅の紙帳は、微風に揺れ、皺ひだを作つたり、襞こしらを拵ひだえたりしていた。

（少くも曼陀羅の境地へ悟入はるには、思考と行動ともなとが同伴ともなわなけ

ればいけないらしい。……少くも俺は、この紙帳の内と外とで、善悪共に、思考^{かんが}え且つ行動^{おこな}つたのは事実だ)

さつき紙帳へ停まつて啼いていた頬白でもあろうか、一羽の頬白が、矢のように翔けて来て、紙帳へ停まろうとしたが、鮮血の赤さに驚いたのか、飛び去った。

(紙帳が曼陀羅の相を呈したのは、この中で思考え行動つた俺の行為^{おこない}が、曼陀羅の境地へ悟入る行為であつたと教えてくれたのか? ……そんなことはない! ……では、将来曼陀羅の境地へ悟入るようにと啓示^{しめ}してくれたのか?)

左門はいつまでも佇んで考えていた。

やがて左門は頼母の方を振り返って見た。

頼母は、葉に縋られたままの同じ姿勢でいた。

「頼母殿」と左門は穏かな声で云った。「貴殿には拙者は討てま
すまい。少くとも現在いまのお心境こころもちでは。……その心境拙者にはよく
諒解わかります。……さて拙者お暇いとまつかまつる。拙者どこへ参ろう
と、この血曼陀羅の紙帳を釣つて、起居おきふしいたすでござりましょ
う。……それで、拙者を討つ心境となり、劍技わざにおいても、拙者
を討ち取るだけにご上達なされたら、いつでも訪ねておいでなさ
れ。……紙帳武士とお尋ねなされたら、大概是居場所わかりまし
ようよ。……拙者いつでも討たれて進ぜる」

それから、足もとに、今は肩息になっているお浦を見下ろした
が、

「不幸な女」と呟いた。「不幸にしたのは私^{わし}じゃ！ 償いせねば！ ……死なば、わしの手で葬ろう。生き返らば……いや、わしの力できつと生きかえらせてみせる！」

紙帳で、死骸のようなお浦の体をつつみ、それを抱いて、左門が歩み出したのは、それから間もなくのことであつた。

林の木々は、左門の左右から、左門を眺めているようであつた。遙かの行く手に、明るく黄金色に輝いている箇所^{ところ}があつた。林が途切れて、陽が当たっている箇所らしい。その光明界を眼ざして左門は歩いて行くように見えた。しかし、その向こうには、小暗い林が続いていた。でも、その林が途切れれば、また、陽光の射した明るい箇所があるに相違ない。でも、それへは、また、暗い

林がつづく筈である。光明ひかりと暗黒やみの道程みちすじ！ それは人生ひとのよの道程でもある。光明と暗黒の道程を辿って行く左門の姿は、俯向いていて寂しそうで、人生の苦行者のように見えた。

（父上のご遺志だ。わしはどうあろうと、どこまでも、奪われた天国の剣を探して、手に入れなければならぬ）

こう思つて歩いて行く左門であつた。

しかしその天国の剣は、道了塚の穴倉へ落ちて、ふたたび地上へは現われない筈である。天国が地下へ埋もれたことを知つておるものは、一人もないのであるから。たった一人知つている薪左衛門もふたたび発狂して、一切意識を失つてしまったのであるから。

絶対にとげることの出来ない希望のぞみを持って、永久諸国を流浪するであらう左門の姿は、だんだん小さくなつて行つた。

山査子さんざしの藪の中から、その左門の姿を恐ろしそうに見送つてゐるのは二人の武士であつた。片眼をつぶされた紋太郎と、片耳を落とされた角右衛門とであつた。

「こう醜かたわものい不具このさき者にされましては、将来生きて行く気もいたしませぬ」と怨めしそうに云つたのは紋太郎であつた。しかし角右衛門は案外悟つたような口調で、

「いやいやこの刀傷がものを云つて、今後はかえつて生活くらしよくならうぞ。我々は、松戸の五郎蔵親分に腕貸しいたし、刀傷を受けました者でござると、諸方の親分衆のもとへ参つて申してみやれ、

頼み甲斐ある用心棒として、厚遇されるでござろう」

「なるほどのう」

「左門は我らに生活の方法みちを立ててくれた菩薩じゃよ……こんな
ご時世、食えて行けさえしたら御おんの字じやからのう」

——菩薩、苦行者、左門の姿は、遙かの彼方かなたで、この時、カツ
と輝いて見えた。光明世界へ——林が途切れて、陽光の射し溜ま
っている箇所ところへはいつたからであろう。

やがて左門の姿は見えなくなつた。

暗い林の中へまたはいつたからであろう。

しかし、その向こうには明るい世界が！

青空文庫情報

底本：「血曼陀羅紙帳武士」国枝史郎伝奇文庫22、講談社

1976（昭和51）年6月12日第1刷発行

初出：「富士」講談社

1939（昭和14）年9月～12月『中絶』1970（昭和45）年

「血煙天明陣」桃源社に付載して完結公刊

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

血曼陀羅紙帳武士

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>